

自立した女と男を 人間らしい生活を 差別のない社会を  
育み 創り出す

新しい家庭科

We

ウ イ

冬増刊号

1990

# 出会いは歴史をつくる

— アジア・子ども・人権 —

— '90年We夏季フォーラムの記録 —

## ●シンポジウム 「アジア・子ども・人権」

最首 悟／松井やより／関千枝子

### ●家庭科分科会

- a 中学の「家庭生活」をどう扱うか
- b 高齢化社会—北欧の社会福祉に何を学ぶか—
- c 家庭科におけるコンピュータの位置
- d 地域文化から教材を作るには
- e 進学校の女性差別・家庭科差別

f 職場、父母、地域の人々に

理解と協力を求めるには

### ●夫婦別性・婚外子差別をめぐるって

- 女性と政治
- 女の本音を力に—私たちが女性史を学ぶわけ—
- 女の解放・男の解放
- 家庭科につなげる水の話
- 私の教育異空間体験
- あなたに見える？ アジアからの労働者
- メディアの中の性差別

’90年We夏季フォーラムは、もう手帳のずっと前のページになってしまいました。素晴らしい2泊3日が終わりました。その時「終わり」が蒔いていった種子＝「始まり」が一面に発芽して、去年までの小さなプランターではとても間に合いそうにありません。どうしよう!? …新しいプランター、新しい畑、間引き、水やり、そうこうしているうちに、手帳の日付けも書き込まれている内容も、ガラリ変わっていた！ つていう方ばかりだと確信できちゃうのです。その理由は、「参加者がつくるフォーラム」が、一人一人を反映して光っていたから。

もちろん、フォーラムに参加されなかった方や、今はじめてWeを手にするすべての方々とのつながりも「光る」フォーラムを生んだのでしょう。

ふり返れば、ホントにあなたらしく、私らしく、出会って歴史のひと目を編んだフォーラムでした。

今回は、東京が開催地だというのはなし。北海道の方、沖縄の方！飛行機も船も電車もあります。お金の心配を始めた方、近ごろは〇万円貯まる貯金箱というのが出てます。全国の電話線やポストは、完璧に普及してるからアイデアもどしどしと。’91年夏季フォーラムでの再会を。ありがとう。♥

’90年夏季フォーラム実行委員長 若竹穂子



## '90年We夏季フォーラムの記録

### シンポジウム

#### 「アジア・子ども・人権」

2

●シンポジスト 最首 悟・松井やより・関千枝子

●まとめ 乾早百合・古川文月・森住裕子・村上昌子

### 分科会

#### 1 家庭科

a 中学の「家庭生活」をどう扱うか

・石川尚子 24

b 高齢化社会

—北欧の社会福祉に何を学ぶか

・分校淑子 28

c 家庭科におけるコンピュータの位置

・西内みなみ 32

d 地域文化から教材を作るには

・江口凡太郎 36

e 進学校の女性差別・家庭科差別

・武田恭子 40

f 職場、父母、地域の人々に

理解と協力を求めるには

・深野千恵子 44

#### 2 夫婦別姓・婚外子差別をめぐって

・中村英之 48

#### 3 女性と政治

・杉本千代 52

#### 4 女の本音を力に

—私たちが女性史を学ぶわけ—

・平井和子 56

#### 5 女の解放・男の解放

・武田秀夫 60

#### 6 家庭科につなげる水の話

・金子 博 64

#### 7 私の教育異空間体験

—そろそろ着地したいのですが—

・高月フミコ 68

#### 8 あなたに見える？ アジアからの労働者

・根津公子 72

#### 9 メディアの中の性差別

・吉田清彦 76

●がらくた座・チーおさんの人形劇を観て

・安原千夏 80

●子どもと共に

・蔡 和美 84

●スクランブル・トーク 「今こそ、新しい家庭科を」

・若竹キミイ 88

●家庭科ネットワークへのお誘い

・山本美香 90

●映画「ペンボスタこども共和国」を見て

・星名 綾 94

●分散会一踊り子コース「トンネルをぬけると風国だった…」

・川名はつ子 96

●分散会一柿田川コース「水がわき出る柿田川」

・緒方由紀子 98

●アンケートから

100

# 「アジア・子ども・人権」



(左から関さん、最首さん、松井さん)

## ●シンポジスト

**最首 悟さん**——東京大学教養学部助手。生物学専攻。

'68年東大闘争当時、東大全共闘のリーダーとして活躍。

'77年、第一次不知火海総合学術調査団に参加。以後、十年来、水俣に通い続ける。

著書は「生ある者は皆この海に染まり」(新曜社)  
「明日もまた今日のごとく」(どうぶつ社)

**松井やよりさん**——朝日新聞編集委員。アジアと女性解放のテーマを、一貫して追いつけ、現在もタイの少女売春、熱帯雨林の問題などを精力的に取材中。

著書は、「魂にふれるアジア」(朝日新聞社)  
「女たちのアジア」(岩波新書)  
「アジア・女・民衆」(新幹社)など。

## ●コーディネーター

**関 千枝子さん**——全国婦人新聞編集長。

原爆で亡くなった級友たちへの鎮魂の書「広島第二県女二年西組」(筑摩書房)、豊かな繁栄の陰の貧困——、母子家庭の実態を追跡する「この国は恐ろしい国」(農文協)は、関さんのメインテーマでもある。



## ■星子せいこを通して見える世界

### 〈最首 悟〉

末娘の星子は重いダウン症児で、大変水が好きです。房総に連れて行きましたが、浮輪に入って、海にただよって出てこない。八月二十四日で十四歳になります。昨年の十月から生理が始まり生理になると気分が荒立ってくるようです。今度はちょうどぶつかり、海の楽しさと重なって、昼夜逆転し、それにつき合うのが大変でした。哺乳びんで牛乳を飲んで、おむつをしていて、母親に言わせれば、「自然は待ってくれないわね」。そして「おむつをしているので、すごく楽だ」です。智恵遅れの子の場合、生理が始まると、自分で取ってしまうので辛い。おむつをしていると、楽だということです。

言葉はなかなか始まりません。最近は少し物をつかむようになって、しばらく持っていて、握ったりするようになりました。でも口へ持っていくことはしない。食べるのも自分で口へ持っていくことができたなら、よほど違ってくると思うのですが、そうはいかない。ある意味では、星子は無欲のかたまりみたいです。欲のかたまりみたいな親は、色々考えさせられてしまいます。

教育委員会は対象児扱いをせず、猶予願いを親が出すもの

と決めていたようです。それから二年過ぎ、小三になる前に、障害児学級が拡充され、介助の方が安い日当ですけれどつくことになりました。星子には、一人の方がマンツーマンでついて、一時間半程学校を歩きます。これは彼女の授業なのです。一昨年から給食に母親がついて、丸のみですけれど食べるようになり、給食と歩くことで体が大きくなってきました。今、身長百三十センチ、体重三十キロです。おぶうことが多く、三十キロというと、親も年をとってきまし、相当大変なことになってきます。

障害を持っている子を育てる家族の問題、地域の問題、学校の問題と、色々ありますが、星子のいることのメリットの方が多くのように思います。私たち夫婦だけでなく上の三人の子どもにとっても、それはいいほうに働いていると思います。星子自身は、ちっとも考えていないわけですが……。しんどいことも山程あって、束縛もあります。その束縛の中で、自分たちがどう生きるかという課題を強烈につきつけられるので、意識的に生きようとする、わずかのことも、ものすごくうれしいです。親だけでなく、兄弟たちもそうだと思うのです。

星子が社会の中で生きていく条件は何か。一人ではまず普通の意味の自立ということはできません。自分で働いて自分の生活を立てるということはできない人間です。ここにこの

子の人権問題が発生してきます。日本の社会は、この頃またその傾向が進んだと思いますが、「権利としての生活保護」にならないのです。施し物みたいで、それは政府や行政の態度だけでなく、周りの人たちも、生活保護の人に、自分たちの税金で養っているという感じを持つ人が多いです。特に障害を持っている子の場合、自分たちが養っているという感じになっている。知恵遅れの子の人権問題、特に子どもから大人へ移っていくときの人権は未だに非常にプリミティブな段階だと思う。逆に私たち自身が、その自由・責任・義務・権利という四つ組みの概念を、どう消化しているか自問してみると、どうもおぼつかない気がします。

家族として、子どもとしての星子の人権をめぐって、一般的な私たちの人権とか権利とは一体何か、つきつけられているのです。一つには欲望ということがキーになっていると思います。星子は無欲そのもののようですが、音楽を一日に十時間聞きます。何をかけるかの欲望があるわけですが、自分がかけるので、かけたものを拒否する。それで気に入ったところまでかけさせる。これは大変だが、私たちが持っている諸欲求・諸欲望にくらべれば、非常にわずかなことです。私たちは欲望と同時に、競争ということ―労働し、何かを生産し、それを切磋琢磨して高める競争原理というものをどこかで受け入れている。これを拒否すると、現代人でない

ようになってしまう。

しかし、ダウン症をはじめ、知恵遅れの子たちを見ているとおよそ競争というのがない。何か別の民族みたいな感じがする時があります。親には競争意識があって、自分の知恵遅れの子が、隣の知恵遅れの子より、どれほど優っているかを気にする。子どもたちにはそういう気持ちがなくて、違う人間関係を作り上げる。星子も非常にかわいがられている。知恵遅れの子たちがいかに知恵遅れの子どもの世話をしたいか、その世話が見返りなしの世話で、人間関係の原型みたいなものであることがうかがわれます。ここまで立ち返って、一体人間とはどんな存在なのだろうと考えます。責任とは、人権とは何かを、自分としては考えているつもりです。なるべく星子のことについて考えたことは、発表していこうと考えているところです。

### ■アジアの子どもたちに見る人権侵害

〈松井やより〉 私は三月から六月までアジアの国々の観光問題を取材し、アジアの子どもたちのことも見てきました。今年は、海外に観光に出かける日本人が、一千万人に達し、五年間で倍増。九〇年代の終わりには、二千万人が行くと思されますが、その六〇七割は、アジア、太平洋地域です。

日本にとっては、隣近所の国ですが、そこで人々の暮らしや子どもたちのことを見ない、押しきせのバックツアードで新しく開発されたリゾートに行くコースです。そのために、地元の人たちがひどい状況で土地を奪われ、生活を奪われているのを各地で見て、本当に日本人として恥ずかしい思いをしました。

#### ●児童売春

五月にタイでキリスト教系の第三世界観光問題連合が「児童売春と観光」という会議を開きました。タイ、フィリピン、スリランカ三か国の児童売春の報告があり、悲惨な状況がわかったのです。

タイの場合、買春の対象は少女が多く、スリランカは九割が少年です。

フィリピンの場合は、少年・少女半々ですが、有名な少年売春の場所は、バグサンハンというマニラから百キロ程離れた景色のいい所です。ピーク時は、三千人位の少年がいました。主に西欧の白人の観光客が少年の性を買いに来るのですが、日本人も行っているらしい。’88年バグサンハンで二十二人のペドファイル（幼女性愛者）が手入れて逮捕された中に日本人男性も入っていたのです。

スリランカの場合八歳〜十五歳の一万人位の少年が性の対象にさせられています。’81年に行った頃から、少年売春がき

っかけで、性病にかかった少年たちが沢山入院して来はじめていました。当時二千人位と言われていたのに、減るところか五倍にもふえていたわけです。彼らはいくらで買われるか。一回わずか五十ルピー、日本のお金で百五十円位とか。少年をハウスボーイとして住ませ、ほしのままにして、月二十五ドルぐらいと言われています。その少年たちは、観光客が帰国する時には捨てられ、もとの生活にもどれない子が一杯いるわけです。麻薬・非行ということで、少年たちの一生は破壊されてしまう。そういうことが今、アジアで起っているのです。

タイでは少女売春が大きな問題になっています。’87年にタイ観光年という大キャンペーンをして、五百万人もの人が世界中からタイを訪れた。女性の需要が多くて供給が追いつかないので、辺境の山岳民族の少女たちまで買いに行く。七、八歳〜十五歳位までの少女の値段が七千〜三万バートで四万〜二十万バートで買うわけです。タイだけでは足りなくて、最近ではミャンマー（ビルマ）やラオスの山岳民族の少女たちも売られてきています。新聞記事によく載っています。山岳民族の村々にはもう子どもがいらないので、仕方なく四、五歳の子どもを予約してきたというようことが書かれています。

こういう子どもたちの数は色々な推定があり、児童の権利センターでは八十万人、「女性の友」というグループは二十万

人位と言っています。ある施設に収容された五百人ぐらいの子どもたちの出身地域であるタイ北部の九つの村を調べると十三、四歳の子どもは五人しか残っていない。私が行った村も本当に少女が出払っていました。日本人がゴルフ場を作るといので、農民が安く土地を奪われ問題になった村へ行つて、何人ぐらい村の少女たちが町へ行っているか聞くと、四百八十世帯の村で百人も出ていて、日本へも三人行っていると言うのです。国内の観光地のみでなく日本にまで売られていくという、国際的人身売買です。

#### ●なぜ子どもを売するのか

一つは貧困です。バンコクでは年収七万バーツ、北部は一万バーツという開きがあり、農村が貧困のままに置かれています。それに文化的伝統も影響しています。北部では自分の娘を売ることには抵抗が強い。一人の娘が二、三年間分の年収で売れる。初めて現金を手にした農民は、それですまず借金を返し、次に家を建てます。訪ねた村では、立派な家はそういう子どもたちを売るとばす業者の家で、その次新しい家が、娘たちが売られて行った家です。しかも立派な寺が改修されていて、お坊さんの話によると村の人が寄付してくれたという。少女たちが体を売ることによって得たお金を捧げる。少女たちにしてみれば、来世こそハッピーな生活ができるようにと、寄付するわけです。

三番目は、モーターバイクや農機具、電気製品を買う。ほとんどが日本製です。消費文化があつた村にまで入っている。それを宣伝しているのが日本の広告会社です。少女たちを観光地で買う日本の観光客という直接的な関係だけではありません。タイの経済開発のあり方が都市中心で、バンコクとタイ北部の村では7:1の所得格差があるという。そこに大きくかわっているのが日本です。一昨年の日本のタイへの投資、企業進出は、これまでの二十年間分に相当する。日本企業が土地を買いまくっているばかりでなく、日本の経済援助は、ダムや道路を作ったり、工業化のための基盤作りに巨額のお金を使って、貧困の解決には役立っていない。そういう意味で、日本経済とタイとの関わりが、山岳民族の少女たちの悲惨な状況と無関係ではないことを知る必要があります。

今、子どもの権利条約を批准せよと、キャンペーンが行われています。九月に「子どものためのサミット」が、アメリカ・ソ連の大統領、日本の海部首相も参加してニューヨークで開かれます。第三世界の子たちが受けている人権侵害を知って行動しなくてはいけないのではないか。五歳以下で死ぬ子が年に千五百万人近く、毎日四万人の子が病氣や貧困のために死んでいます。ユニセフは九〇年代の目標として、その死亡率を三分の一に減らしたいとしています。

## ●女性の視点で

女の子の死亡率が高いのです。インドでは、女の子が生まれると殺してしまふ。技術の発達で、妊娠している胎児の男女を見分けて、女であれば中絶してしまふ。ボンベイのある機関で、六千件の中絶中、男の子はたったの一件しかなかったという記録が出ていて、女に生まれることが呪われる状況です。バングラディッシュでは、二歳〜四歳の死亡率が女の子の方が男の子より五八%も多いという結果がでている。乳児死亡率の高い南アフリカでは千人の赤ん坊が生れると三百人も死んでいる。この死亡率を減らすために保健の状況をよくしていくということですが。

今年には国際識字年です。日本では余りキャンペーンも行われていないが、他の国では色々な形でやっています。大体一億人の子どもたちが全く教育を受けていない。少なくとも就学年齢の子どもの八〇%位は初等教育を受けさせたいというのが、今世紀末までの目標です。非識字率は女の子が男の子の二倍です。

その他、第三世界の子どもたちでビタミンA不足からくる失明が、バングラディッシュでは三万人、視力低下が九十万人。第三世界ではこの視力障害が七百万人に達しています。国際的に問題になっている「ストリートチルドレン」と呼ばれる数多くの家のない子どもたちの問題、それに「チャイル

ド・レイバー」、児童労働の問題もあります。例えばインドの繊維工場では五歳位の女の子が働いていて、肺結核にかかったりどんどん死ぬわけです。第三世界の子どもたちの生存と発達をどう確保していくか、世界的に力を入れようではないかということで、サミットを開く状況にまでなってきた。その点で日本は国内の子どもたちの問題と同時に、第三世界の子どもたちにも市民レベルで関心を向ける必要があるのではないか。

## ●これからの日本の教育

日本の教育は、人の痛みのわかる人間を育てないばかりか、痛みを持つ子をさらにいじめるような教育がまかり通っています。それが他の国の人の悲惨な状況をひき起こすような社会を形作り、同時にその状況を変えようとする運動にも参加しないということになっています。私はヨーロッパの人たちに、自分の分野や専門に関して、同じ状況にある第三世界の人たちに何かできないかという発想が常にあるのを見てきました。障害者の人はアフリカの障害者のことも一生懸命やる。そういうグローバルな発想―「シンク・グローバリー」(地球的に考え)、アクト・ローカリー(地域で行動する)に学ばなければいけないと思いました。地球的な相互依存の時代と言われ、国境がなくなってきました。資本・援助が国境を越えて働いている中で、私たちの意識だけが内側のみにと



らわれてはいけなと思います。越境する物の考え方、行動力を持つということが、アジアの子どもたちの人権、あるいは日本の子どもたちの人権を考えていくこれからの課題ではないかと思っています。

（まとめ・乾 早百合）

〈関〉 松井さんは今のアジアの大変な状況を、最首さんは身近なお子さんの問題から訴えられて、果たしてかみ合う話になるのか心配でもあるんですが。私も三人は、それぞれテーマは違いますが、弱者の立場から物事を見ていこうということでは共通の視点があると思います。私のテーマは、アメリカでいわれているような「貧困の女性化」が日本でも起こってきていて、これから貧富、強者と弱者がますます二極分化してくるでしょう。そういった弱者の視点から話していきますと、何か出てくるのではと思います。最首さんのお話、人間とは？ というところで終わっていて、何かということがまだ出ていないのですが、そのあたりからおうかがいしたいんですが。

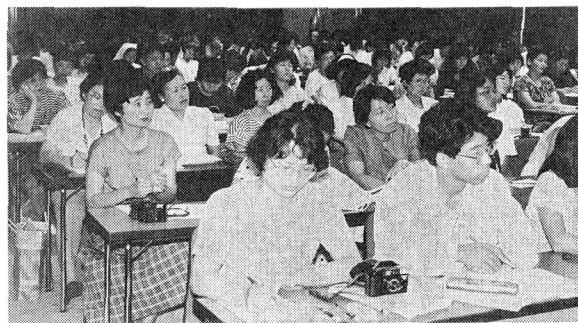
## ■子どもたちに伝えられるか―内発的義務

〈最首〉 松井さんのアジアの子どもの状態のすさまじいお話を聞くと、心密かに日本がそうでなくてよかったという意識が私たちにあると思います。特に子どもたちに。私たちの

世代の貧困の話、経てきた歴史を子どもに伝えようとしても伝わらない。アジアの問題はもっと遠くなってしまっていていかない。逆にまともに引き受けてしまえば、今度はどう生きていいかわからなくなってしまう。子どもが自分で消化して、動くようになるのは簡単な話ではない。グローバルな意識はローカルな意識なしには養われないですね。

私は家庭からアプローチをしている。そこで問題なのは、星子のような存在が生まれてくることに、星子自身は全く関わっていないということです。星子のような存在だからいっそうそう思うけれども、私たち一人一人が、自分に関わりなく生まれてきて、全く責任がない。責任のとりようがない。ところがあるとき、自分が責任を取らなくてはいけないと、社会的に言われ始める。責任なく生まれてきたのに、どこかで自分が責任をもつ存在になることの道筋がついてないと話は始まらないと思います。

反抗している子どもたちの姿を見てみると、俺の命だ、俺の勝手にさせてくれというのがある、その「勝手にさす主義」が今の自由だと思う。その底にあるのは「俺は産んでくれと言った覚えはないんだからな、お前ら俺を勝手に産んでおいて、俺になんかの責任があるかのような面をするなよ」。これは全く正しいわけで、親は、「生まれたんだからしやうがないでしょ」と言う他なく、そこでは誰も責任が取れない



ということを言ってるわけですね。

私たちがそのあたりのことをうまく考えられないのは、日本は共同体的な残滓がいっぱいあって、いたるところムラだらけ、そこでは寄ってたかって人が自分を見張ってるとか世話をしているというのがあって、自分がたった一人で、誰に何も言われず、世話をされなければ、どんな恐怖を感じるだろうという思いがないんです。自分が責任なく生まれてきて、例えば母親の乳首一つ触るにしても、自分が選択している、無意識であれ意識的であれ、

どんな些細なことでも自分が選択してやっている、それが自分を育てている。周りの環境、親の遺伝というよりも、自分が動いて何かやっていることが、結局は自分を作っているという思いが、僕らには欠けている。そう育てられていないんですね。

生まれた途端の無責任ということは、そのとき最大限の自由を持っていることを意味しています。ところが自分が無意識でも選択したことを積み重ねてい

るということは、その限りにおいて自由を狭めている。選択した途端、少なくとも自分がやったという意識が残る限り責任が生じ、それと共に自分が自分を作っていく。そして責任が生じてきたときに、何かしなくちゃいけない、せざるを得ないということ——「内発的義務」が生じてくるわけですね。この道筋が現実起こって来ない限り、やはり、「俺の命だ。俺の勝手だろ」という理解になる。

たかが子どもだとか、子どもは白紙だ、教え込まなければ何をするかわからないというように思っている限りは、子どもの責任は発生してこないです。子どもを寄ってたかって世話しますから。日本の場合、共同体の残滓というのは世話をしといて恩を押しつけてしまう、この押しつけ恩が幅を利かせています。その中では内発的義務なんて育ちようがないですね。今、内発的義務のあらわれであるボランティアの芽がなくなっているといわれます。内発的義務がなければ人間の共同体が成り立たないのに、今崩れている。人権が「勝手気まま主義」の代名詞になりました。内発的義務によって社会をつくっていくというのがない限りにおいて、基本的人権なんてあるはずがない。でも私たちはそういう状況にいるんじゃないか。

「義務教育とは何か」を十七、八歳の若者に書かせると、教育を受ける権利を持つ子どもに対して、社会や親が持ってい

る義務であると答えるのはほとんどいいない。いやいやながらの国民の義務として子どもたちは教育をとらえる。こんな教育はいらないのは当たり前です。とにかく本を読みたい、字を読みたいという熱望は、今消えている。

〈関〉 どれをとっても何時間も話せることばかりで收拾がつかないのですが。では、「日本の子どもはみんな幸せか、この過保護状態の中で幸せなのか」というとどうもそうではない。それをアジアと絡めるとどういうことなのか。アジアの貧困の問題に対して、日本人の場合、非常に傲慢な、あの国は駄目なんだ、日本人は賢いから繁栄しているんだみたいな非常に一面的な見方が強いわけですが。

## ■「開発教育」をこそ

〈松井〉 最首先生が、子どもは親が体験した貧困のことや、アジアのことなんか伝えられないと言われましたが、わからせる努力をどれだけしているかということです。アジアの子どもたちって、とっても魅力的です。家族全体が生きていくためにできることは何かって、責任をもって、自分の存在価値を体験的に身につけて、やれることをやっている。日本の子どもの過保護のような状況と全く違います。アジアに行って日本に帰ってきたとき、「日本の子どもたち、何わ

がままやってんだ」って言いたかったですね。それは今の社会がそんな子どもを作ってるんだから私たちの責任ですが。

ヨーロッパでは、地球的な問題をどのように子どもの教育に取り入れるかを実に工夫しています。例えばスウェーデンのある中学校ではアフリカのザンビアから帰ってきた保健婦さんがスライドを見せながら、ザンビアの赤ちゃんがどんなふうに死んでいくのか、どうしたらいいのかなどを生徒たちと話していました。また、北欧全部の国の子どもたちが労働の日を決めて、親や地域の人に仕事をもらい、得た収入をインドの学校に送り、インドの子どもたちから絵を送ってもらったり交流をしている。日本の子どもたちももっと働かさなければいけないんですよ。家事も手伝わずに塾に行ってる。労働と切り離された頭デッカチのお化けのような人間ができるわけです。第三世界の子どもの素晴らしさを、日本の子どもたちに知らせる必要があると思います。

そのような教育活動を、ヨーロッパでは、「開発教育」、あるいは西ドイツでは、「第三世界教育」って呼んでますが、素晴らしい教材がいっぱいあります。家庭科の授業でカレーライスを作るとき、インドの子どもたちのことを話す。紅茶を飲むときは、スリランカの紅茶のプランテーションで働いている女たちのことを話す。開発教育は、どの教科でもやるわけですね。

開発教育の最初のステップは、第三世界の子どもの素晴らしさ、生活や文化を知らせる『異文化理解教育』です。そんな雑誌もいっぱい出てます。違う文化に対する興味を沸き立たせて、それを持ってる人たちを尊重し、尊敬していく態度を養うことです。

次のステップは、そのような素晴らしい文化を持っているアフリカの子どもたちがなぜ瘦せ衰えて死んでいくのかという、貧困などに対する構造的な理解です。それは彼らが悪いのではなく、先進国の我々がアフリカを植民地にして何世紀にもわたって収奪してきたんだという歴史的な問題ですね。アジアなら、日本が中国や韓国に対してしたこと、ですね。そういう歴史的な原因を教える。そして貧困をもたらし経済の仕組みを、理屈ではなく物を通して理解させることが必要です。

たとえば日本がマレーシアから輸入しているパームオイル、それでマーガリンを作ったり、インスタントラーメンやスナック菓子を揚げたりする。ところがプランテーションでパームオイルを生産しているのは、五、六歳の子どもです。一杯のインスタントラーメンでマレーシアの子どもたちのことを考える……材料はいくらでもあって、私たちの暮らしと第三世界とのつながりを子どもたちにもっと知らせる工夫を、日本でも行う必要がある。

昔は、「お百姓さんありがとう」と、子どもに言わせてましたが、私たちの生活が他所の国の人たちの労働によって成り立っているという視点、私たちが食べている物が国境の向こうから来ている、そこで生産している人たちの姿を、いかに見えるようにしていくかが大きな課題ではないか。

人権の国際化を今考えなくちゃいけない。人権は一つの国の中だけでは守れない。グローバルに考えなくては守れない。それが最も遅れているのは日本です。日本の問題だけを考えていて、よその国での人権侵害に対して何一つ貢献しようとしなければ、ほんとうに自分勝手な人たちだと見られてもしようがないと思います。

〈最首〉それを妨げるのは何か、やはり私たち自身に問題がある。結局俺たちだってやってきて、しかもそこから抜け出したいという意識は否定できない。それをどう打ち砕くかが問題です。考えてみれば俺たちがやってきたの自負は過去のことではない。貧困もたかだか一世代前の話で、例えば国民学校世代は、どうしても子どもに甘くなってしまう。「欲しがりません勝つまでは」で全部押さえられてきたことを、せめて子どもには味あわせてやりたい。中学までしか行けなかったらせて高校に、高校までなら大学へ。

知らせれば子どもはわかるはずだ、というのも、開発教育の必要もわかる。いろんな努力をしなくちゃいけない。でも

それを妨げているのは私たち自身、親だと思う。親は甘い、自分に甘いから。そんな生活の中では、必要がなきゃ新聞配達なんかさせないでしょう。

## ■子どもたちに広い視野の教育を

〈松井〉 確にかつて日本だからゆきさんのように身売りがあった。アジアの状況は日本が経てきた道、それを抜けたから日本は立派だ、アジアの国は抜け出していないという蔑視感が確かにあります。それはやはり弱肉強食、優勝劣敗、勝てば官軍思想なんですね。デンマークでの開発教育で、ヨーロッパとアフリカの生活になぜこれだけ開きが出たか、それはヨーロッパがアフリカを植民地として支配して、奪い取ってきたからだ。収奪する側に責任を感じるという見方を強調していました。朝鮮の分断やカンブチアの状況のように、国際的なパワーポリティクスの中で犠牲になっている小さな民族の痛みがわかれば、日本が偉いんだという思い上がった態度だけで物事を見ることができないはずで、五十億人の人間のわずかに二割が生活に困らない先進国で、四分の三が貧困な第三世界に住んでいる。その格差が今世紀末にはさらに拡大すると言われています。だから、子どもたちが小さいときから広い視野を身に付けるようにしないと「日

本人が優秀だから発展できたんだ。アジアの人たちは怠けるからおくれてるんだ」など、とんでもない見方になりますよ。

第三世界では怠けているどころか、朝から晩まで身を粉にして働いて生活できない状況があつて、日本に「稼ぎに來たりしている。そのような不公正な経済の仕組みは、日本にも責任があるのです。それを少しでも変えるには、第三世界の人々の声に耳を傾ける必要があると思います。それもせずに日本だけ経済発展を続けていけば、非常に醜惡な民族と思われるでしょうがないと思います。

確かに今の日本の社会が、第三世界の問題に目を向けることを妨げているのが問題で、その妨げになっているものを少しでも取り除く努力を日々始めるしかないと思います。誰を待っていても始まらない、自分が自分の場で何をできるかと考えることだと思います。開発教育では、そういうグローバルな問題を私たち一人の力では変えることができない、という無力感との闘いが最も重要だとよく言われています。一人の人間には何もできないという諦めが一番恐ろしい敵、自分との闘いであると。日々の生活を見直していくところから始める、そういう批判的な視点を持つことがまず必要だと思います。



## ■子どもたちに入らないか、入れざるを得ないか

〈最首〉 それに反対することはないんですが、どう実地に持っていくかとなるといたるところ問題だらけで。子どもたちの中には自分から塾に行ってる子もいるし、子どもにもそれなりの関与の仕方があり、生き方がある。子どもを食わしたり、教育したりは親の義務だが、今はほとんど高校、ひょっとすると大学までが親の義務、それで子どもは当然ながら働かない。バイトに行ったりしても、それでブランド物を買ったりしてる。そこで子どもに働いている思いは、僕らは共同体のしがらみ、家父長制から抜け出てきて、今結構自由なんだ、ということですよ。みんな結構謳歌している、そこへなんの犠牲によってそんな生活ができてるんだって、いくら言っても駄目なんです。入らないものは入らないんであって、結局は親の生き方しかないと思うんですね。

〈松井〉 二十一世紀に今の子どもが社会を担っていく、日本の経済がこれだけ国際的につながりあっている中で、日本だけでなくものを語れない時代になってくる。若い世代の中に、こういう暮らしじゃ駄目だと思う人たちが少しずつ増えていきます。亡国寸前のカンブチアに、西側の草の根の援助団体の人たち、しかも若い女性が来ていた。その中に、一人の日本人

もいない。私はこれはスキャンダルだと思ったんです。そのような仕事、分野があることを、日本の学校教育の中で知る機会も、勉強しようという刺激を与えられることもない。日本という社会が、これだけ得た富を地球の他の人々に還元していくという思想を、戦後培ってこなかったんですよ。

西ドイツやイギリスの市民団体の活動を見て、困っている人たちに国境を超えて何かをするという考え方を持つ人間と、自分だけお金を儲けて名画を買いまくり、ゴルフ場をどんどん作ったりしている人間と、どっちが人間として価値があり、尊敬すべきかをつくづく考えたんです。若者たちも活動にどんどん参加するいろんな仕掛けができています。だから国際的に責任を果たすという活動は、若い人たちの中に入っていくかないことはないと思います。そうなるように、学校教育や、社会教育を変えないといけない。マスコミでも、西欧では「開発問題ジャーナリスト」が、第三世界の問題を日々市民に知らせているが、日本はこの面がまだまだです。

医学では熱帯医学の教育をしていて、第三世界で治療する医者を養成しています。栄養学では、第三世界の栄養失調の問題を重視しています。日本では、グローバルな問題であるという市民の意識が薄く、社会正義の問題について活動する人たちが少ない。それに割く時間が日本人は少なすぎるからこそ経済発展したんです。だから日本は人権後進国だと思いま

す。グローバルな問題について関心を持つ若い人たちがもつとふえるように、教育の場にいる皆さんが、まず自分も考え、そして若い人たちと一緒に考えていただきたい。二十一世紀、日本だけが孤立して生きられないのですから、絶対入らないと否定的に考える必要もない。非常に壁は厚いですが、市民の力でそのやり方を工夫していけばまだまだ余地はあると思います。

〈最首〉 微妙にずれているんですね。やはり障害児を抱える者として、そう簡単に入らざるを得ないとは言えない。ボランティアひとつとっても、ダサイと言いつてるような、若者の意識が向かわなくなっている状態で、世界における矛盾をどれだけ言っても変わらない、自分たちの構造的問題ですから。その答が「入らざるを得ない」じゃ答にならない。

〈松井〉 入るようにその努力のやり方をお話したわけですが……。

〈最首〉 やり方は聞きたいけれど、問題はそれから先のことで、僕ら自身、家庭や学校などの現場ではほとんどお手上げです。この日本の独自の構造を探らないと、解決が出てこない。ヨーロッパの活動、意識はキリスト教倫理と関係があって、僕らの意識と全然違う。その辺を検証していかない。そして頼るのは子どもたちしかないんだから、その子どもたちがどう育つかに對して、どこまで介入していいのか、

相当突っつかないと何も出てこないと思う。少なくとも障害児を見る人々の目を感じる者として、そんなに楽観的じゃない。

〈関〉 日本の中の貧困も拡がってきています。日本が繁栄しているというけれど貧乏がないわけではなく、母子家庭などは非常に厳しい現実があります。その中で、子どもは自分の貧乏が見えていない。親が苦勞していても、働くこと、新聞配達も考えもつかないという事象が起こっています。親の生き方とおっしゃいましたが、それですべて解決できるとは思わない。こういった問題も含めていただいて、会場からの御意見を交えながら話し合いたいと思います。

(まとめ・古川文月)

## ■フロアーとの意見交流

〈東京・江藤文紀〉 日教組が分裂する中で、新しい組合を作り、西多摩一七五名で頑張っています。最首さんは大人や親が自分のやることを通してみせるしかない。松井さんはアジアとかいろんな所で見てきたものを子どもにしつかり伝えないといけない、僕はわからないですね。現在の状況とか自分の感じているものとか、しっかり掴みきれないという気がしている。そういう中で自分が本当に心を動かされる所

から始めて行くしかないという気がしている。

〈東京・根津公子〉 分科会でアジアの労働者の問題を話し合いました。少なくとも私の生活を問い直し、自分自身が変わっていくことをアジアの問題を通してやりたいな、やらなきゃいけない責任があるんじゃないかなと思ったんですね。

私は一年半程前、マレーシアに戦跡を巡る旅をしたんですが、豪華な食事で冷房の利いた部屋で、そういう風に考えたら良いのだろうと思いました。授業でこれをあれを教えないといけないということも大事なんだけど、私の中でどう自分が変わりたいのか、その所がないと嘘になる。子どもにも伝わらないし、私自身も変わらないと思います。

松井さんのおっしゃったことはよくわかり、そこをやってこなかった日本人の責任とは何なのか、よく考えないといけないと思います。思いながら、最首さんが障害者に対する日本人の接し方に対して感じられることもそうなんだろうなあ、そういう所からだったら、どうせ入りっこないよと思われるだろうなと聞いていました。でもやりたい所から、やるしかないなあと思いながら聞きました。

〈長野・島田一生〉 松井さんが言われるように、第三世界の人たちの生活との繋りを分かっていく努力はする必要があると思います。長野地方のコマーシャルでレディアス社のダイヤモンドの宣伝があります。これは、南アの資本が入って

いて、黒人労働者が劣悪な条件の中で働いている。それを知らないと結婚式なんかで愛情の表現としてダイヤモンドを買って、二人で幸せになろうねと言っていることが、実はアパルトヘイトを支える方に否応なくからめとられてしまうというところを知っているのと知らないのとで少しは違うと思う。

〈松井〉 ちなみに日本は世界のダイヤモンドの20%を輸入消費しているそうです。

〈島田〉 子どもにすごく矛盾を感じながら対しています。横浜の寿町で識字学校をやっている大沢さんをクラスに招いて話をしてもらいました。何が残ったか、ギャップがものすごく残ってしまった、自分の入口がわからない。だからアジア、南ア、在日朝鮮人の問題……をどこでどう自分の生活に切り結んでいけるのか。どこまで掘り下げていかなければならないのかと考える時、相当の決断が必要になると思います。お二人の話で勇気づけられます。一人一人が自分を見つめ直したり、子どもと出会っていくことが大切なんじゃないかと思いました。

〈東京・武田秀夫〉 最首さんは構造ということを、松井さんは入るはずだとおっしゃった。僕は元教師で最首さんの「でも入らないんだよなあ」という方にリアリティーを感じます。ヨーロッパと日本の構造が違うのか、構造ということをお聞きしたいし、松井さんにもどういう構造に変化してい

けば入るようになるのかという辺りのお考えを聞かせていた  
きたい。

〈松井〉 どうして自分が入ろうとするという受け取り方を  
していただけないか残念です。

〈武田〉 入らないという実感があるんです。やってるんで  
すよ。皆ね。

〈松井〉 私の言ってる構造とは、アジアの貧困だとか抑圧  
だとか引き起こす経済構造ですね。企業が中心になってその  
企業に捕われて働かされている今の日本の労働のあり方と  
か、日本がそういう問題に取り組めるように、すぐになると  
は言わないが、人間は変わるといふ確信を持っています。最  
近読んだ『あゝオモエ貴女の涙は』という韓国で出た本は、  
息子や娘が殺されたり抗議の自殺をしたり、長く投獄され  
ている、二十一人のお母さんの手記です。最初は半狂乱にな  
って取り乱しますが、それが娘・息子を上回るような、勇気  
のある解放の担い手になっていくことが淡々と書かれていま  
す。そのようなことがアジアの各国であるわけですね。私は  
実践ということと行動ということを常に第一に考えます。そ  
れは誰かが行うのではなく、自分は今日明日から何ができる  
か、熱帯林の集会があったら行くか行かないかということ  
を  
決断することなんです。

## ■ ヒトと人間

〈最首〉 明朝水俣に立ちます。連れ合いはいつだって出る  
のを歓迎しない。毎日仕事がありますし、星子を風呂に入れ  
るのが最低のノルマでもあるので、私が居ないと母親にモロ  
に負担がかかって、夜交代に寝ることもできなくなるので。  
母親が消耗すると星子も消耗しちゃうんです。私の一番の問  
題は、ここでも話をしたい、水俣にも行きたい、しかし家から  
出られない、そこが私の起点・終着点みたいな所です。出発  
点は、昭和四〇年に生物学の先輩格になるのが私を居酒屋に  
連れて行って、「この男は日韓会談に反対している、あんた  
たちのためにやっているよ」と言った途端に、在日韓国人の  
女将が、真青になって怒って「すぐ出て行ってくれ、二度と  
来てくれるな」と言った。私は冷水を浴びたようになった。  
その時、日韓連帯なんていうことを気軽に言うことが、どん  
なにとんでもないことがわかった。それが東大闘争などに  
加わる基盤になるわけですけど。そういう所から、家を一  
日空けられるかどうかという所まできていて、暮らしの中で  
考えが変わった。

他の国の人々がどのような状態で、日本がどのような責任  
があつてとか、種々情報は入って来るけれど、それが日常の

暮らしのスタイルにどういう風に響くのか。例えばミルクの箱を広げて取っておくとか割箸は使わないとかの行動をしても、それがやっていることになるのかという意識にもなる。暮らしという繰返し構造の頑迷さの中で、子どもをどう育てていくかということが一番難しいんだという実感を持っているんです。

星子のいる生活は、朝起きてから晩寝るまで緊迫してゐるんです。そこに世界の大勢がなかなか入ってこない。しかも子どもに伝えようとしても上手く伝わっているかどうかかわからないと言ってるんです。

しかし、私は絶望してはいない。何故かというと、人間は一体何だという思いが単純な所までいつてゐるからだと思う。私は生物学的に片仮名のヒトはヒトとして生まれてくるというのがいいと思う。脳がない状態で生れてきた子を「人間」というのでしょうか。

私たちが誤まつた点は、「人間」だという所から出発して、他の生物と切り離している。松井さんが生き生きと描くアジアの共同体の中では、人間と他の生物との区別を余りつけてないんじゃないか。共同体の特徴は人間が生きているところだけじゃなくて自然的な生命と一緒に暮らしているところにある。星子を見ていても、これが「人間的」と問われて、文句なく「星子だって人間だよ」というのは非常に難し

い。そこを何となくごまかしちゃって「当然ながら星子は人間だよ」という所からスタートしてしまうと、問題がのっぺらぼうになってしまう。ある意味では星子は人間ではなくてもいいのです。生命を持った貴重な存在であればいいという時もあるんです。そこらへんの枠を広げないと安心して星子と暮らしていくことができない。

「人間」という規定が、アジアの共同体とキリスト教的倫理世界では、非常に違います。日本はその双方とも違う人間観を持っていると思う。非常にあやふやな感じで共同体的な人間関係も残しているし、一方では近代的な関係の中で個人が疎外されて丸ごと一人一人に分断されて、存在価値を失った人間もいるようだし、敬虔なキリスト教徒も仏教徒もいるし、新興宗教者は若者にいっぱいいますしね。統一されたある人間観というのは無いような、それが人間観と思うくらいです。それを啓蒙で統一させようという教育は必ず失敗すると思います。多様性を認めて人間という枠も人権という枠も取っ払って、本当に人権が必要なら、そこから出発してもらう一度考えようというくらいにしないと。

〈関〉日本人は画一と言いますか、一斉に規制するのが好きで、多様性を認めることがこれ程出来難い国民はいないんじゃないかと思えます。その辺を踏まえながらご意見を。



## ■再びフロアーとの交流

〈神奈川・津田正夫〉 アジアに何回か行って、息子を是非やりたいと思いましたが「汚いから行かないよ」という。仕方ないからちょっとアメリカでホームステイさせたら、帰って来たらアジアに行きたいと言い出し、ベルリンの壁とかにも関心が出てきました。ストリートにアジアに行けというようなことで人間が育つのではないことがわかりました。松井さんにこんなにひどいんだ、お前ら何してるんだと言われれば言われる程クールになる。どんなに楽しいか、目が輝くかとこちらをひらいていていただとありがたいのですが。

〈松井〉 楽しいというんではないですね。余りにも重たいんです。重たい厳しさの中でそれを変えようとしている人たちに励まされるとか、力を得るとかいう感じで、「楽しい」というのは、日本語のニュアンスとして軽過ぎる感じがするんですけどね。アジアに行く度に風船が膨むようになるんですけど、日本に帰って来るとシュンとしぼむ。日本の社会には目に見えない抑圧がある。そこからの解放感といった方がいいかも知れませんか。日本では女のくせにどうのとか日々感じる。アジアに行くと余り感じない。確かに階級的な差別はすごいですけれど、男女の差別について日本ほどはつきり

したものがない。インドで花嫁さんを焼殺してすごい社会だと思えますけれど、一方でインドの女の人たちのパワーに圧倒されますね。

何処に行っても感じるのは日本の女性が存在感が無いというところ、フィリピンの女性のあの力というか逞しさとか——例えば高校生に相当する年齢の工場の女性たちと話をしても自分の意見があるんですよ。

インドにも字が読めない女性がいっぱいいます。運動はどのような形で行われるか、自分たちの怒りを、太鼓を叩くことによって伝える歌が沢山ありますね。創造性というのか日本女性の運動では想像もつかないような豊かな表現方法を持っているんですね。そういうものから学び、感動することが多いわけですね。アジアについてネガティブなイメージだけであることを残念に思います。

もう一つ、アジアは一つじゃないということです。「アジアはどうですか」と言われると二つの点で困ってしまふ。日本だってアジアなのは何で他のアジアのことだけを言うのかということと、もう一つはアジアといっても韓国とインドと全く違う文化を持っている。目が眩むような豊かな多様な文化です。そういうものに触れる喜びは行く度に新しい発見があります。ぜひアジアの旅をして直接人間にふれていただきたい。

(まとめ・森住裕子)

〈兵庫・緒方由紀子〉 松井さんの児童売春などの話をきいて、これだけ、買う人を送り出している日本、この国はどうなっているんだろうかと思えます。今育てている子どもたちも、そうやっていくとしたら、どうしたらいいのだろうかと無力感に陥ります。でもできることを一つでも見い出していかねば。日本は弱者に冷たい社会、しわよせしていく社会で、それがアジアに対する冷たさにつながっているのではないでしようか。表面上豊かにみえて、日本の中でもだんだん貧富の差は広がっているが、そういうところを、見ないように見ないようにしている気がします。

〈熊本・桑畑美沙子〉 津田さんが楽しいことを語って欲しいと言ひ、松井さんは重すぎて楽しくないと言ひましたが、お二人の楽しい意味が違ふと思ひます。私は、サークルで実践集を出したり、地域で母親としていろいろして、みんなには「たいへんね」と言うけれど、本人はちつともそうじゃない。やらないで我慢して、一見平穩に暮らす方がよっぽどストレスフルです。松井さんも、原稿書いてボツにされて今度こそやってやろうというところに生きるエネルギーが生まれてゐるのでしょうか。そのところをもう少し語って欲しいと津田さんは言ったのだと思ひます。

しんどいけどやらなければ、じゃなくて、運動することが楽しい、そういう運動をやらなければということですよ。

〈埼玉・中嶋里美〉 最首さんの話と松井さんの話は違ひてゐるようで共通点があります。最首さんも、いろんなところに「ムラ」があるとおっしゃった。松井さんも、世界の中でこれほど人権ということがわかつていない国はない。世界の日本の日本「ムラ」と。「ムラ」を具体的にどう開いていくかは、人それぞれでいいと思ひます。私もケニアに行つて、第三世界の女性たちと交わつて、いろいろな援助について考えてきましたが、開発教育というところまでは考へてこなかったで、これから考へていきたいと思ひます。

日本は、夫婦でも教師生徒間でも、これほど会話のない国はないといわれています。だから文化が育たないと。お互いの本音を語り合うには時間がかかるけれど、そのためには当然働きすぎをやめなければならぬし、豊かになるためには、具体的にいろいろやる必要があると思ひました。

〈東京・富沢由子〉 シンポジウムの三人の人たちが、私の問題意識と重なつて、すばらしい人選でした。六年前に婚姻外で子どもを産みましたが、午前の分科会で笑いながらこの問題を語れるようになったと、自分でも驚きました。というのは、産んでから三年間は、こんなにはいたくないのちに対して、残酷な差別を堂々とやって平然としてゐられる社会とはいつたい何だろふと感じてゐました。そういう問題意識をもつて育ててきたが、子どもがやがてテレビ等で欲望をかきた

てられ、男女差別的な価値観を植えつけられます。必死でこの子を育てているのに、私はこんなふうにごの子を育てているのではないと、狂おしくらいの憤りを感じます。私が産んだ子どもは人間を抑圧する側に立ってほしくないと、祈るような気持です。解決しなければならぬ問題がこんなにあるということをきちんと伝えたい。

〈静岡・平井和子〉 女性史を手段にしていろいろなことを考えていきたいと思っています。中学校で社会科を教えています。子どもに今、世界で起っていることを伝えたい。さきほど最首さんが、そういう問題を投げかけるけれど、受けとめる側の子どもはどうなんだろうかと言われましたが、いつもそれを感じています。一生懸命教えても、へたに伝えようと、日本に生まれてよかった、になつてしまうからです。

去年東欧で大きな変化があった時、一年生の女の子が毎日、新聞を切り抜いてもってきました。「壁をのり越えた人の顔がすごくきれいだった。突然壁ができて、大好きな人と会えなくなる。その悲しみを考えると、あの人たちのきれいな顔がものすごくよくわかる」と感性で受けとめています。中学生ってすごく素敵です。私たちが踏みつけている人たちがあるということは、実はめぐりめぐって私たちも差別される存在なんだということに気づかせたいと願っています。

〈大阪・遠藤紀子〉 こういう集まりにでるときに、子ども

にるす番させるので、とうとうファミコンを買ってしまいました。そうすると気げんよく送り出してくれます。現実の中で、自分が育てたい子と実際に育っている子のギャップが大きい。女性差別はあかん、母さんはファミコンきらいだ、どうして大人が子どもに戦争好きになるようにするのかなど、言葉で言うが、子どもの世界から見ると、ダメだダメだの連発で彼らが豊かさを切り開いていく土壌がありません。どういう風に子どもに入っていくか、不安です。そんな中で一つホッとしたこと、朝鮮人の多い学校で民族学習として文字や文化を保障する取り組みをしています。そこに子どもを連れていくことがあります。朝鮮の農家は、楽器をもつて踊り、すごい迫力があります。子どもたちが楽しそうに踊っていると、自然にそこへ入り込みます。侵略の責任を私たちがどうとるかということですが、朝鮮の子どもたちと共に楽しさを味わいながら、そういうものをひき受けていくようなことができないかなと思います。松井さんが、正義のために費す時間が少ないと言われましたが、できたら親子ともに、楽しみながらそれを自分たちのものにしたい。

〈関〉 今、豊かで貧困はない。貧しいのは精神だけというようなマスコミの論調があります。ひどく腹が立ちます。少数かもしれないが貧しい人はいるのです。弱者切り捨て、働かないものは怠け者で、自分が悪い、という考え方。日本人

の権利意識が弱い中で、一番の弱者、生活保護世帯などへの圧迫がひどくなっています。先日、生活保護受給率が低下しているという記事がでいましたが、申し込んでも切りすてられ、むりやり辞退届を書かされたという現実があるので。昔は、貧しいことは、少なくとも悪ではありませんでした。今、貧しいことは恥ずかしい汚いことになり、いじめの対象にもなります。朝シャンをしない子は不潔だといわれ、小さい流し一つで、トイレも風呂もない家の子が、朝大なべで湯をわかつて朝シャンをし、母さんは朝ごはんも作れない。そうしないといじめられるという。こうした社会になっています。

こうしたことがアジアをみる目、蔑視につながってきます。さきほど子どもを売ったお金で日本の電気製品を買うという話がありました。もののPRがはらんする中で、なんと人間は金とか欲望に弱いものだと思います。それを責めるだけでいいのでしょうか。少なくとも日本の貧しい家庭で、昔どおりの貧しい生活はできません。テレビや洗たく機なくともいいじゃないかといっても、もはや通用しません。ちがった型の貧困になっているということを見すえなければいけないと思います。

## ■自己主張しないものに関しての他者主張を

〈最首〉 私が今切実にかかえている問題は暮らし。この途方もないくり返し労働に私は慣れていない。それに慣れなければ、正直言って何を言ってもダメだというところがあります。また、家庭の労働は労働単価がはつきりしていない点、さらに、評価も査定もない点、こんなやりがいいの点、ない点とみなが言います。これはものすごく大きい問題で、たとえば教育は完全なあめとむちの評価体系にあるから、その中で育つと評価されないことに耐えられなくなるのかも知れない。家事労働ということに、体も目も心も開くということがないと、いろんなことがいつまでたっても、何をして、何を知ることとすることが別だということで、どこかでからめとられて、子ども自身も、競争社会にのり出していくことを是としてしまわけてです。

次に「楽しい」ということにはバイタリテイの横隘ということがあるだろうと思う。星子と暮らしていて、バイタリテイがあると星子がまいってしまふということがある。まわりが活気づくと落ち込んでしまふ。バイタリテイ、生命力等いい価値なんだろうが、あながちそれを家庭にもち込めないというところがあります。もう少し静かな生活が欲しい、静か

なくり返しが欲しい。そして、個人が権利を自己主張しないで済むように、個人が人間という枠をきっちり決めないで、少しあいまいにしておいてほしい。権利主張、自己主張をしないで暮らせるようにしたい。もともと権利概念とは、シモーヌ・ヴェイユを借りて言えば、自己主張しないものに対して、社会的に他者がその個人の権利を認めていくという他者主張でした。それが今ひっくり返って、自己主張するところにおかしさがあると思います。

最後に、東欧問題について。ソ連にしても東欧にしても、賃金は安くても、多くを求めなければ非常に安定した生活が営めました。貧富の差がない。自由、横隘、競争、クオリティをいうのは、ある限られた人のものなのだ。多くは、貧しくたつて安定している方がいいのだという議論がある。このメリットを全く認めない議論は片手落ちだ。ベルリンの壁は壊されたが、待っているのは貧富の差であり、競争意識のあおり立てであり、消費意欲のかきたてだろう。早速、老人障害者、病人は困ることになる。日本のように、工業管理社会で、家族とも切り離され、ヤスリにかけられて、個人の存在価値がなくなつて、教育もままならない。立派な大人として子どもに向かえないとしたら、ソ連や東欧がそんなにひどいとはいえない。個人とか権利の問題、私的所有の問題などみんなからんでいて、それらを考えることが非常に大切だと

思っています。

## ■日本をもっと人間らしい社会に

〈松井〉 一人一人の場でどうしたらよいかという質問がよくあり、それぞれの場で考えてもらうしかないと思うが、参考までに、なぜ今、西欧でアジアなど第三世界にかかわる運動が盛んになっているかを述べます。

一つは、キリスト教的な伝統の中で、ユニバーサリズム、つまり国境という思想にとらわれない考え方があります。

二つめは、民主主義。つまり、自分たちがやるんだということ、たとえば援助とは政府がやるものではなく、自分たち市民の力でやっているという姿勢があること。

三つ目は、かつての植民地支配に対する深い反省の運動と結びついている。たとえば、最近独立したナミビアを植民地支配したのはドイツでしたが、その支配のために繁栄したブレーメンという都市では、「私たちのナミビア」という社会科学教科書をナミビアの人たちといっしょに作った。その内容は目を覆うような、ドイツによる徹底的な奴隷労働のありさまを、そのまま描いています。しかも、それをドイツ語に訳して、ブレーメンの子どもたちも学んでいます。日本はどうだろう、朝鮮人の強制連行さえ書いてない教科書もあるとい

うのに。

四つ目は、地球は相互依存の時代になっている、という認識。その中で責任は先進国、豊かな国の側にあり、富を奪ってきているんだということ。「南から北への援助をストップせよ」というヨーロッパの運動のスローガンがあります。北から南に援助をしていると思ったら大まちがいで、南から北へ富が流出している。日本は世界最大の海外投資国、援助国、金貸し国、債権国、在外資産をもつ国で、その利子で儲けています。監視していかなければ。

五つ目は、第三世界が国内に入ってくること。ヨーロッパでは、二〇〇〇万人にもものぼる移民、労働者が入ってきて、共存を迫られてきました。日本は80年代に入ってからだが……ヨーロッパではどの国も、開発教育が言われています。

国連婦人の十年のスローガンは、平等、開発、平和の三つでした。私たち日本の女性が残念ながら、平等、平和には関心があったが、人類の四分の三の人々にとって切実な問題である開発の問題についてはほとんどやってこなかったのです。

最後に、これらを含めて、何が必要かということは、日本の社会のあり方を変えていくことです。アジアの人たちは、アジアに対して何かしてもらおうというより、アジアに対してひどいことをしている日本のあり方を変えて欲しいといわれます。日本をもっと人間らしい社会にしていくことが、アジ

アの人たちと共に生きていくことにつながるのではないか、そういうことを一人一人が生きている場で考えていくことを訴えたい。

〈関〉 長時間ありがとうございます。私は途中から、コーディーネーターの仕事を完全に放棄してしまいましたが、皆さんの活発なご意見で、いい話し合いができたと思います。

今日の、アジア・子ども・人権というテーマ。私たち日本人は、アジアの人たちから、黄色い白人だといわれる。でもアジア人であり、同時に私たちが直接加害・侵略した国がアジアであるということ。そのことの反省が全然足りない。子どもたちに入るか入らないかという議論がありましたが入らなくても伝え、入れていかなければいけないと思います。

先ほどの議論の中で自分の子が、たとえ抑圧される存在になっても抑圧する側の子に育てたくないといわれたご意見、感銘いたしました。同時に、育てたい子と、育った子にギャップがあること、これもまた事実です。あまりにも子どもを育てにくい現実の社会であり、対話しにくくなった子どもたち、どう入れていくかは大変なことだと思います。とにかく絶望しないで、やっていかなければ、私たち自身が破壊するのではないかと思います。

(まとめ・村上昌子)

## ● 分 科 会 ●

### 1 家庭科

## a 中学の「家庭生活」を

## どう扱うか

石川 尚子

### ● レポートの内容

指導要領の改訂により、'93年から実施される中学校技術・家庭科には、男女とも履修する領域として「家庭生活」が新設された。移行期に入った本年、すでに実施している学校もあるが、どのように進めたらよいか思案しつつ、目下検討中というのがおおかたの実情であろう。

指導要領改訂の主旨は何か、なぜこの領域が加わったのか、その背景に疑問が残るにしても、生活の自立や男女平等、いのちの尊さなどを学ぶ第一歩として、この領域を前むきに積極的に活用したい、そんな思いでこの分科会を設けさせていだいた。中学校の先生方を中心にして、十九名の参加があり、進行係二人のレポートのあと、活発に意見を交換しあった。

○ 磯部レポート（資料1） 住まいや水をテーマにした一学期の授業は毎時間手づくりのプリントを配布し、7〜10時間かけて行った。生徒たちの反応が心配だったけれど、なかなかいい感想や意見があった。二・三学期は、加工食品や食品添加物、ショートパンツなどを取りあげて、二年生で衣食住全部をやってみたいと思っている。

○ 石川レポート（資料2） 現場の取りくみは緒については、おもに地域の研究会などを中心に検討している所が多い。実施にあたって、資料にあげたような問題点を指摘する声もあり、これらをいかにクリアするか今後の課題である。

中学校に新設された「家庭生活」の領域をどう扱うか、明確な考えを私はまだ持ち合わせていない。しかし、男女ともに必ず履修することでもあり、家庭科を人間として、生活者として、生きていく上で重要な教科であるとして実践していくためにも「家庭生活」にしっかりと取り組んでいきたい。

私の勤務している中学校は、昨年度まで一年生が食物と木材加工を共学、二年生から別学であったが、本年度から二年生も共学とした。

電気学習を35時間、家庭科の分野も35時間である。「家庭生活」を考えて、衣・食・住すべてを取り組みたいと思ったが、限られた時間なので住と衣に重点をおくことにした。ここでは、一学期に取り組んだ住生活について報告したい。

### 住まいと水の学習から

- 1、はじめに（学習内容とその方法～男女ともに学ぶよ～）（1時間）
- 2、生活と住まい（住まいの役割を考えよう）（1時間）
- 3、私の住みたい家（3時間）
- 4、おいしい水ってどんな水（実験）（1時間）
- 5、あなたはこんな水を飲んでいる（VTR）（1時間）
- 6、まとめ、私にできること（1時間）

**私の住みたい家** ちらし広告から住みたい家を選ぶ。

【ねらい】 ・ちらし広告の検討を通して住に関する知識の確認をする。

・住生活を環境、経済なども含めて総合的にとらえる。

【方法】 ・ちらし広告の中から自分の住みたい家を選び、切り取る。

・選んだ理由、間取り、部屋の使い方、費用、環境などをまとめる。

・やってみてわかった事、住宅の問題を考える。

**水の学習** 水を通して環境問題を考える。

【学習内容】 ・水の飲み比べをして、おいしい水の条件を考える。

・飲み水はどのようにして供給するのかを知る。

・飲み水の問題を知る。（VTR視聴 NHK特集 あなたはこんな水を飲んでいる。）

・どのようにすれば水を汚さずによい水を飲めるのかを考える。

●「家庭生活」実施上の問題点  
○指導要領の「家庭生活」の最初に「家族の生活」とあるが、その一番根底に何をおいたらいいのかわからないのか。未だに「家庭の機能」「家族生活の意義」など生徒に何を伝えたらいいのかわからないでいる。

○「家庭生活」は内容があまりに広すぎ多すぎて一年生には無理ではないか。総まとめとして三年生でやったらいいという意見もある。また、全部扱えば浅くなり、生徒の興味関心を引き出すことはできないだろう。ネットワークをつくり、みんなで教材づくりをしなれば、家庭科は、ますます片す

\* 家庭生活の領域で扱う範囲がものすごく広い。どの部分も大切なと思うが、それをどう分かりやすく教えていくのが問題である。小学校で、家庭科の専科が減りつつあり、この教科の内容が軽く扱われるに当たって、基本的な知識や技術が極端に低下している。中・高で男女共修をおすすめるのなら、小学校の家庭科の充実にもっと力を入れて欲しい。

\* 家庭生活では、家庭の生活・家庭の経済・仕事・家庭生活と地域など、考える内容は示されているが、具体的に何をどう考えるかについては分かりにくい。個々の教師の力量にかかっている面もあり、魅力的な「家庭生活」になり得ることもあるが、何を勉強したかわからないような「家庭生活」の授業になる恐れもある。

\* 男女共修には理論的には賛成ですが、現実を見ると大変難しいように思えます。共修することによって教科の程度が下がります。被服がそのいい例ではないでしょうか。食物においても、新しい指導要領では内容が少なくなっています。これで実際、親になった場合責任ある家庭生活がおくれるか不安です。

\* 男女共修の問題点としては家庭生活35、木工35、電気35、食物35、となると、どうやって成績を出すのが1番の問題点ではないでしょうか。現にある学校では校・家の評定がずいぶん違うというて親から苦情が出たこともあったようです。学期ごとに評価を出さないとすれば、テストの仕方まで変わってきます。



みへ追いやられてしまうのではないか。

○仕事に追われ、新しいことを調べてゆく時間がない。横のつながりもなく、勉強不足もあって、個人では解決の糸口が見い出せずに悩んでいる。

○入試とのかかわりで、なかなか自主編成ができない。

○家の仕事をしていないなど、生徒たちの体験や知識が乏しい。目にみえる身近かなものにしか思いが及ばず、社会との結びつきにどうつながってゆくかがむずかしい。

○人間としての生き方にこだわるとかなりの時間を使う。時間追われると、つくり方を押しつけるだけになってしまう。

○評価の問題をどう解決するか。

○同僚の教師、父母に家庭科をどう理解してもらうか。

○技術科との関係をどうするか。

○非常勤講師には横のつながりも研修の機会もない。また、採用決定が四月末と遅いため、年間計画も時間割も決まっています、行き先の先生にあわせるしかないのが現状である。

### ●本年実施していること、実施してみてもよかったこと

○食物を必修にしているが、「朝ごはん」の献立で、食品の実物を用意してみた。分量に切った野菜などを目の前で見、また直接ふれると非常によく理解できた。

○被服では、工作用紙とものさしで織物をした。たった二時

間で仕上げたが、今までなかなか理解できなかった布の縦と横の関係がよくわかったようである。また、繊維の材料と性質の学習のため、繊維の見本、燃焼試験、品質表示などをとりあげ、子どもたちが着たいと思うようないいデザインのを町で買ってきて、それをもとに袖なしの調理実習着をつくっている。十月までに仕上げ、一回は調理実習をしたい。

○生徒が持ち寄ったアルミかんをとく方法を技術の先生が工夫し、それで校章をつくって皆勤賞の生徒に渡した。研究発表をすすめたら、そんな指導要領のどこにもないと言われ発表できなかったが、校長がみんなに披露してくれ、いいPRになったと思う。学校行事には、音楽、技家、体育、美術など、がんばればすごいものができ、理解も深まる。

○技術科と家庭科でドッキングすることも大切。木工で木枠をつくり、食物で豆腐づくりをする授業をしている。食物では大豆にこだわり、日本の伝統的な食生活を取り上げている。地元の織物である播州織はパジャマなどには最適なのに生徒たちはものすごくバカにする。そこで被服では綿づくりからはじめて、播州織を見直す工夫をしている。

### ●これからの方向

○指導要領や「家庭生活」にあまりとらわれず、この教科では何が大切なのか、それにこだわってバチッとやってゆこう

と思う。魚なら魚、米なら米をしっかりとりあげると、環境も公害もすべてにつながってくる。

○いのち、人間関係、おとしより、衣食住の基本などを中心にする。家庭の経済は案外子供たちの生活から入っていけるのではない。母親の一時間のパート代と自分たちが買うブランド物の衣類など。そのあたりから入れるだろう。

○技術・家庭科を学ばなければ、一人前の社会人にはなれないということ、いろんな人にわかってもらえるようパワフルにやるしかない。そのためにも、家庭科の存在がいかに大切な教科であるかをPRすることが大切だ。

○紙の上の勉強にとどまらないで、実践・体験・実物教育を重視する。物をつくったり、動かしたり、調べたり、からだを使い、からだで勉強するようにしたい。子供たちもそれを楽しんでいるし、技術・家庭科のおもしろさでもある。

○水・電気・ごみなど、目の前にあるものが、どこからきたのか、これから先どこへ行くのか、そうした教師自身も知りたいと思うことを取りあげてゆきたい。そして、自分の生活とかかわる社会のしくみに気づかせたい。

○技術科と家庭科がわかれているから非常に複雑になる。技術科も教えられるような力量をつけたい。

○指導要領改訂のたびに時間数が少なくなっていく。必修を実現し、家庭科の目標を達成するためには、生半可なことで

はとてもできない。時間数や人事、施設設備など、もっと文部省に働きかけてほしい。男女必修をすすめる会などで要望書を文部省や国会に出しているが、全国の先生方からどんな声があがってくると力になるのではない。

## ●まとめ

「家庭生活」にこだわらず、生きてゆくために大切なことをきちんと押えるという意見は貴重であった。「家庭生活」「家族」とは、と常に考えながらその根底にあるものを模索しつつ、性教育、いのちの大切さ、男女で家庭をつくること、人間と動物とはどちらがうのか、家事とは何か、人間らしく生きるとは何か、おとしよりと乳幼児など、生まれてから死ぬまでの人間関係、衣食住と生活の自立などをとりあげたらどうだろうか。35時間と短いので、どこかにポイントをおいて散漫にならぬよう、まとまりあるものにする必要がある。また、家庭科ここにありというPR、文化祭での発表や家庭科通信を最大限活用し、教材研究の意味もこめて地域や政治にかかわってゆくことも時には必要となる。

非常勤講師、助手として不安定な身分と労働条件の中で働く豊中の宮西さんの話、赤ちゃんを預りながら木綿の店を開く東京の武末さんの中学校家庭科への耳の痛いお話、様々な語りあいから多くのことを学び得た三時間であったと思う。

## ● 分 科 会 ●

### 1 家庭科

## b 高齢化社会

### ― 北欧の社会福祉に何を学ぶか ―

分校 淑子

の経験者など、なんらかの形で高齢者福祉に興味を持つ方々  
二十三名でした。

老いは避けようのない現実である。しかし誰もが目をそら  
そうとする。やがて、親が舅が姑が……夫や妻そして自分自  
身が老いに直面して初めて、老いについて一人で考え一人で  
悩む。しかし、超高齢化社会を目前にした我が国において、  
このような対応では限界を越えているのが現実ではないだろ  
うか。そして同時に、老いを見つめるということはどういう  
ことなのであろうか。

この分科会は、八月十六日からの「北欧社会福祉施設視察  
十日間の旅」をより充実したものにしようという試みで開か  
れました。提案者は、このツアーの世話人である立山ちづ子  
さん。司会に入江一恵さん。参加者は、家庭科教師をはじめ  
地域やグループで高齢者福祉に携わっている方、高齢者介護

● 自己紹介（この分科会を選んだ理由を含む）

\* Iさん（高校・家庭科） 今年、授業で初めて高齢者問題  
を取り上げた。高齢者が生きやすい社会とは、結局全ての人  
が生きやすい社会ということではないだろうか。

\* Oさん（高校・家庭科） 生徒は赤ちゃんには関心を示す  
が、高齢者に対してはなかなか理解しようとはしない。私自  
身も両親と同居しており、高齢者問題には公私共に思うところ  
が多い。

\* Mさん（高校・家庭科） 授業で福祉をどう取り上げたら

よいか悩んでいる。ノーマライゼーションに興味を持っているが、自分の中にも人を差別する意識がなくなり切らないように、常に自己点検をしている状態である。

\* Sさん(高校・家庭科) 家庭科のなかで福祉をどう位置付けたらよいのだろうか。関千枝子さんの『この国は恐ろしい国』暉峻淑子さんの『豊かさとは何か』という本を読んでとても考えさせられ、ツアーにも参加することにした。人が大切にされるといふことは、どういふことなのだろうか。

\* Hさん(短大教員) 子育て中は老後のことは考えられなかった。今、周りの気遣いから自分も年寄りに見えるのかと感じている。私は自分がどういふ死に方をするのか考えることが多いが、これについて一般的には、関心はあるが運動にまで参加する意気込みはない、というのが現状であろう。

\* Sさん(元高校・家庭科) 六年前に退職し、現在地域の公民館で食物指導をしている。高齢者福祉は、正に自分自身の問題でもある。

\* Kさん 地域の老後問題研究会に入っており、十七年間一人暮らしのお年寄りの訪問をしている。北欧にも行って学んできたが、現実には日本ではなかなか横の繋がりができない。

\* Mさん「高齢化社会をよくする女性の会」で活動している。二年前北欧などの視察をして、カルチャーショックを受ける。

けた。そして、高齢者を社会的にどういふ存在としてみていくかという哲学と、地域の一人一人の力で政治を変えたいという意志の必要性を感じた。

\* Tさん(看護学生) 将来、福祉施設で働きたいと思っている。ツアーにも参加する。

\* Tさん(教育学部出身・塾関係) 相次いで祖父母を亡くしたが、末期の、非人間的な病院の扱いに疑問を感じた。また、介護は全て長男の嫁が行い、自分自身は第三者的であった。男である自分には介護に関する意識が無い、というのが現実であった。  
(以上一部抜粋)

#### ● ツアーを組んだ理由と資料説明

立山ちづ子さん

○ ツアーを組んだ理由

\* 個人的に、母と同居しており、老いは避けられない問題である。

\* 家庭科教師として、最近コンピュータや学校家庭クラブにばかり関心が集まっている県内の先生に、福祉に目を向けてもらいたい。

#### ○ 資料説明

\* 日程説明(We 90年十一月号「Weの仲間・北欧に行く」参照)

### \* 課題説明

- 1 人々が、直接高齢者とうどう関わっているか。
- 2 家族問題としての、男女の関係はどのようなになっているか。
- 3 高齢者自身が、自分の老後をどう生きているか。
- 4 社会福祉制度自体は上部構造であるが、それを支えている下部構造はどのようなになっているか。

### ●話し合い

日本社会と北欧社会の哲学の違いから、福祉そのものの定義付けに至るまで、とても本質的な、密度の濃い討論が行われました。以下に内容の一部を紹介します。

#### ○日本と北欧の違い

(柴田さん) スウェーデンでは、所得の60%を税として負担しているが、これは政府に対して信頼感があるからこそ可能なのであろう。また、福祉の進む国には、例えば困っている人はみんなで助けてあげよう、というような人間に対する哲学・理念があるようだ。日本では、困っている人はその人自身が悪いようにみなされてしまう。

(倉橋さん) 北欧では、横断歩道を渡ろうとする障害者に対して、誰もがさり気なく手を支えて一緒に渡る自然なふれあいがある。税の仕組みもわかりやすく、追求もしやすい。ま

た、アメリカ西海岸でも、学校の隣に必ず高齢者の施設が並んで建てられていた。共に生きることが自然になされている。

(村岡さん) 日本では、高齢者問題も保育の問題なども私的なこととみなされ、自分や家族の責任において解決すべきとの暗黙の了解がある。しかし、高齢者や児童を社会的にどのような位置付けていくか、考えていく必要がある。同時に、政治の果たす役割自身も見直されなければならない。

#### ○日本の高齢者福祉の実状

(村岡さん) 近年、高齢者の介護に対する意識は、従来の嫁から、施設で、に変わってきている。しかし、それに応えるだけの施設は整っていない。同時に、これはスウェーデンでも同様だが、マンパワーの確保も大きな問題である。国は、福祉十カ年計画の一貫で、在宅福祉を充実させようと、試算四兆七千万円を組んでいるが、それ以前に「宅」の確保が問題と言われている。基本は、ノーマライゼーションに普通に行っていくことではないだろうか。

(立山さん) 施設で働く人は研修もなく、ただ過重労働をこなすという感じになりがちで、仕事に対する情熱も薄れがちである。従って、施設のお年寄りたちも辛いのではないだろうか。

(入江さん) 栄養士の就職一つとっても、老人ホームは避けられがちである。福祉施設職員の待遇の悪さからもあり手が

少なくなってしまうようだ。

#### ○福祉の定義

(分校) 日本と北欧では、善し悪しの問題ではなく、育まれてきた文化の違いがある。北欧型の福祉を取り入れると同時に、日本型の、家族に代表される身近な人たちの情によって支えられる部分も大切にしていきたいと思う。またそれがなされ易いような社会であって欲しい。

(橋本さん) 情は当然万人の心にある。福祉には、世話をされる側の福祉と、世話をする側の福祉がある。また、家族の世話になろうが、社会福祉の世話になろうが、そのいずれを選ぶかという選択の自由が、老人の側にあつてしかるべきである。そして、老人に生きがいを与えることも福祉であり、福祉を狭い意味でとらえてはいけない。

#### ○福祉教育

(入江さん) 日本では、当たり前のこと・普通のことを、よいこと、としてしまい、却って逆作用を生むことが多い。同様に、福祉はよいこととして押しつけていくのは不自然である。しかし、福祉教育は大切なことであり、教育の場としての家庭科のなかで、高齢者福祉をどう取り入れていけばよいのだろうか。

(坂井さん) 高齢者福祉を扱う場合、まず教師自身がきちんとした老人観を持つ必要がある。そして、生徒に自分の問題

とし、考えさせるには、よい老いとは急にできるものではなく、現在の生き様がそのまま繋がっていくことを気付かせることが大切である。また、老人の三大不安は健康・経済・孤独感であるが、全て若いうちから無関係ではないことも理解させたい。

#### ●まとめ(立山さん)

話し合いで出されたこと……制度そのものについてや家庭などの人間関係、学校の担う福祉教育、高齢者自身について(自己決定権や生きがいなど)、死についてなどを着眼点として、実り多い北欧ツアーにしたいと思っています。

これを機会に勉強しようと参加した私にとって、とても密度の濃い三時間でした。特に、福祉という言葉の奥深さをはんの少しとはいえ感じる事ができたのは、大きな収穫でした。と同時に、福祉の定義というものが、人によりまちまちなのではないかということがとても気に掛かりました。そんな気持ちを察してか、分科会後立山さんが「北欧も、この十年で福祉の定義が大きく変わったのよ」と言って下さった言葉が心に残りました。北欧ツアーの報告を心から楽しみにしています。いつてらっしゃい!!

1 家庭科

C 家庭科における  
コンピュータの位置

西内 みなみ

いよいよ、現場に様々な形で導入され始めたコンピュータとどう関わっていったらいいのか、そんな悩みを抱えて参加された方が多かったようです。

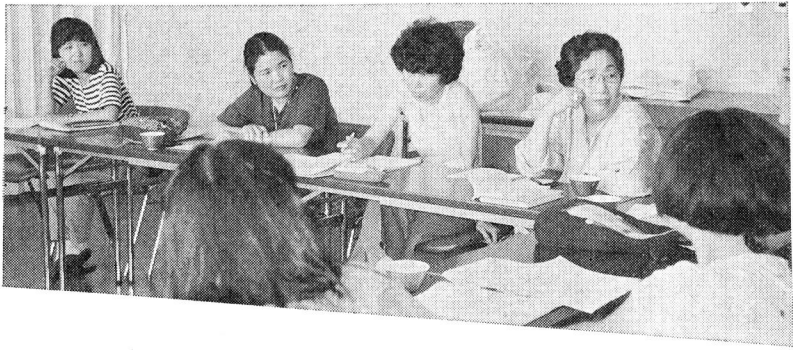
\*鹿児島のKさん 家政科の基礎科目としての家庭情報処理を来年から二単位自分自身が担当しなければならぬ。

コンピュータを道具として使えばいいと思っても、実際はどうしたらいいのか皆目わからない。資料はほとんどなく、管理職は資料を見せないようにして、決まったことだけを押しつけてくる実態に苦慮している。

京都のMさん曰く、学校へのコンピュータ導入のされ方をみると、今の学校の体質が見えてくる。職員会議で決ま

るにしても、なんの予告もなく突然出てきて通してしまふ。  
\*兵庫のAさん 今年から家庭情報処理という科目で導入が始まり、NECで五日間、カンヅメ研修に参加させられた。全国から選抜され、各地域の家庭科におけるコンピュータ教育の指導的役割を担うため、プログラミング等かなり高度な学習まであったが、参加者はついていけず様々な不満がうっせきしていた。

\*広島のKさん おとしコンピュータが導入され授業で少しずつ使わせている。課題研究させて、ワープロで報告をまとめさせると、普段みんなについていけない子もうれしそうに操作している。これまで家政科が「下」にランクされていたのに、コンピュータで自信をつけている子さえいる。



しかし、何をどのように使ったらいのかかわからず、こうした高校生たちの期待に応えられない。夏休みを中心に研修があるが、希望者が殺到している。プログラミングの基礎としてベシックをやるそうだが、役に立つのだろうか。

\*福岡のHさん 農業高校の生活科に情報処理という科目で、ベシックが入ってきたが、「私たちはコンピュータを手段としてしか使わない」という立場を通して、ベシックは教えない。

コンピュータで何を学ぶのか、その「何を」はベシックではないと思う。コンピュータを教材

としてどのように使っていくのかという研修が全くない。

\*山梨のSさん 生徒にパソコンの人氣があるため、クラブ活動としてパソコンが導入されるにあたり、被服室か調理室がつぶされようとしているのに反対している。

\*東京のYさん 教材用の試験問題にキーボード等の名称を問うものや、フロッピーの区別、電源を切る前にすることなどがあることを知り、いったいコンピュータを「なぜ使わせるのか」「家庭科で何を大切にすべきなのか」をしっかりと押さえておく必要性を痛感した。

\*福島さん ベシックを習ってプログラミングを学習したところで、ソフトを作るのは今の教師には時間的にも能力的にも無理だと思う。できれば、ソフト会社が家庭科の教師と合同で作ってそれをを使うのが望ましい。

しかし反面、教育内容の統制化に使われる危険性がある。また、コンピュータは生徒管理の道具として使われることも多く、だれが何のために情報を処理するかという点を厳しく問い正す必要がある。

\*東京のIさん 使え使えといわれても使えないのはソフト予算がつかないからだと言う。

また、それ以上に安全性の面から電磁波を防ぐエプロンを消耗品として購入してほしい。

\*静岡のKさん 電磁波の危険性は知らなかったがたいへん



眼が疲れる。成長期の子どもたちの健康に差し障りがないだろうか不安だ。

\* 福島さん そのことについては'90年We夏の増刊号を読んでほしい。

\* 京都のMさん 京都府教育委員会は今のところ逃げている、コンピュータについては隠しているのか、めだつた動きがないようだ。いずれにしろ、大切なことは目の前の生徒とどうかかわるかということだろうと思う。生徒が生き生きするから取り入れていいのかどうか。

やはり、私たち一人一人が、家庭科におけるコンピュータの位置づけをしっかりとらえて、実践で具体化していくしかないと思う。

\* 神奈川のUさん 自分は教師ではないが、使い方を限定した指導は生徒もおもしろくないだろうし、コンピュータを学習することからいってもよくないのではないか。それと家庭科という教科は、情報化（記号化）しにくい教科ではないかと思う。

\* 福島さん 今いわれた「情報化」ということですが、家庭における情報化とは、生活に必要な様々な情報の入手とその使用だと思う。その手段としてコンピュータは威力を発揮する道具です。ただ、その安全性の問題を押さえながら使用しないと危険な道具です。

\* 福岡のHさん 現場では、その安全性についてはほとんど無視されている。妊娠中に研修を受けて、早産し本人が亡くなってしまった例や、十万円でプログラムを開発するようにいわれ、授業時間以外はコンピュータの前に座っている教師がいたりする。

コンピュータに関わると、生徒が見えなくなり、自分自身の労働過剰も見えなくなってしまう。

\* 福島さん コンピュータに振り回されてはダメですね。

自分はこのことをしたいから、コンピュータをこう利用するんだということが、教師自身のなかではっきりしていないから手を出さないほうがいい。例えば家庭でコンピュータを使用する場合に、自分の生活を変えていくためにコンピュータが必要かどうかを判断するのと同じことです。

\* 西内 Weにもありましたが、パソコン通信を使ってリアルタイムの情報収集をして、それを授業に生かすというコンピュータ利用の可能性もある。

今、水についての分科会でも話されていると思うのですが、河川の汚染状況についてネットワークシステムを実際に作って監視しながら学習をしていくという授業も考えられる。

\* 東京のIさん それならファックスでもできると思うんだけど、その設置もされていない教育設備の貧しさがある。また、ラインで結んでパソコン通信でデータが入ってしまう

と、どこかで統制されてしまう危険性もある。

\*福岡のHさん Weでもコンピュータ利用の可能性や様々な新しい取り組みを紹介してほしい。視聴覚教材としてビデオが入ってきたときに、どう利用するか、何を教えるかをさんさん考えたように、利用する際もそのところをしっかりと考えていきたい。

\*東京のIさん プロンプト、アスキー等のコンピュータ雑誌の立ち読みをすすめます。学校でのコンピュータ利用のことなどの情報も結構載っている。

\*福島さん NECの工場見学にいけると最新の情報や実際にコンピュータに触れてみて、コンピュータってこんなものなのかというおおよそ概略がわかると思います。

まずは、コンピュータで何ができてなにができないかをよく知って、自分のやりたいことをするためにはどう利用したらいいかをコンピュータの専門家に相談するのもコンピュータを知るてっとりばやい方法かと思います。

そして、なにより成長期にある子どもたちにとっての安全性にだけは十分配慮する必要があります。

来年のフォーラムではこんなふうにコンピュータを利用したらこんな授業ができて、子どもたちの様子はこうだったという実践報告を持って集いましょう。

\*神奈川のUさん それと、こんなソフトがあるという情報

交換の場にもしたいですネ。

コンピュータがわからない、使い方がわからない、ソフトがない、健康への危険性がわからない、教材としての有効性がわからない等々、ないないづくしで学校にやってきたコンピュータ。今回の分科会でも、企業に代表されるコンピュータ社会に比べて、学校現場の「遅れ」と「ギャップ」に驚くことばかりだった。

ただでさえ忙しい学校で、教師や生徒のコンピュータ圧死事件が起こらないとも限らない気さえする。しばらくは、教室のスミのダンボール箱のなかで眠っていたいたいたほうがいいのかも知らない。少なくとも家庭科室にとっては、今のところ無用の長物だという感想をさらに強く持った。



1 家庭科

d 地域文化から  
教材を作るには

江口 凡太郎

●はじめに

当分科会は、参加者六名という少人数の話し合いとなり、とてもリラックスした雰囲気ですすめられました。

「地域文化から教材をつくるには」というテーマで始まったのですが、話に熱が入るにつれ、話題が多方面に広がり、まとまりがないといえばまとまりがないまま幕を閉じました。

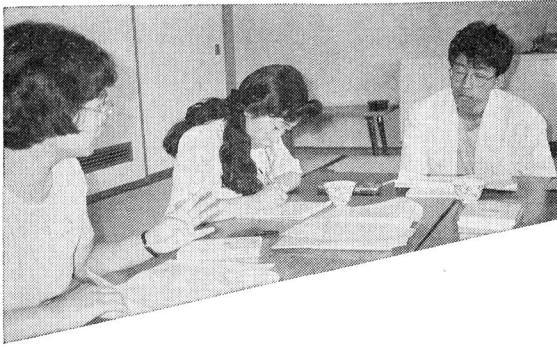
兵庫県の高校で家庭科を担当されている岡原さん、九州歯科大の教員であり、二児のお母さんでもある下田さん。家庭科教員をしている吉田さん。熊本県家庭科サークルの片山さん、榊原さん、それに私。

●報告

地域と生活文化から教材をつくる。このことはわたしが今、熊本で学んでいることです。提案と言うよりは、私が熊本にきて学んだことを報告しました。

わたしは北海道で大学を出て、春から熊本に来ました。熊本にきた理由は、熊本県家庭科サークルの実践集『食べものを教える』（農文協・人間選書）を読み、「生活の文化」を学ぶという数々の実践に魅力を感じたからです。

熊本県家庭科サークルの実践の根底には、「生きる力」を持った、「自立した生活者」を育てたいというねらいがあります。ここから、現実に生きる人の生きざまや、暮らしの原点からの追体験などから、生活の文化を学ぶという実践が生まれました。



分科会風景（右が江口凡太郎さん）

「食べものを教える」の実践から具体的に生活文化の教材化についてみてみましょう。本書では、食生活について、生活の文化つまり、食べることに関わる人々の行動様式を地域と歴史という二つの視点から扱っています。

地域から学ぶ内容のひとつが、熊本という地域に、古くからある食べ方や、料理の実践です。代表的なものが熊本の郷土料理「だごじる」です。

全国共通の教科書教材に

はない、地域に生きる多彩な食文化に学ぶことはたくさんあります。同書

ではこの他にも、菜種を絞って菜種油をとる実践や、切り干し大根をつくる実践などがあります。

地域から学ぶといった場合、地域をもう少し広げて考えることもできます。同書の実践でそのほとんどが、日本に古くからある食べもの、食べ方が扱われています。

なかでも、納豆、味噌、豆腐という、大豆の加工品の実践は三つもあります。これは、日本人にとって、大豆がとても身近な食品であるとともに、貴重なたんぱく源として様々な加工し利用してきたことと関わりがあると思います。日本は中国や朝鮮とともに大豆の文化圏を形成しています。これに対して、西欧は「乳」の多様な加工品があることから乳の文化圏といえるでしょう。このように食の文化を軸にして、地域を大きくとらえることもできます。

大豆の加工品を学ぶことは、地域だけでなく、これらを生み出した歴史も関係してきます。大豆は、収穫したままでは食べにくい食品です。先人たちは知恵を絞って様々な工夫をして、多様な食べ方を生み出しました。

歴史から学ぶというのは、人類が長い間かかって作り上げてきた技術を完成したものとしてただ伝えるのではなく、古来から今日にいたるまでの過程を追体験を通して学ぼうというものです。

この例として、米の食べ方を焼き米という原始的方法からはじめて、今日の精白米を炊くという方法にたどりつくまでの道のりを体験していくという実践があります。収穫したままでは食べにくい米を飯としておいしく食べるまでの工夫と、苦勞を体験することで、人間が自然界から得たものを、食べられるように、食べやすいようにする食品加工の意味が

伝わると思います。

今日の子どもをとりまく家庭生活は、生産と流通とはかけ離れた消費の場となっています。その中で、子どもと食との関わりは、食卓に並んだものを食べるだけの乏しいものになっています。このような中で、自然から得られた収穫物にふれ、自分の手でおいしく食べられるものにつくりかえていくことで、子どもたちは、食生活への関心を高めていくと思います。同時に、この体験によって、生活に関わる問題点や矛盾に気づきそれをよりよい状態に変えていく力を獲得していきます。地域の食べもの、食べ方の歴史を学習すること、つまり、生活の文化から学ぶ意義はここにあるのです。

#### ● We フォーラムに参加して

フォーラムに参加して、わたしは多くの人のお話を聞くことができ、多くのことを学ぶことができました。地域の生活文化の教材化について、新たに考えたことを以下に整理します。

分科会で、兵庫の岡原さんから在日朝鮮人の生徒に対する差別の問題が投げかけられ、差別と地域の生活文化の教材化について話し合いました。

差別は、生活文化の違いにも及びます。例えば、にんにくをたくさん使った食生活をする民族に対して「くさい」など

と言います。これは私自身も経験があります。子どもの時近隣に台湾出身の家族が引っ越してこられたときに親たちが、にんにく臭くなったなどと話していたのを記憶しています。他愛のないおしゃべりだったと思いますが、異文化に対する理解不足と偏見があったことは確かです。

にんにくを好む食文化にも、その地域の自然との関わりと人々の知恵から生まれたという歴史があることに違いはありません。なぜにんにくを食べるのかという、これらの地域の生活文化を学ぶことで自分たちと異なる生活や文化を理解し、さらには、にんにくをあまり食べない文化の認識も新たにすると思います。

このように、異なった地域の食生活を学ぶことで、異文化への理解を深め、さらには国際理解へとつなげることができるとはならないかと思っています。

このことは偶然にも、全体会で松井やよりさんが述べられていた「違う文化を持った人々を尊敬する、尊重する」人格を形成するために必要な「異文化理解教育」とも重なると思います。

分科会の最後は、吉田さんが

「地域の教材を拾い上げることで、広い世界へつながる。

—— 限りなくローカルなものから、限りなくインターナショナルなものへ……」という一言で締めくくりました。

またまた偶然にも、全体会で松井さんが

“Think globally and act locally”（世界的に考え、足元より行動せよ）

と述べられていました。人数は少ないけれど、全体会の内容とも関わっていた？ 内容の大きな分科会でした。

### ●おわりに

わたしは今回のフォーラムに提案者として参加させていただき、またこうして報告をさせていただくことで、熊本に来て学んでいることや、これまで考えてきたことを、自分の中で整理することができました。これからも、地域の生活文化から私自身がもっと多くのことを学び「生きる力」をつけていかなくてはならないと思っています。

そして、今度は学んだことを子どもたちに伝えていかなくてもなりません。私は生活文化から学ぶ意義を理解していますし、おもしろさ、たのしさも感じていきます。しかしながら、子どもが同じように受けとめるとは限りません。子どもに教えたい、伝えたい内容を、子どもにとって、学びたい、学びがいのある内容に組み変えていかなければならないと思っています。

男女共学については本誌購読者の方々は周知のことと思

い、本稿ではふれませんでした。性差別をなくすために男女共学はなんとしても進めて行きたいと思っています。このことに関連して最近感じるのは、差別と言うより、むしろ、無意識に性役割分業論（分業観）を強く持っている人が男女を問わず、かなりいることです。

無意識と書きましたが、差別を意識していないという意味で、むしろ、正義感・義務感から自己の役割を規定している点では意識して生きているといえます。このような人々と接していてやっかいなのは、これらの価値観がその人なりの善意からくるもので、自分や、周りも幸せになれると信じていることです。

これが現実で、他人の生き方をとやかく言うつもりはありません。しかし、たまたま自分の周りには教員や、教員を志す人が多いので、同じような価値観を持った人が再生産されていくのではないかという気がしてなりません。

しかし、今こうしていくら考えてみても、自分ひとりでできるものではありません。善意で、しかも一生懸命生きている人々と一緒に、私はこれから教壇に立ち、また新しい家庭を築いていくことになります。まず自分が一生懸命に生きるとともに、周りの仲間と共に理解し合えるように努力していきます。

1 家庭科

e 進学校の女性差別・家庭科差別

武田 恭子

蕪山高校問題をきっかけとして静岡で発足した「公立高校の入学者選抜における男女差別を考える会」として担当することになった分科会に「進学校の女性差別・家庭科差別」という名称がつけられたことは当然の成り行きだったのかもしれない。

しかし、その後の会の活動の視点は、問題を浮きぼりにすることから、戦後の高校教育における男女共学を問い直すことに移っており、家庭科の分科会としての位置づけにややとまどいを感じていました。しかし、そんなとまどいは、男女共学を問わねばならない必然性を持ち合わせた意外な皆さんの参加によって、ふっきることができました。

● 参加者の紹介

参加者は全部で十名（女性六名、男性四名）、家庭科の分科会にもかかわらず、家庭科の教員は、コーディネーターの静岡県立大の上柳富美子さんを含めても三名でした。まずは、その顔ぶれを紹介します。

○榎元さん 大阪の工業高校の教員。男性。大阪府教委が七月十七日突如出してきた入試改革案、従来の男女比枠を撤廃しようとしている問題について、資料を持参して参加。女性解放のために活動している。

○関さん 午後の全体会のコーディネーター。上柳さんと昨夜同室であったことから参加。意外に書かれたものが少ない

戦後の占領期のこと、新制高校発足の初期のことについては関心があって資料を集めているとのこと。

○羽生さん 東京の全寮制の男子校の教員。男性。この学校で家庭科の男女共修にどう取り組むかと考えたりしているとのこと。

○中浜さん 静岡に住むが出身は京都。中学三年の娘がいて「考える会」の活動については関心があつた。また、家庭科教育についても興味を感じているとのこと。

○村上さん 大阪の高校の家庭科教員。大阪では進学のために私学志向が強まり、公立高校もその実績を上げようとしている。「家庭科は大事」と言い続けても、「あなたのいうことはわかる、でも」と言われることがあり、比率枠撤廃について、それによってどうなるかという点で不安を感じている。

○高柳さん 静岡の高校で工業化学を教えている女性。「考える会」のメンバー。中学生は男女共学志向が強いが成績による振り分けで、そうでない所にもはめられていく。民主的基盤が弱くなっている中で、本来のそうした要求を出したり、話し合ったりする場がなくなっていると感じている。

○上柳さん 静岡県立大の食物栄養学科の先生。この分科会のコーディネーター。静岡薬科大と女子大が統廃合されて県立大ができる時、「家政学部、文学部は虚学。学生一人に四

百万かかる。即戦力になる男子の方が県の役に立つ」という知事（彼はかの名画を巨額で購入した某氏の弟）の意向によって家政学部は大きな痛手を受けた。家庭科の男女共修についてはかねてより進められるべきだと考えてきたが、その大学版は敗北したといえるのかもしれない。

○牧野さん 埼玉の男子高校の教員、男性。生徒は入学当初は男女別学に否定的だが、自己正当化のためか、学年進行につれ肯定的になっていく。別学校がいわゆる一流校になっていることに対するあこがれや、同窓会の意識を変えていくのは容易ではないと感じている。

○武田（憲） 静岡の高校教員、男性。レポーター。高校の男女共学それ自体はもちろん大事だが、入口は男女共学なようにでも、コース分けや類型選択によって、男女比のアンバランスなクラスができる。そういう教育のあり方を問うことが大事だと思う。

○武田（恭） 静岡の高校の家庭科教員。サブレポーター。

#### ●レポーターの報告から

公立高校普通科の男女共学がどのような状況になっているか、データのとりにくいところは除き、全国的な規模で男女共学率を出してみました。例えば、群馬県の場合、公立高校普通科に在籍する女子の69%は、女子校にいます。同様に、



福島では55%、宮城で48%、秋田で44%、静岡で33%が公立普通科女子校に在籍します。

静岡について、さらにつけ加えると、私立女子校もありますから、女子生徒約五万人のうち三万人が女子高校暮らしをしていることになるのです。女子がこれだけ別学に押し込まれていけば、当然男子も、男子校、ないしは女子の極めて少ない学校に入れられているわけです。「男女十五歳にして席を同じうせず」の現状が何を産み出し、なぜ今男女共学かを聞きたいと思うのです。

家庭科の問題に關していえば、女子校の多い県の男女共修運動はどのような状況なのでしょう。また、女子を排除して行なわれる教育が、受験偏重になり、結果として家庭科を冷遇し、男女共修の理念と対立することになっているのではないのでしょうか。

戦後教育の見直しということで、「特色ある学校作り」が盛んに行われ、戦前のような複線型の教育体系が作られようとしている今、「女子校があってもいいではないか、それが特色だ」と思い込まされる風潮があります。その考え方は、「女子の特性教育」を主張することと全く同じだと思っています。

## ●話し合われたこと

なぜ男女共学が必要なのか、実際別学の生徒たちがどのような状況なのか、その影響について意見交換をしました。

全寮制の男子校ともなると、女性に対する感覚が異常になるといわれ、転動する時は本気にしなかったが、自分自身たまに街へ出掛けると、女性が妙にまぶしく感じたりする。工業高校に女子がほんの少しだと気を使いすぎるくらいになることがある。逆に女子が多く男子が少ないと、男子は元気がなくなり、弁当をトイレで食べてるなんてこともある。野球部の練習中、「雨が降りそうだな、洗濯物を入れてこない」と言ったら、生徒が「なさない」と言った。

また男子の多い進学校から大学工学部を出て教員になった人が、「女と話す時は、すけべな話をする時だけだった」と言った。セクハラも、そんな教育の延長線上にあるのでは、などなど。互いの性に対するいたずらな幻想を捨て、自然に互いの性を理解し、尊重しあえる関係を作るために男女共学が大事だと思うのは、参加者の共通認識であったと思います。

また、入口は男女共学でも、入学後振り分けられていくコース制や、多様な学科の問題、たとえば理数科などについて、他県の先生から静岡県の現状について質問が出されました。コース分けが二年生からであったり、理数科設置校が八校もあったりということが、他県ではあまりみられないこと

なのだと初めて知りました。

小学区、総合制、男女共学の高校三原則を守ってきた京都には、他県のような学校間較差がありませんでした。そして、そのために、いわゆる一流大学への進学者が少ないのだという攻撃が盛んになされました。このような中でショートホームルームが一緒なだけの選択授業をせざるをえなかったことのように、共学を阻むのは受験制度だというのは紛れもない事実でしょう。

受験偏重の風潮は、家庭科教員の扱いに歴然としていて、静岡県の理数科設置校のほとんどは、まともに専任を置いていません。岡山、石川、長野など他県の様子を聞く限りでは、それも静岡県がきわだっているといえるようです。ただ、大阪の場合についてみると、一応どの学校にも専任がいるものの、学校規模が一年生14学級で、一名の専任というように、規模に対して考えると決して配慮されているとはいえない難いとのことでした。

最後に男女比率の問題について、参加者に見解の相違がみられ、時間不足で討議が不十分ではありましたが、それについて述べたいと思います。

東京都が、昨年十一月に、旧ナンバースクールの女子の比率を40%以上にするということを決めたのですが、今年四月

になって突如、男女別定員枠の撤廃をうち出してきました。

また、大阪府も今年七月に、従来のA比率(学区ごとの高校進学希望者の男女比)とB比率(学区ごとの出願者の男女比)のいずれかをとることになっていた入試制度を改め、この男女別比率を撤廃し、男女を入試の成績順に入学させることを言い出してきました。

どちらも男女比を考慮しないことが、男女平等の扱いになるとマスコミで宣伝しているわけですが、それでいいのでしょうか。

入試で問われる「学力」で、子供たちを序列化し、結果として男女比が偏っても、それが男女平等なのだという、そのどこに教育の理念があるのでしょうか。機械的な序列化を一層進めるだけです。入試方法を多少アレンジするだけで男女比など簡単に操作できるということは、「女子が多くて困るので物理を受験科目に入れた」某大学医学部の例などで、私たちは知っています。

それに、校内で実質的に男女共学を保障するためには、適正な割合が必要だということも私たちは痛感しているのです。教育の門をフリーで開放する。しかし、その教育の中身は、理念で貫かれない。互いの人格を尊重し合い、共に生きるという視点とは逆に、競争だけさせられていく、そんな危惧を持たざるをえないのです。

1 家庭科

f 職場、父母、地域の人々に  
理解と協力を求めるには

深野 千恵子

毎号Weに共学家庭科の必要性をのべられ、その実践を通してのさまざまな体験を感動的な記事でまとめられておられる長野の湯沢静江さんと、表記の分科会を市民の立場から担当した。しかし、開催三日前に湯沢さんは急病のためご欠席ということで、教職には全く経験のない私は闇の中を手探りで歩くような思いで当日を迎えた。

分科会には、小・中・高・大学・母親と各層から九名の方のご参加をいただき、男女共学の家庭科について、教員同士、教員と父母、地域の方々に理解と協力を求めるための問題点を中心に、皆さまのご協力で自由討論のかたちで話し合いを進めた。

\* 高校教員（数学科） 大阪市

役割分業を一番支えているのが学校教育で、見直さなければならぬものを学校が作り出していると思う。最初の就職先の学校に、Weにも時々書いておられる宮崎さんという家庭科の先生がおられて、新設校でもあったので、必修にしない限り前の学校に帰してほしいという迫力でカリキュラムを作られた。

新設校は府教委から「このカリキュラムでやれ」というようにきまっているのだが、そこでは教育自体が女性差別、障害者差別、民族差別等の柱をもっていたので、職場の中の教員でカリキュラムを作ろうということで組合をつくり、組合と教員会議の両方で進めていった。



大阪にも以前から「家庭科の男女共修をすすめる会関西グループ」という市民団体がある。男性の参加もあるが、性の問題、映画等で高校生を対象に訴えたりもしている。入試制度を進学本位に変えようという動きがある。家庭科に結びついていると思われる、そのような状況が方々で起きているのではないか。

\* 高校教員（家庭科） 大阪市

自分の学校の中で目前に迫っている男女共修にむけての理解が職場の中で得られない。個人的に話している時には、家庭科の共修が必要であるとわかってもらえても、公の場や会議の中では一切発言をしてもらえない。受験中心の学校なので「家庭科なんかいらない」という空気が強い。

四単位必修ときまつてからもなかなか信じてもらえず、正式に決まっても二単位代替ということが書いてあるからこれでいけるだろうという感じ。少なくとも四単位必修で、二単位ということはないと職員会議で発言をしたり、他の教員に分かってもらうよう努力をしている。

高校の場合、今女子だけ四単位、三年生で選択科目としておくことも可能だが、本校の場合、女子の選択科目としても、講座としても開いていない。これからどうしたらよいか、市民の中とか、生徒の親たちとどうつながっていったらよいか、そのことを学んでいきたい。

\* 中等学校教員（家庭科） 高槻市

大阪の中学校も例にもれず荒れている。その結果PTAともうまくいっていない。四階建ての学校で屋上に続いている踊り場が、タバコ・シンナーのたまり場になってしまった。現在そこに鉄格子がはめられている。学校への参観者からはこんなことをしているから生徒が悪くなると言われるが、せざるを得ない所がなかなかわかってもらえない。家でしつけがなっていない、学校が厳しくないと、お互いを批判し合うばかりで、子どものための解決にはなっていない。

わたしの子どもは敦賀市立の高校に行っている。第三セクターの学校で、市・個人・原発（電力会社からの出資）からお金がでている。勤めている学校と、自分の子どもが通っている学校ではものすごいギャップがある。いろいろな問題からみ合って、何をどうしたらよいかわからない。職場の中で何を一緒にやっていけるか、話をきかせてほしい。

\* 小学校教員 神奈川県

神教組で女子教育問題に関係をしている。かながわ女性会議からの通信も受けている。出産をしたばかりなので普段なかなか顔を出せない。今日は日帰りで参加、性教育、労働等の話や男女の名簿の問題についても聞きたい。

\* 高等学校教員（家庭科） 大阪市

港湾労働者の多い地域の高校で家庭科の教員として二年目



分科会風景

になる。三年生に全く講座がないので男女共修の足がかりとして選択科目を開きたいということで、春頃から言ってきた。

学校側の体制は「やってもいい」という雰囲気はある。しかし、現在一番多く握っている社会科の選択科目を減らすという問題が出てくる。組合系の人は賛成してくれるが、数学の教員は「共修になるのだし、底辺校から既成事実として出していかなければ進学校はとも無理。この学校は進学率に関係ないのだから、数学では例題を覚えさせるだけ、分数計算、小数計算ができなければ拋物線ができるわけない。公式も覚えられない。それなら家庭科をやらせた方がいい。坐らせているだけよりも何かさせた方が楽しいのではないか」という。調理士を希望する子が多いということもあるが、その中でちゃんと意味があるということを訴えていかなければならないと思う。選択科目が成立するかしないかという時が九月にくるので何かできることがあればと思って参加した。

#### \* 大学教員 熊本県

熊本は高校も京都・長野に次いで共学が進んでいる。進学校はあまりできていないが、中学の方は三年生まで全部共学をしている学校が、二百五校中二十校近くある。三年生の二学期まで共学をしている学校を入れると大分増えてきた。しかしそうするためには変わり者扱いされてやってきた。

三年生まで共学をしていたある中学校で、技術科の教員がいやがり職員会議にもかけて説得したと思うようにいかなかった。その時地域のお母さんに働きかけ、「うちの子どもは共学にしてもらわなければ困る」と言ってもらい、全面共学にしたという事例もある。何もしないでは絶対できない。

Weのフォーラムにも毎年きているが、「やらなければ」と思う人がやるしかない。理解だけでは駄目、行動をしなくては、六年生の子どもの親として、去年、一昨年とPTAの役員をさせられて学校の奉仕活動もした。随分といやな思いもしたが変わった部分もある。でもその反動が子どもにくるがともに頑張らねばと思う。子どもが中学に進んだら共学は大体できているので、教育内容に関わりたいと思う。

#### \* 高校教員（家庭科）岡山県

'94年度からの男女共修をどのように進めたらよいか頭を悩ましている。特に地方の進学校は学校が予備校化していて、夏休みも一日から十六日までであとは全校補習。平日も七校

時まで授業がある。そのような中で家庭科の男子の単位をどうひきだしていくか。私一人で七〇人の教員をどのように啓蒙していくかが一番の問題。

去年、学校から予算を出してもらい、学校訪問というかたちで、長野の須坂高校（普通科で二単位共学）を見学し、その結果を職員会議に発表した。職場の教員の興味や関心がある程度得られたので、今度はそれを実際どのように男子に家庭科を教えることが大切なのかを説いていかなければならない。田舎なので官制の研修に限られている。全国的レベルでどのように動いているのか自分の目で確かめたくて参加をした。

#### \* 小学校教員（家庭科） 大阪市

小学校なので共修が特に困ることはない。去年から希望して専科になった。子供たちがすごく楽しいと言ってくれるし、自分も楽しい、この共修運動に何とかつなげていきたい。中学・高校に行って家庭科に関係した時何かを考えられる芽をつくりたい。

小学校では家庭科の単元がないので、自分の経てきた家庭科では、中学で技術と家庭が分かれ、高校では女子が家庭科をしている時、男子は体育をしていたが、女子差別撤廃条約ができて今度中学へ行く頃には皆共修になるということぐらいしか言えなかった。たまに家庭科通信を出してできるだけ

教員や親に働きかけている。

#### \* 母親 川崎市

かながわ女性会議で活動をしている。家庭科のことを知ったらおろそかにはできないと思った。親に理解してもらうには先ず子どもに家庭科というものはどういうものかきちゃんと教えれば、家に帰って言うのではないか、学校の閉鎖性というものがネックになっていると思うので、先生が中からその閉鎖性を解いていただきたい。

#### ● まとめ

男女共修をやっていると教材研究は大変だが、男女一緒の方が楽しいし、教える側にとってもプラスになりその良さがよくわかるということ、こんな素晴らしい教科を共修にして定着させたいという先生方の熱い思いが伝わってくるようだった。家庭科は日常生活そのものが教材になると思うので、親との接点を持ち易いのではないかと、もっと子どもを通して家庭科のよさを父母に働きかけてほしい。

最後に地域でのさまざまな活動の実践例をお話くださった桑畑さんから、「教師は教室の外へとび出そう。親は学校の中へとびこもう」というご発言をいただき、これからも頑張らねばという思いを胸に会を閉じた。

## 2 夫婦別姓・婚外子差別をめぐつて

中 村 英 之

「夫婦別姓」を求める声はいまや押しとどめようもないほど高まっており、法制化はもう時間の問題という声さえもある。しかし、ここで忘れてはならないのは、「夫婦別姓」の実現と婚外子差別の問題である。「結婚改姓を考える会」のメンバーは子どものいない人が多く、正直言って「非嫡出子」の問題を現実的にはとらえきれていない。いつも「子どもの問題がうちの会は弱いね」と話していたものである。今回「出生差別に反対する女たちの会」の富沢由子さんと分科会がもてたことはとても幸運なことだったと思う。

分科会は人数が少なかったため、各人の話がじっくり聞けた。まず「結婚改姓を考える会」から「夫婦別姓」にまつわる状況―現行民法の問題点、有職かどうかにかかわらず別姓

を求める声が確実に高まってきているという点、通称使用と事実婚の方法と実態など、とくに基本的な事柄について簡単に紹介した。次に富沢さんから非嫡出子差別をめぐる状況について、富沢さん自身が書かれた資料も絡めて話された。

### ● 富沢さんの話

各国の婚外出生率の推移をみると、欧米では六〇年代以降急速な高まりを見せているにもかかわらず、日本では異常に低い。これは、出産に対し男が認めるかどうかだけによって「非嫡出子」として明確に差別されてきたためである。とくに戦前あるいは欧米と比較して見られる戦後日本での婚外出



生率の低下を見るとき、いったい男女平等とは、民法改正とは何だったんだろうかと私たちはつきつけれられる。今の家族にかかわる制度は男女平等ではない。それは日本の婚姻制度が届け出婚の奨励という形になっており、「嫡出でない子」を差別する発想が露骨に現われているからである。

六年前、出生届を取り寄せた際、嫡出子・非嫡出子の記載欄があるのを見て、「人間は生まれながらに平等」ではなく、生まれたときに真っ先に差別する制度が存在することに気付いた。さらに出生届けの父親欄に父親の姓を書いたら、「あなたは結婚していないから、子どもに父親はいない」と役所の窓口で言われた。今さらながら国家は男の血筋をどう守っていくかを中心に考えていると思い、私は、男を産んだことがショックだった。女にとっては「届け出結婚」が、あるいは「未婚」で出産することが、できるかどうかが国家に対するリトマス試験紙的な役目を負っているという事実にぶつかった。

非嫡出子に対する相続分を嫡出子と同等に、という声が上がったときに、結婚をしていない「ふしだらな女」と私たちと一緒にしないでくれという、女たちからの「差別は必要」という反対論が出たのは、妻とそれ以外の女性を差別してきた歴史がめんどめんどと続いてきたことを明確に物語っている。

これは子どもの人権を無視することと、女性の中で「妻」

だけを保障するということがセットになって、差別が温存されてきた事実を示している。「人権」というものを語るときに、非嫡出子に対する問題は常に出てくる問題であり、これを克服するためには、女が「性」の部分で疑問を持ち続けることがあたりまえの社会にならないとダメなんだと感じる。私の子どもの就学に際して、その子どもを前にして、私に対してワッと差別的な言葉が浴びせかけられた。これは、学校という教育機関の中でも差別を作り出していることを示している。

続いて各人の自己紹介に移った。

まず、「結婚改姓を考える会」の古川さんが、同会の六月の例会で呼び出した大学教員が通称使用を当局に認めさせた実践を紹介しながら、その人の言葉「事実婚は自己完結型の形態で、夫婦同姓強要そのものがおかしいというためには、通称使用のほうが運動的には広がる」を紹介した。その上で、自分自身は姓の問題そのものよりも、結婚に際し女性側が98%改姓するという現在の状況が、様々な女性差別の状況を象徴しているようで、それが嫌なのだと発言。

次に同じく「会」の緒方さんが、結婚と改姓がつながっていることがおかしい。もともととは別ものののに現在の同姓強要は、ジュースとビールが目の前にあって、ジュースが好き人も、ビールが好きな人もいるのに、法律が絶対に二人そ





富沢さん(右)と中村さん

ターにしてしまえば楽だなと思う。早く法改正して、環境問題をやりたいなと思っている。その法改正のために国会議員の事務所などを訪問しているが、秘書などと話をしているところ法改正そのものを積極的に反対する人はいない。け

ろって、同じものを選択しろと迫っているようなものだ、とわかりやすく法改正の必要性を提起した。そして子どもが生まれるだけでも幸せなのに、なぜそこで差別をするのかとても疑問に思うとも発言した。

続いて「会」の諫山さんが、別姓を自分のひとつのキャラク

れど非嫡出子差別のことも絡めるとどうなるかというところまではまだ反対を確かめていない、と発言。次にぼく(中村)が自分の戸籍を見直そうと発言したあと、富沢さんからさきの話に続けて発言があった。

日本では社会保障が貧困なので、男が経済的に自立していない女を「籍に入れてあげる」ということで、男は責任を負った気になっている。私が「結婚しない」と言うと、それを理解できるような男は非常に少ない。それで今暮らしている男は制度内での結婚に非常に苦しんだ人なので、制度の外という点でわかりあえるところがある。私が「結婚しない」と言った時、私の家族は猛烈に反対して、姉たちの子どもにも影響を及ぼすとかいろいろ言われた。私の出産に際しても「じゃあ、籍をいれるんでしょ」とか、「家系を汚す」とかやはり理解されなかった。

職場では、籍あるいは姓について「そんなの芸能人のすることだよ」とか、「富沢さんは外国人と結婚したらいい」とか、勝手にデッチ上げられたりした。届けを出していなくても、それが仮に少数派であっても、胸をはってこんなに生き生きているんだよ、と言ってやりたいが、なかなか理解されない、と。

仙台からの参加の三村さんは、結婚改姓に疑問を持っていたために、結婚してしばらくは事実婚でいたが、子どもがで

きたときに改姓してしまった。憲法では男女平等と書いてあっても、民法とか実際の意識は全然平等じゃないと思う。生徒に「平等なんだからどちらの姓でも選べるんだよ」とさんざん言っても、女の子たちは「改姓します」と言う。男女平等って難しいなと感じる、と。

東京の唐澤さんは、男女平等をずっと考えてきて、結婚改姓に関わる問題もそういう観点でみていたのに、相手を好きになっただけで改姓してしまった。早く婚姻届を解消して晴れて……と思っている。通称使用はやっぱり弊害があるとも話された。

戸籍事務にも詳しい川崎さんからは、運動は継続していかないとダメだと。戸籍に関する事柄もずいぶん良い方向に変わった点もある。戸籍制度が持つ検索能力は想像以上に高く、昔は刑務所で生まれたことなんかもわかった。扶養手当ての点をみても、女性に経済力があるということが一番肝心ではないだろうか、と語った。

少数数であったために、フリートークでもたっぶり時間とれ、とくに論点をしぼらずに各人が自由に発言した。その中でも特に「相続」の問題が、非嫡出子差別をめぐって大きなネックとなっており、差別が存在するから差別をやめましようという方向になかなかならないねと語り合った。

戸籍制度が持つ管理能力については、警察の住民管理力のすさまじさにも話がおよび、管理することが好きなこの国を改めて感じさせられた。

話が多方面にわたったが、「世間では」、「社会では」と差別を正当化してくる側の言葉には、全然説得力がない。「私の生き方なんだからいいでしょ」という富沢さんの言葉には思わずうなづいた。

その富沢さんは、来春の地方選で区議に立候補する予定と聞く。地方自治は民主主義の学校という。富沢さんのような「こんな差別は絶対許せない」とはっきり言えて、行動できる人がどんどん議会に進出していかなければ、と強く感じた。

夫婦別姓の要求も、非嫡出子に対する差別を止めよという運動も、女性差別や戸籍制度のおかしさという点で根は同じ。とりあえずは、それぞれの立場で運動を続けていきたい。そして、その中で、ときには手を取り合って、お互いの利害が一致するよう、よりよい法律や世の中にしたい。運動は今日も続く。

### 3 女性と政治

#### ● 参加者 自己紹介から

中嶋里美さん 県立高校を昨年退職した。男女平等にむけて学校ではやれるだけのことはしてきた。'85のケニア会議で第三世界の女性と関わる中で、「援助」は女性に来てほしいという声が胸に響いた。このことから、日本では政策決定の場に女性がいけないことのゆがみを感じ、女性の政治家を増やす必要を覚えた。'91年統一地方選には出馬を予定している。

加藤まさ子さん 大田区議を14年経験したのち、'89都議に。共同保育所の保母を経験する中で、区役所や区議会に保育がわかりにくいことを実感したことが政治家になったきっかけだった。

若竹稜子さん 小金井市野川公園のくじら山原っぱの都の

開発計画に、ここで遊んで育った市民としての立場から異議を申し立てている。役所は市民の論理が通りにくい「おじさんの世界」だと痛感。陳情のシステムもただ聞くだけのものになっているのではないかと思う。

杉山信子さん 杉並区の社会教育に携っている。よく教育行政では政治的中立を言われるが、それと政治教育・学習の場を提供しないということはイコールではない。今の政治は男の感覚で営まれているし、さきの選挙で女性議員が増えたものの女が女の足をひっぱる傾向がみえて疑問に思う。

佐藤敦子さん 練馬区の光ヶ丘団地というニュータウンで、児童館移転の問題をきっかけに地域の30歳代の同年齢の女性たちと区へはたらきかけを行ってきた。区議会の傍聴な

杉本千代



どから区政へ女性や子どもなどの生活者の声が届いていないことを実感し、グループの中から区議を出そうという声があがっている。誰かをとって自分が出ることになり、緊張感もあるが当選したら、歳費で運動の拠点となる事務所を借りようなどと期待もふくらんでいる。

木谷夢津子さん 母が政治に関わっていたことから自然に、暮らしと政治をつなげる視点を持つようになった。'91年出馬を予定している。

杉本千代 社会教育で婦人問題学習を組織している。男女平等の実現にむけて、学ぶことが女性の力になることを目指しているが、目標は見えても手足の動きにつながらないことが多い。知識や情報を得て人より情報通になるような「学習」ではなく、人と関わる中で問題の克服にむかう力をつける学習を組んでいきたいと思っている。

### ●女性と政治をとりまく状況

中嶋 列国会議同盟（IPU）の調査によると、'89年6月末現在、世界一三〇か国の国会議員（下院。日本の場合は衆議院）に占める女性議員の割合は一二・七％。日本はこの時点で一・四％、一二二位で、先進国中で最も低い。第4回「女性に関する学際的国際会議」（'90年6月3日から7日、ニューヨーク市で開催）の基調講演でジョネッタ・コール学長

は「世界人口の半分を占める女性は今、労働力の66％を占めながら所得は世界の15％、資本の1％を支配しているにすぎない。非識字率も男性に比べて圧倒的に高い。外で働きながら家事労働も担っている。しかし、それらを解決する手段としての政治や経済の分野への進出が少ないという現実と直面している。今日、様々な選択を迫られているが最も重要なのは誰のために立ち上がるかということだ」と呼びかけた。私たちもこれを私たち自身の課題として考えていきたい。

スウェーデンなど、女性議員の比率の高い国では男女が平等に家事や労働にあたる風土がこうした結果を導いているのではないだろうか。スウェーデンリレーなど、どんな場でも男と女が同等に組み合わせっていく発想が定着する風土を私たちは築いていきたい。

### ●女にとって政治とは

中嶋 高校を退職してから公民館などの市民を対象にした講演会や学習会で話をする機会を得ているが、教育の現場にいた感覚が頭をもたげて、また現場で男女平等を実現していきたいと思うようになった。自分の親のことや体力のことなどにも気を使いながら政治の分野に出ていってみたいと思う。

議員経験の長い加藤さんに女が政治をつくっていくとはど

のようなことなのかを伺ってみたい。

加藤 私に議員になる前から共同保育所の保母をやってき  
て、今も自宅と保育所が一緒になっている。今は忙しくて保  
育することは困難が多いが、保育所との一体感が変わらな  
い。もともと議員になったのも保育所運営の保障のために区  
の認可・助成を受けに行って認可基準に疑問をもち、基準を  
市民の側に立ったものに変えたいと思ったのがきっかけにな  
っている。だから選挙活動もおねがいしますではなく、一緒  
にやりましょうでやってきた。議員は多くの案件に対して常  
にイエス・ノーを言わなければならず、情報を吸収・消化し  
ておく義務があるが、実際には時間がとれず悩みの種になっ  
ている。しかしそのような時に共同保育でつかんだ働く女性  
の権利、子どもの人権の視点は私の態度表明の際の鍵になっ  
ている。政治については特に学んだ訳ではないので初めての  
議会の時は地域での学習をそのまま持って行った。

中嶋 基礎的自治体である区の方が議員の力量が生かせる  
し、区民の声や運動をつなぎやすい感じがするが、都議にな  
られてから、政治活動の中身に変化はあっただろうか。

加藤 私にとって一番の変化は一人会派から議員団に入っ  
たこと。政治は立法。議員は法にしていくな「中身」を持って  
いることが必要で、そのために勉強しなければならぬことが  
沢山ある。そのために議員提案権を行使していく。しかし

一人会派では提案権はない。また、議会で議論さえできない  
まま議会運営を経験していくうちに、都議会では一・二八議席  
の中で会派を作らず一人でやっていくことに限界を感じた。  
都議に出たのは区段階では仕事になっていないゴミのこと食  
品安全のことなどやりたいことがあったから。女には区議が  
むいているという男の議員からの声も「励まし」だった。都  
では「建設清掃委員会」に所属し、ゴミ、道路、公園につい  
ての施策を論議している。

中嶋 今まで学習してきたことをちょっとやってみようと  
いう時期に女性はいえると思うが、では具体的に選挙に出るの  
に何をすればいいのか、わかりにくいのが実情ではないか。  
今まで地域活動をしてきた人と、働いてきた人では選挙の闘  
い方も違くと聞くが。

加藤 組織づくり、名簿作りなど選挙は多くの人の協力な  
しには聞えない。私の場合は共同保育所の仲間が主体だっ  
た。また、たとえ自民党支持者でも、加藤なら入れようとい  
う人をどのくらい得るかも大切な要素だと思う。特に、政治  
に不信感を持って棄権しがちな人が多い中で、選挙という媒  
体を通して町のあちこちで、自分の考えを訴え支持してくれ  
る人が自分の気持を街頭で表わすという（これを「スポット  
演説」と名付けた）組織を持っていなかったことから採った  
方法だったが、最初は恥ずかしかった。

佐藤 児童館の移転問題がきっかけで、区議会を傍聴したら論議にならないようなことを言いあっていた。あんなひどいおじさんより私たちの方がいいわという軽いノリで出馬することにした。今は歳費をどう使おうかなど夢がふくらんできている。

加藤 歳費というのは議員の給料のことだが、私は事務所の専従職員の給料と事務所の賃借料・活動費にしている。活動の拠点はぜひ確保したいらいいと思う。

中嶋 区議の時の活動は？

加藤 区では地域にネットワークを持っていれば、議会では一人でもできることが沢山ある。地元の利害関係で対立することも多いが、共通項を見いだして解決の道すじを探っていくことが区議自身のやり方でできると思う。例えば住民票の管理が職員の削減などの理由からコンピュータによってオンライン化されることが住民に知らされないまま計画されていることがあった。私はこれに疑問をもつ人たちとともに異議を申し立て、住民情報の管理をプライバシー保護の視点から問い直すことを強く要請した。またインフルエンザ予防接種の義務化見直し、障害児を普通学校へ入学させる市民運動との連帯など、住民のくらしに直結する疑問や不安を政治の場へつなげる役をしてきた。

若竹 くじら山原っぱの運動を通して、役所や議員はなん

て硬直しているんだろうと思ったが。

加藤 生態系の破壊なども、取り組みを議員に頼むだけではなくて議員を現場につれて行き、自分たちの思いを伝える努力も必要なのではないか。

これだけとはいう専門領域を持つことも望まれるのだが、区議は区政全般を知らないといつとまらない実態がある。長く政治に関わると「先生」になっていく議員が多い。そうさせてしまう役所の機構や空気にも問題はあるが、私はテーマを持ちながら地域の人たちといっしょにやっていきたいと思う。

#### ●政治に女性性の視点を

落合恵子氏は女性議員への期待として、「単に、票田としての『女』ではなく、女性性の視点で、既成の概念・政治を問い直し、オルタナティブな新しい発見を提示し実行していく自らとの約束が求められている」と言っている。加藤さんもただ女性候補者に票を投じるだけではなく、その人が当選したのちどのような政治活動をしているか、またその人に自分は何を期待していたらいいかが、有権者にも問われていると言われた。女性議員を増やしていくことはもちろんのことだが、市民である私たちが日常を覆う男性の論理を問い返し、こうしてほしいのだけれどと具体的に言っていく力をつけていきたいと思う。

4

# 女の本音を力に

— 私たちが女性史を学ぶわけ —

平井 和子

第四分科会は、「ふらっと入ってきてしまった」という人も含めて、参加者十四人というささやかなものとなった。そこで、まず一人一人自己紹介をして、報告に入った。

## ● 「伊豆女性史研究会」とは

平井和子

私たちが「女性史を学んでみよう」と集まったのは一九八六年の秋のことです。十人足らずのメンバーですが、それぞれ興味・関心はいろいろで、市民グループ、「読み聞かせ」の会、消費者活動などを通して知り合い、意気投合した仲間です。この伊豆の地にも強くある地縁・血縁による建前的な関係ではなく、「女縁」ともいえるべき本音で結びついている、楽しい関係です。

私たちはいろいろな場を通して、「人に踏みつけにされない、人を踏みつけにしない社会」を強く希求するようになり、その実現へ向けてささやかでも何かできる人間になりたくて、女性史を通して考えてみよう、と集いました。この四年間で私たちにも一応到達点として、「差別される者は、する方には見えないものが見える。その見えてきたものによって、男も子どもも老人も含めた解放の方向を採りたい」という共通認識ができました。

歴史の流れを女の側から照射すると、現在私たちの立っている足下もよく見えてきて、いろいろな活動をする時の視点も磨かれるし、混沌とした事柄が大きな流れの中で、すっきり整理されて見えてきて、「そうだったのか」と、思わず

ひざを打つようなこともあります。

「学ぶ」ということは、特に大人にとっては怠ってはいけない義務であり、責任であると思うのです。今後私たちは、男性や第三世界の人々を含めた解放を射程に入れた普遍的な理論を求めつつ、ささやかでも新しい「何か」を呈示して行きたいと考えています。

## ●私と女性史

### ○女性史との出会い

杉山早苗

十三年前、私は生まれたばかりの娘を知人に預け、ぎりぎりのところまでがんばってみましたが、疲れ果てて職場を去りました。その後は、帰宅の遅い夫を待ちながら、三人の子どもに振りまわされ、子育ては楽しめるようなものではなく、体力と忍耐のみ、というのが実感の毎日でした。このような中で、我が子だけしか見つめられない女になって行く自分が嫌で、少しでも視野を外へ向けたいと図書館通いを始めました。台所のテーブルにはいつも鉛筆とメモ用紙を置き、文芸雑誌の同人にも加わりました。この頃、友人から、「女性史をやってみない？」と誘われ、飛びつくように参加しました。

### ○母や祖母の時代

——小川慶子さん・大嶽もとさんのこと——

ある会場で突然「あなた接吻したことある？」と尋ねられ

たのが小川さんとの出会いでした。戦争ですぐ夫を亡くし、独り息子を育て、田畑を耕やし、旧家を守り、七十歳代になって「一度、口づけを試みたかったの」という彼女。

大嶽さんは、日中戦争中、結婚を許されぬ男性と上海に恋の逃避行をした人です。私が出会った時には、身寄りがなく、半身不随で老人ホームのベッドで「淋しい」と呟く人でした。そして六十四歳で死亡、無縁仏として葬られました。私は、戦時下、自分の心を偽ることなく愛を貰った彼女の上海の三年間に拍手を送りたい気持ちです。

母や祖母の時代には、国家・家・世間というものが絶対的な強制力を持ってわたちの人生を規定していました。私の周りの先人たちの呟きや痛みを聞く時、自分の人生を他者によって遮ぎられることへの怒りがこみ上げてきます。私は私の燃える心、感じる心を大切にして、既成の枠をしたたかに取りはずして行きたいと思っています。

## ●時代の波と人の波

磯部信子

“女縁”がきっかけで、普通の主婦の私も、女性史を勉強するようになりました。個性豊かな仲間たちと、様々な人生を持って時代に足跡を残したわたちを知ることによって、今まで気づきもしなかったものが見えたり、新たに時代に目を向けることもするようになりました。と共に、今自分が、現在



をいかに生きたらいいのか、知らず知らずのうちに問うていきます。

在日韓国人二世として生まれた私は、日本人として暮らしている人たちとは一步隔たりと差別のなかで生きてきました。社会のしくみに対して過敏なところも、女性史の中に見る女への抑圧に憤りを感じ、それが一握りの人間たちのおもわくによってつくられてきたことを知ると、ただ嘆いてばかりいては世の中変わらないと腹をすえました。

為政者によってつくられた構造の中で喘いでいるのは、女ばかりではありません。自らと同じ境遇の人々にとどまらず、見せかけの価値観に追われて、自身の人生舞台の主役を降りてしまった人たち。なんていうと偉そうだけど、でも、私たちは時代の中にいて、歴史を創っている、ということをお忘れたくない。

性とか民族とか人種とか、そんな枠を取って払って、足下から、地面を動かすような波を創りたい。『生命の自由』『生命の平和』。その辺にいろんな髪の色の人がいいて、『あなた生まれは？』『○○です』『日本の首相はゴミ問題に暗いから変えよう』なんてね！ そんな自由な関係をつくり、広げたい。

## ●女性史——国境を越えた女たちの連帯を求めて

上杉佐代子

東欧の大変革が象徴するように、民主主義と諸民族の自主を尊重するという価値観の多元化が、地球的規模で進んでいる。一方日本は、外国人への指紋押捺強制や、外国人登録法に見られるように、ひとり単一民族意識に固執している。だが、私たちのくらしが衣食住すべてにわたって、諸外国と密接に結びついているのは周知の事実だ。

昨年暮から、韓国スミダ電機をはじめ韓国の三労組の代表が相次いで来日した。日本の多国籍企業が、韓国内の賃金水準上昇をきらって、補償もなく工場を閉鎖・移転したため、あまりの人権無視に、労働者——主に女性——が立ち上がったのだ。日本国内では、アジア女子労働者交流センターを中心に支援態勢が組まれたが、広汎に普及するには至らなかった。

日本企業による人権無視。性差別の導入は、私たち自身の問題であり、人種や民族、国境をこえた女同士との連帯が緊要となっている。女性史研究も、こうした視点で深めることが必要ではないだろうか。

すでに百年以上前から、人種・民族・階級の壁をのりこえようとしたアメリカ女性の取り組みの一端を紹介したい。

一九世紀末から二〇世紀初頭のアメリカは、『金ピカ時代』

と称される高度経済成長期で、億万長者が出現する一方、労働者は低賃金・長時間労働に喘いでいた。こうした労働者の多くが、南・東ヨーロッパから来た移民で、言葉も通じず、とりわけ女性労働者は無権利状態に置かれていた。

一方、アメリカ生まれの白人は中産階級へと上昇し、女性の中にも高等教育を受ける者が増えた。性別役割により職場での活動の機会を奪われていた女性は、セツルメント活動にその活路を見出し、女性労働者の生活実態にふれる中で、労働条件改善、社会改革への意欲を高めていった。

『消費者連盟』は、消費者としての女性の力を労働条件改善のために行使しようと、「消費者ラベル運動」を展開した。女性労働者の組織化―労働組合結成―が緊要とみた女性は、『婦人労働組合連盟』を結成し、移民女性労働者とアメリカ生まれの中産階級女性が協力しあって活動した。紙面の都合上、詳述できないが、今後も、人種・民族・階級・国境をこえた女同士の連帯を視点に据えて女性史を学んでいきたい。

### ●話し合いの中から

森本(千葉) 差別を感じる心があれば、解放思想がそこから生まれるわね。公民館の講師などをして感じるの、ほんの三年前には、「うちの夫をどう変えようか」とケンケンガクガクだったのに、今は「親業」に象徴されるように、よい

子育てのマニユアルを教えて下さい、と受け身。「女の自立は？」なんて問いかけても、反応なし。見せかけの解放をしてしまったのかしら？ どうやって我々はメッセージを届ければよいのでしょうか。(森本さんは彼女の国民学校時代の「よみかたノート」を持参して、みなに見せて下さいました)

上杉(静岡) 私たちの世代は、母たちの状況を乗り越えようとしてきた。でも、米国の女性解放運動とくらべて日本の場合、女の子の育て方に力を入れてこなかったという反省がある。静岡では、世間が認める「よい母親」とは、その子の性格や人格はどうあろうと、輪切られた上部の学校へ入れた母親。

谷垣(大阪) 今の状況に一番乗らざるを得ないのも女たちなのよね。大阪でも自治体主催の女性講座が盛んだけど、私はそこで働く者として、「国の期待する母親像」とは違う意味の内容に変えて行く姿勢が大切だと思う。それを、それぞれの場所でやりましょう。見直すきっかけをつくりましょう。

※話し合いは、十二時半まで続き、時間切れとなりましたが、この他に高校家庭科教師の北谷さん、大沢さん、安原さん、「静岡女性史研究会」の勝又さんなど、それぞれの現場での状況を踏まえた発言をありがとうございました。

## 5 女の解放・男の解放

武田 秀夫

フォーラム終了後に寄せられた第五分科会参加の感想を読んでいる私は、やはり世話人を引き受けてよかったと実感した。分科会の内容の要約を私などがやるより、論より証拠、その感想の中から、初参加の「普通の男」お二人の文章を読んでいたきたい。一読、私は気持ちちが和み、やがて襟を正した。

### ●飯田淳さんからの手紙

We.フォーラムではお世話になりました。参加後の感想も、こちらからなかなか出さずにすいません。分科会では、短時間でしたが、重川さん、津田さんの話は、一家団欒に、職場の仕事に苦闘している姿として、我が身に引き寄せながら、

大変ですよねえと、おもしろく聞いていました。夜の部では、映画「ベンボスタ」の後、遅れて行きましたが、「女の解放」派？の人たちが激昂していたようで、早々に引き上げてしまいました。

何よりの収穫は、最首悟氏の話聞いたことでした。星子さんを中心とする家庭生活をもにした「人権」「現代社会の構造」は、しんみりと、元氣を与えてくれる話でした。フロアで売っていた著書『生ある者は皆この海に染まり』と『明日もまた今日のごとく』は買い求めて帰りました。

我が家の場合、家事の分担や勤務時間外の仕事の際の子どもの世話や、夜飲みに出るといふ時に、伸さんと僕とで、どちらかが肩代わりしたり役割分担をしあうということ

になる。「恩着せがましく家事をする」「外に出ることが私よりずっと多い」というようなことを言われ、しょうがないと言いつつしながらも、言われる通りだと納得せざるを得ない。母や祖母の病気の時には、伸さんが優しく彼女たちの世話をし、僕の方がずっと外の仕事にかまけていた。

ということを冷静に考えてみると、「嫁」という立場で、しかも外の仕事をこなす伸さんの気持ちの安定をバロメーターとして、なんとなく家の皆が気持ちを楽にしていられる状態がいいと思うのです。

(最首氏の文章からの引用。略)

学校での発言権を多く持とうとすると、必要以上に校務分掌上の〇〇主任をたくさん引き受け権力欲が満たされ、帰りが遅くなるようになる。それに不満を持ち、僕の行動に異を唱え、引きもどしてくれるのが、やはり女である伸さんであり、二人の気持ち合い、そうしてなんとなく家の皆が気持ちを楽にしていられる状態がいいと思うのです。

こんな風に、最首氏の考えをノートに書きうつしたり、それにあわせて個人的な、家族の中での女と男、伸さんと自分ということについて考えることが、フォーラム参加の感想と言えるかもしれません。

星子さんの育児に触れて「子どもは三歳で親の恩を返し終わる」という箇所がありました。それは、要約すると、「親

は子を三歳までは可愛い可愛いと育てる。それは、子が親に産んでもらったという借りがあり、親に世話になった恩を返しつつある期間である。三歳頃の第一反抗期は、その恩を返し終えた時。逆に親は、可愛い子に借りを負った。だから親は、子が三歳以後どんな風に育とうとそむこうと、親は借りがあるので、その借りを子に返し続けねばならない」というものです。

8月26日から二泊三日、夏休みに初めて家族四人がそろって旅行に出ることができました。それは、伸さんの職場の大家族、おとな七人子ども七人の「山中湖テニス合宿」と称するものに便乗したもの。体を動かし、汗をかき、ビールを飲んで風呂に入り、お酒を飲んで談笑するという快適なものでした。

一行の中に、二歳半と七か月の赤ちゃんを連れた若い夫婦がいました。その父親が非常によく子どもたちの面倒を見ています。ふだん家にいる奥さんにもテニスを楽ませようともし、時おり赤ちゃんがぐずることはあるが、その四人は、本当にうまくいっているように見えました。親が子を可愛い可愛いと育て、子が親に恩を返しつつある状態でした。可愛い子どもたちを見ていて、我が中一と小三の子どもたちを、三歳以後の借りを負った者として、やさしく、おずおずと関わり、恩を返しつづけなければいけないあと考えさせられます。

した。

僕の場合、「女の解放・男の解放」で考えざるを得ないのは、家の事情に関わるようになってきます。同居のように暮らしている九十六歳になる祖父は男であるし、夏バテ気味の母は、女である。その母は疲れてくると、どうも祖父に調子を合わせることがつらくなるようだ。夏休みはほとんど家において、食事は僕たち家族も一緒にするので、そんな重たい雰囲気ですぐにわかる。祖父までも含めて皆が気持ちに楽にしていられる状態をつくらなければなりません。具体的には、母を休ませ、僕が祖父と話をする時間を増やすということ。均衡を保ちます。また、僕にできることで、夕食のおかずづくりは、楽しみながらできました。

昼の一時から、金子信雄の「楽しい夕食」を見ます。氏は毎日出来上がりの後、お酒のつまみに試食をしているのですから、味は左党向き。つくり方も下ごしらえさえしておけば10分〜15分で出来てしまい簡単です。今日は厚揚げのみを煮こみ、おじいちゃん用にはからくないようにしておいたから、などと食卓にのせると、ふだんより話はずんでいくようでした。祖父は昔話をくり返し、母や仲さんという女性の方に相づちを求めます。そんな時に、彼女たちの抱擁力をあらためて感じます。

はがきをいただいてからぼつりぼつりと書いてきました。

分科会のテーマからはずれた日記、雑記のようですいません。今日で夏休みは終わり。しかし明日は九月一日、映画の日なので、四人で、「バック・トゥ・ザ・フューチャー3」を見に行こうなんて言っています。

### ●女の解放と「恨み」

島田一生

初めてフォーラムに参加して、色々なことが頭をよぎり、様々な気持ちが生まれてきた。まだそれを整理できないでいることが、この会に参加したことの新鮮さを物語っているように思う。「新鮮さ」というよりは、今まで欠落していた視野が、急に目に飛び込んできたという方がいい。

第五分科会に参加してみても（夕食後の会も含めて）感じたことは、「恨み」という言葉がびったりする雰囲気だった。特に「女の解放」という側面になるとその感じが強かったように思う。女性からの言葉の中に、直接表面には出てはこないけれども、その底流にはぶ厚い「恨み」が存在していたように思える。そして、その「恨み」のあるなしが、言葉が宙に舞うか、地に突き刺さるかの決定的な別れ道になったようにだ。

「恨み」は抽象的なものではなく、現実の生活の具体的な場面で、刻まれていくものだ。そして、そうでなくては具体的な解放の道すじも、現実的に見えてこないに違いない。男た

ちが「些細なこと」「とりたてて騒ぐ程のことではないこと」「二の次のこと」として、邪魔にし、省みなかったことの、事実この現実の社会構造の中では端に寄せられてきたことの営みの中で、女の「恨み」は蓄積してきたと思う。

男はまず、その「恨み」を肌で感じとらなくてはならないように思える。そうでないと具体的な方法として出されてきている様々な女の解放についての提案に対して、「完全ではない」とか、「極端すぎる」とか、「そこまですなくても」とか「男の立場にもなってくれ」とかいうところでの議論しか生まれてこないように思える。「恨み」を見すえない議論は、また「恨み」を「感情的だ」として軽視する態度は、結局は何の変化も引き起こさず、支配・管理の掌中にはまりこむ。

確か第五分科会の中で、江戸時代にも男がい、いわゆる「厨房」に入っていたことを指摘した話が出た。その事実はある意味では、男社会の絶対化を相対化するものかも知れないが、逆にそんなことで「恨み」をなだめられてたまるか、という感情も湧いた。そして、十年くらい前、もと名主の農家を見学した際に見た、台所の隅に位置していた黒い大柱を、その柱の名前とともに思い出した。

「嫁泣きの柱」という名だ。なんとグロテスクな響きのある名前か。なぜならその柱の呼称は、泣いている「嫁」たち自身がつけたものではありえず、泣かせていたまわりが名づけ

たはずだからだ。それを名づけたのは、まさに「厨房」に入って、女が泣いているのをしばしば垣間見た男たちなのだろう。

「恨み」を日々の営みのなかで柱に刻み続けた女と、女の「恨み」を通り過ぎて、「柱」の呼称を伝えつづけた男たちの決定的な断絶は、今も続いているように思えてならない。

第五分科会の夜の部では、その「恨み」が感じられた。その「恨み」の前では、「高速道路を、一気につづ走る男」の疲れや死は、滑稽に見えることだろう。ちょうど、金芝河にとって、三島の死が「滑稽」以外の何ものでもないように。

僕自身、この会の存在はもう五年も前から聞いていたし、参加を誘われてもいた。けれども、その間「高速道路を走っている」という理由で参加しなかった。しかし、実は怖かったからかもしれない。「高速道路」の道理など通用しない「恨み」の力に対して逃避していたのだと思う。

何故今年参加したのかと言えば、軽々しく「愛」という得体の知れない言葉によってはおさまりのつかない自分が在るからだということと、「恨み」と向き合えば自分は駄目になるという感覚からだった。

来年もたぶん僕は参加すると思う。ためになったとか、女性を解放しなければならぬとかの理由からではなく、「恨み」の場所からの参加になると思う。

## ● 分 科 会 ●

### 6

# 家庭科につなげる水の話

金子 博

一 なぜ「水」と関わったのか

この分科会を担当することになった経緯はこの際、省略して、私事を先ず話させていただきました。

以上、飯田さんや島田さんのようなWeははじめてという男性を多く含む五十名ほどの参加者をえて分科会はおこなわれた。重川治樹さんには父子家庭の視座から、津田正夫さんには企業社会に生きる男の「リアリティ」を問う立場から、諸橋泰樹さんからは「日本における男性学の可能性について」、それぞれ問題提起をしていただき、討論をおこなった。全体として、Weにはめずらしく、「男から男へ」という基調に貫かれた三時間だった。

分科会の詳しい内容については、テープを忠実におこした小冊子を作成したのでそれをお読みください。十数名の人々から寄せられた感想を第二部として収めてあり、次への討論のステップ、あるいは芽は、ほぼ用意されたと考えているところ。(一部四〇〇円 申し込み先 武田)

三時間の分科会があつという間に過ぎたが、その前後、後夜、最首悟さんもふくめて深夜におよんだインフォーマルな話し合いもまた、たいへん刺激的だったということを特に付言しておきたい。

今、東京・小金井市を中心に活動している三多摩問題調査研究会(さんたまけん)の事務局をしています。この会は間もなく創立二十年を迎えますが、地元の都市河川である「野

川」にこだわり続けて活動してきました。私が入会したのは十六年前ですが、そのきっかけは宇井純氏の「自主講座」で配布された一枚の機関紙でした。

もともと司法試験の合格をめざした自主的学習グループの有志が、地域の環境問題に関心を抱いたことが会の創立につながったのです。当時、都市河川の多くは汚濁が著しく、地域の住民から見捨てられていました。多摩川の支川である野川もまた同じ状況で、ただ夜明けの一時だけ、流域から集まった清浄な湧水を求め、コイが泳いでいるのでした。この事実を踏まえ、住民への社会調査を実施したのが調査活動の始まりです。調査を小論文にまとめ、篠原一氏ら各界の方々に寄稿してもらい『水辺の空間を市民の手に』を自費出版（一万部）したのです。その後、野川流域の湧水量調査等を実施するかわら、機関紙『野川を清流に』を発行し続けています。この間、市民運動の多くが経験した「時代の波」を小会も避けることができず、何年間かの衰退の時期がありました。本題の「水の話」といってもとても広い範囲なので、ここでは水問題に関わる市民運動の動きを中心にしました。

## 二 水をめぐる市民運動の動き

日本の水問題をめぐって、主に二つの全国規模の大会が毎年開催されています。「水郷水都全国会議」と「全国水環境

保全市町村シンポジウム」です。時代の要請か一九八五年にそれぞれスタートしました。

「水郷水都全国会議」は住民、研究者、自治体職員らが実行委員会をつくり運営しています。第一回は島根県松江市で開催され、中海・宍道湖の淡水化計画（水質の悪化によるヤマトシジミの絶滅の危機）に対して中止の特別決議が採択されました。その後、湖沼の保全から湧水の保全、河川環境さらには森林保護へとテーマは広がっています。一方の「全国水環境保全市町村シンポジウム」は通称「名水シンポ」と呼ばれ、環境庁が「名水百選」を選定したことが契機になっています。こちらは水郷水都全国会議と違って行政主導的で、住民参加を敬遠した運営の感があります。第4回の福井県大野市の場合、住民運動リーダーのパネラー採用について行政サイドから異論が出たと言われています。

今日、地球環境の保全が声高らかに叫ばれていますが、具体的には地域の環境問題にどう取り組むかでしょう。この場合に市民、行政、研究者などが、それぞれの立場でそれなりの役割を果せるか否かが肝要となるのです。小金井市では一つの試みとして一昨年「小金井の環境をよくする連絡会」が創立されました。この会の呼掛けで昨年から「身近な川の一斉水質調査」が実施され、多摩川水系を中心にした市民が多数参加しました。調査はパックテスト（5cm程のビニールチ

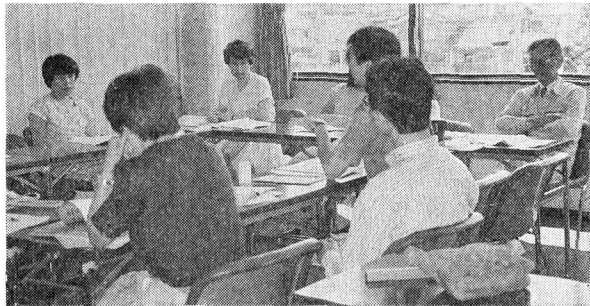


ユーブに試薬が入ったもの」と呼ばれる簡易水質測定法により行ない、結果を地図化します。将来、全国的なネットワークができて、水質以外に快適さ、生き物にとっての状態などの指標を加味した総合評価が下せたら、と考えられています。

### 三 これからはこんなことを

「身近な川の、一斉水質調査」は米国のGREEN（河川が結ぶ地球規模の環境教育ネットワーク）をモデルにしようとしています。地域の河川を活動の場とした中学、高校生を対象に、行政や研究者と連携しながら進めるプロジェクトで、一九八四年にミシガン州でスタートしました。コンピュータ通信で情報交換をおこなっています。このWeフォーラムでも「家庭科におけるコンピュータの位置」分科会がありました。様々な弊害がコンピュータの導入によって生じることも確かでしょう。しかし、使う側の考え次第によっては一つの有効な手段にもなる、と思います。将来、全国各地の学校が、その地域の水情報（その他のことも）の発信基地になることも夢ではありません。

昨年、石版画家の村松昭さん作品の『野川散策絵図』が出版されました（ベースボールマガジン社刊）。全長二・七メートルに野川流域の情報が折込まれ、楽しいイラストが豊富に描かれています。これまでに多摩川、荒川・隅田川、



玉川上水、千曲川、信濃川などを絵地図にしています。地方自治体では、独自の観光地図を作っているところが多くありますが、もしも近くに川の流れがあればそれを絵図にしてほしいものです。

### 四 分科会に参加された方からの話題

この分科会には次のような方が参加されました。

○高校教師（生物・横浜市）  
—環境教育は家庭科の方が取組み易い、○養護学校（大野市）  
—将来家庭科で水の事を取上げたい、○家庭科教師（尼崎市）  
—公害の街、琵琶湖のまづい水を飲んでいる、○家庭科教師（横浜市）  
—タンザニアで二年間暮らした経験があり、一年半は断水だった、○主婦（東京都）  
—テレビで水問題の話をしてもっと深く知りたい、○主婦（東京都）  
—この四月に小金井市へ移ってきたばかり、○建築士（福知山市）  
—もうリタイヤしたが水関係会社の技

術関係の顧問をしている、○家庭科教師（大阪府）―授業でまだ「水」を取上げたことがないので、○他に途中参加された富士市の方。

福知山市から来られた建築士の方から、いま学校の水道設備が良好な状態ではなく心配している。もっと学校の先生は関心を持ってほしい、との話がありました。大阪の家庭科の先生は、授業の前に流しの水道をかなりの時間、流したままにしておかないと使えない、水質には常に不安を抱いているなど、ちょっと深刻な話でした。カビ臭のする水を毎日飲んでいるとのことですが、この水は例えば地下水を水源にしている街の保健所で検査したとき、「飲用不適」とされる可能性があるのです。国が決めた水道水の基準の中に「味」「臭い」に「異常がない」との項目があります。この基準に従えば「異臭」は直ちに「飲用に適さない」ことになるのです。大阪の場合のように、常に「異臭」が「異常でない」状態とは、どのような環境なのか。学校教育の現場で、やはり真剣な議論があってもいいと思います。

「福井県大野市は地下水が豊富でおいしい水が当たり前。かつて地元の人はそのすばらしさに気付かないでいるのです」。こう話された大野市の地下水も、いま水量・水質とも危機的な状態になっています。河川のコンクリート三面張りの改修が進み、水循環の分断による地下水位の低下が起き、そ

の一方で、上流のダム開発によって川そのものに流れる水量が僅かなものになっているのです。

今年五月、「日本環境教育学会」が創立されました。創立大会の一般講演ではいくつかの教科から、実践報告がありました。が、残念ながら家庭科からのものはありませんでした。環境教育の中で、家庭科が果たせることは少なくありません。横浜の生物の先生が言われたように、家庭科だからこそできることもあります（例えば『家庭科新時代』ウイ書房刊『水をみつめる』を参照して下さい）。また、学校の先生もときどき「市民の顔」「住民の立場」で、地域の問題に発言することも大切だと思います。

分科会の残り三十分は、話の弾みで「バックテスト」の実習をしてしまいました。はじめは外の排水を汲んで、部屋の中で行おうと思ったのですが、せっかく狩野川がそこにあるのだから！、ということでき歳橋横の河川敷へ降りて、（簡単な）水質調査をしました。このときの話では、家庭科の教材費で、先生の裁量によって器具・薬品を購入できることが分りました。ひとつ試してはいかがですか。

## 7

## 私の教育異空間体験

—そろそろ着地したいのですが—

高月 フミコ

静岡の教育といっても他県と特に違った教育が行われているわけではない。「ちょっと変じゃない？」と言った人が「ちょっと変じゃない？」と言い返されてしまう二重構造、静岡県人自ら認める変革意識のなさ、誰かがやってくれるのを待つ天領的依存性、みんな一緒が安心——こういったものは「日本的」と言ってしまうほどのものであるが、これらが公教育の場で体系的に行われ、実効をもって現れている場合を、あえて「シズオカ的」と、私たちは称している。

静岡の公教育が、また、特にヒドイという数字が出ているわけでもない。子どもたちの順応性は遅しく、逆境下で人間は強くなる例もあることを考えると、何十年後結論がどう出るのか。あるいはモノスゴイ人間の林立が見られぬとも限ら

ないが、しかし、今現実子どもたちは傷ついてボロボロになりながら、また、それを隠して重い鉄面皮被りながら学校に通っている。力尽きて通えなくなった子も増えこそすれ、減ってはいない。目の前にいる子どもたちの状況はとても楽観してはいられないのだ。

## ● スキゾ・グズズ＝カンリ・グズズ

集団教育に管理は必要だと学校は言う。それはそうだ。しかし、だからといって今ある校則や生徒心得などが、本当に全部、それがないと集団教育に支障をきたすようなものなのだろうか。時代に合っていない不合理としかいえないものを「伝統」と称していたりしないだろうか。

「熱いうちに打て」——ある校長の言である。鉄ではない。打たれるのは子どもである。かなりの公立小学校では年間通して半袖半ズボン（女子はブルマ）の体育着で学校生活を送っている。気候温暖の地とはいえ冬は寒い。単に寒がりという子には悲劇以外の何物でもない。上着を着ていたために病氣とみなされ体育の授業は見学させられた例もある。

更に、「自主トレ」と称し、始業前グラウンドを何周か走らせる学校も多く、走るのが苦手な子がサボったりすると「マイナスの自主性」（ある教頭の言）とされる。運動すれば健康になる、健康なのはいいことだという大義の下、頑張ればプラスの自主性。嫌だからしない、他のことをしたいといふのはマイナスの自主性なのである。（先生がこんなヘンなことば遣いして、いいんでしょうか？）

最近縮小したところもあるが、体育着には前後、また、前だけ後だけに「18×12 cm」くらいのゼッケンをたいいつける。中学ではジャージにもつける。普通の人間なら匿名で歩きたい町中を、中学生が氏名を背や胸に張りつけて部活動などのため登下校するのはココのフツウの風景である。

制服、制帽、靴、上履き、カバン、それに男子の丸刈り——子どもだって自分の姿が他人と全く同じなんて耐えられないから（じゃあ中身で競え？ そんなことオイソレとできるもんか！）、わずかな差異の追求に血道をあげることになる。

セーラー服のリボン、服の裏地（江戸時代？）、ベルトの幅、靴下の折り返し、髪結び方。もっと進むと、コトバづかい、目つき、歩き方……で「私」を表現するしかない。

禁止——違反——摘発——反省文のいちごっここの狂言回しを勤めているモノを、スキゾ・グッズまたカンリ・グッズと呼ぶが、ココではこうしたグッズは一般業者委託も一部あるが、主に「学校生活協同組合」が学校を通じて注文を取り販売している。体育着、ジャージ、靴、靴下、カバン等々であるが、体育靴の男女色違いや、上履き、バッグの学年別色違いは、弟妹に譲れないという恐しく贅沢な買物である。

この「学生協」の衣料売り上げが県業界第二位とか、県東部地区では生徒数が年々減少しているのに売り上げは逆に伸びているとか聞けば、「校則とツルんで商売してんじやないの？」と陰口たたきたくもなるといふものだ。

割もどし金なるものが学校に還元されるが、その用途を明示しているところは少ない。PTA会費に組み入れられる例もあるが多くの会員はそのことを知らない。ともあれ、お陰でどの子も見かけは同じ、参観日にわが子を識別するのも容易ではない。

#### ●究極のテスト

ココには、ナマハゲみたいに泣く子を黙らせ親を黙らせる

「<sup>しゅもん</sup>出文テスト」なるものがある。これを知らないとしズオカではもぐりと言われるというものだが、県校長会、高校校長会、県教組、高教組の四者から成る組織で、現職教師が作成にあたる「静岡県出版文化会」製のテストが、中学三年の二期、二回にわたり授業時間を割いて県下一斉に行われる。任意ではあるが受験者数は十割近く、並の業者テストの比ではない。全県にわたって偏差値の算出が可能のために事実上の高校入試といわれている。

定期テストと並んで成績個表に印刷している学校もあるくらいで、客観的資料価値が高いために、中学は独自の進路指導ができないと出文のデータに頼らざるを得ない。そうすると出文対策を目玉にする塾が氾濫する。このことが授業の空疎化となって学校へ返ってくるという悪循環を引き起こしているのだが、出文テストの更に大きな問題は、小学校でも「県下一斉テスト」が行われていることである。

小学校の単元ごと、学期ごとに行われる到達度テストが、全県統一教科書に即して全県的に配布される。一応任意であり、独自のテストを作る先生もあるが、少数派だ。一字一句テストが行われることによって、ただでさえ指導要領で細かく規定されがちな個々の先生の個々の授業の工夫や、バリエーションが制限されてこないはずはない。

また、業者間の競争がないために、テスト自体も粗悪化の

傾向を免れていない。同じテスト目がけて勉強する、教育の画一化が小学校の段階でも行われているのだ。しかもこのテスト、もちろん受益者負担。果たしてどれくらいのお金額が動いているのだろうか。

### ●支えるのは親

丸刈り校則見直しは、88年文部省通達以降、県西部から東漸して、東部でもすでに時間の問題という観があるが、九月、沼津市校長会と任意団体「みんなの教育講座」との話合いの席上、ある校長が発言した。「われわれは丸刈りを強制してはいない。長く続いた習慣を変えるには地元のコンセンサスが必要。一朝一夕にはいかない。」（えっ、校則って学校が作ったんじゃないんですか？）

ある中学が自由化に移行する半年前にとったアンケートでは、自由化賛成は先生80%、生徒80%、親40%という数字だった。一番保守的なのは親。こういう数字が出ると、世間の評判がこわい今の学校は手の打ちようがない。

しかし、この40%という数字に、私たちは自分をも含めて悲しい「親の闇」を見てしまうのだ。カンリ・グズズを持たせないと仲間外れになるのでは。親が学校に文句言ったら子どもが不利になるのでは。みんなと同じ格好をして同じことばしゃべって、できるだけ目立たず、でも成績だけは良く

て、他の子を蹴落してイイ高校に入ってほしい。それがこの子の幸せ……。 (これを内申書症候群といいます)

もし、80%という先生の数字を先に親が知っていたとしたら、親の数字もそれと同程度もしくはそれ以上になっていたと思われる。学校信仰、学歴社会の中で、「殴ってもいいからビシビシやって下さい」と親が言うのは、むしろ親自身の親権放棄もあるが、それ以上に、尻尾を巻いて自分をより小さく見せる従順な犬のように、学校に寄りそっていたい親の媚なの、そう言われると学校もつい「任せて下さい」と見栄を張る。先般の校門扉圧死事件も、子どもの命まで委託された(と思いこんだ)学校の「見栄」といっていいのではないか。

いきすぎた管理、校則、丸刈り、体罰、業者テストに頼る安全第一の進路指導、いずれも側面からしっかり支えてきたのは、わが子の実像が見えていない親なのである。

### ●学ぶということ

人が「学ぶ」とはどういうことだろう。未知のものを知る喜び、問題が解けた手応え、自分がだんだん大きく広がっていく実感——それは、人工的な一線上に並べられた数値で表わせるものだろうか。並べてしまえばそこに見えるのは質的な差ではなく量的な差だけである。偏差値教育の最も危惧さ

れるところは、人間は一つの価値基準で並べうると誰もが思いこんでしまうこと。並べない、並びたくない人間もいる、本質的に人間は一人一人違うのだということを看過ごさせてしまおう点である。

しかも、今、その一つの価値基準で小学生は中学へ目を向け、中学生は高校へ目を向け、常に今いる所ではない次の所へ気が行っている、今を生きていない子ども——自己決定どころか、自分を語れない、自分のことばがない、語るべき自分がない子どもが確実に増えている。未熟なために、あるいは早熟すぎるために、学校が掲げてくれる一つの型、目標に適応しない子どもたちは、どこへ行けばいいのか。

一日も学校へ行かない子どもにも、オール1の通知表が届く。それを見て、「学校って私のこと全然知らないね」と笑い合えるまでになった親子、学校の速度についていけなかった子に「勉強っておもしろいね」と言わせてしまった塾の先生、丸刈り頭と長髪頭とでお互いの学校の情報交換を、塾でしている子どもたち……。

学校は学ぶ場であってほしい——私たちは素朴に願う。

資料提供協力

滝 義明(塾主宰)

大沢恒夫(弁護士)

8

あなたに見える？

アジアからの労働者

根 津 公 子

言葉がズシリと胸に迫った。

● 自己紹介と発言

参加者が各々、自己紹介を兼ねて問題意識を出し合った。問題意識が多様で、かつ深い。

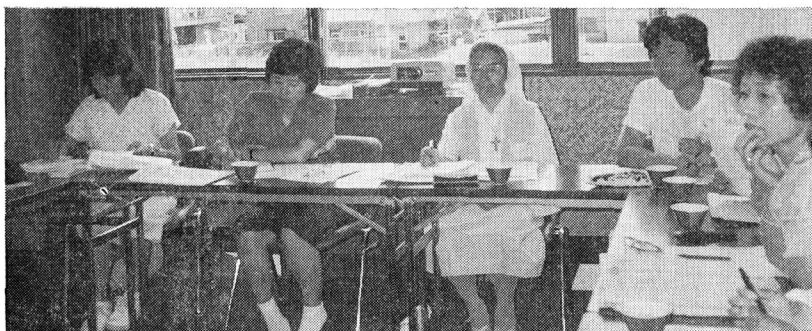
星野（東京）・保谷市職員。「不法」という言葉で人権を取り上げる日本社会。じゃばゆきさんのときは問題にもならず、じゃばゆきくんになってやっと問題になった。外国人労働者の問題は、日本人社会を映し出している。

森（大阪）・家庭科教員。身近にいる在日朝鮮・韓国人のことを知らされずにきたことが恥ずかしい。もっと知り、関わっていききたい。

生活を破壊し尽くされ、日本の「豊かさ」を支えさせられてきたアジア諸国の人々。安い安い労働力として、あるいは商品として、日本に送られてきた。もはや、どこでも彼らを見かけるが、そのことは私たちに私たち自身の生き方を厳しく問うている。本当の豊かさを求めてきたWe.として、考えたい大きな問題ではないかと、この分科会を設定した。十五名参加。問題提起は石井芳子さん。

最初に、スライド「生きるために海を越えて——フィリピン出稼ぎ労働者」（アジア太平洋資料センター製作）を観た。「いやなことを人に押しつけなくてもいいように、日本の社会を変えていくことはできないのでしょうか」という最後の





分科会風景（中央が石井芳子さん）

岩瀬（大阪）・小学校家庭科教員。昨秋、「奈良に比女性の売春斡旋宿」

の新聞記事を読み、知らなかったことでショックを受けた。それを契機に、大阪Weの会で学習会を持ち、実際の活動（釜崎でキリスト教協議会が毛布やおにぎりを配り歩く）に参加し、問題意識を持ち始めた。

中島（東京）・都労政事務所職員。労働相談・労働問題の調査を通して、新聞等で知る外国人労働者像とは違う彼らを知った。彼らは一人ひとりいろんな文化を持ち、いろんな期待を持って日本に來ている。彼らが日本に持ってきてくれる豊かさ

があると思う。女性の問題は闇から闇へで、窓口には出てこない。

松尾（福岡）・高校家庭科教員。昨日の人形劇を見て、物を大事にする生活、本当の豊かさを考えさせられた。昨日の夕食の豪華さに矛盾を感じ、予定していた家庭科の分科会を止めてここに参加した。知り合いから、「在日朝鮮・韓国人問題を放置したまま市民運動だなんて欺満だ」とつきつけられている……。

魏（東京）・高校教員。在日中国人。今までは自分が在日していることを考えてきた。しかし、それではないかと思うようになった。豊かな国にいる在日は、やっぱりその眼でものを見ているのではないかと。

#### 〈石井さんからの問題提起〉

石井芳子さん・天使の聖母宣教修道女会シスター。一九七八〜八六年、任務でペルーに。「ペルーに滞在している間に、日本は豊かなのに、一方になぜこんなに貧しい人々がいるのか、と問題意識を持ち始めた」と。

八八年〜、シスターの傍ら、アジアを考える静岡フォーラム（IFFAS）で活動する。

八八年、静岡市でフィリピン人のマリアさんが死後十日を経てアパートで発見された。マリアさんの死去に痛みと責任



と関心を持った市民が追悼集会を開く。その発展的解消としてFASを結成する。駆け込みセンターの活動、アジア講座、外国籍市民との交流等を行っている。

「マリアさんの事件が起きるまでは、私もじゃばゆきさんとかそういう問題は大都会に限られるんでは、と思っていたのです。ところが自分が住んでいる静岡で事件が起き、ショックを受けて。日本の中に第三世界があることに気づいたのです」と石井さん、FASへの関わりを語られた。

「事件になるか、彼ら彼女らがSOSを入れてくれなければ、近くにいるも分からないことばかり。私たちの眼に触れない所で、いろんな人が苦しんでいる」と前置きし、石井さんが直接関わられた事例を、そして活動を通して体得された思いを語られた。親身になって精力的に動かれている様子が伝わってきた。

お話の中から幾つか紹介すると――

○「フィリピン女性の国際結婚、幸せな人は少ない。破綻の原因は、夫の暴力。異質なものを受け入れない、女性を商品として見る日本の社会に問題がある」

○「彼女たちの状況を見ると……『ご馳走食べて心が痛い』と先程おっしゃったこと、当たり前なんですね。こういう活動しますと、食べるものも変わってきますし、買うものも

考えますよ。自分が変わろうとしていけばいくほど、いい」ということが分かってくる。そこから自分の生活が変えられるのではないか」

○「アジアを考えると、自分にとっかかりのいい所から入っていったいいから、まずはやらなければ。どこから入っていても必ず繋っている」

○「アジアの人たちを、貧しいからといって美化はしない。本来の人間性に学ぶものもあるし、逆に醜いものもある。ボランティアという言葉は嫌い。人間と人間との関わりから友だちになるのだから。私はすぐに、皆、友だちになってしまふ。日頃の関わりが、本当の国際交流ではないか」

○「紙を捨てるようになると、平気で物を捨てるようになる。人も物と見るようになる。使い捨ての原理は、人をも平気で使い捨てる。3K（きつい・汚い・危険）の仕事を外国人に追いつけ、使い捨て、片や企業戦士。小さい時から、土に親しむ、労働する教育をする以外、解決の道はないような気がする」

#### ● 討論・まとめ

石井さんのお話を受けて、話し合い。各人が自分自身を問う作業をしたように思う。話し合いの中でFASへのカンパが提起され、ささやかな行動の一つとして実行された。参加

者の感想を紹介して、その雰囲気伝えたい。

\* 何よりも考えさせられたのは、中島さんからの問題提起。

「近い将来、アジアからの労働者の子ども達が、日本の学校に在籍するようになる。そのとき教育現場では、彼らをどのように受け止めるのか」

そして、その答えがまるで用意されたかのような、アジアからの労働者に対する日本の若者の意識調査結果……無知からくる差別と偏見……学校現場にいる者として、このような事実を予想だにできなかったことを反省すると同時に、私の頭を駆け巡ったのは、「現在の教育行政、そして学校現場では、なにひとつ彼らの子どもに対して誠実に対応しない」という、確信めいた予感でした。勿論、若者の意識調査結果も、決して意外なものではありません。日本の教育は、加害者としての戦争責任をいまだに明らかにしていないし、私たち教師一人ひとりもこの事に真剣に取り組んでいるとは言えないのですから。

論議の中でもあったように、在日朝鮮人問題を本気で解決（具体的な権利保障など）しない限り、日本の国際化はありはしないと、つくづく思いました。そして、無力感に襲われる中、勇気づけられたのは、実際に活動されているシスターの話でした。

私に何ができるか、何をしなければならないか……まず

は、もっと多くの事実を知るために学習し、何らかの形で教材化したい。また、提起にもあったように、できる範囲で私も運動に具体的に必要な労力、または、資金を提供したいと思っています。

（松尾範子）

\* フォーラムのアンケートを読ませていただいて、会場がすばらしくて充実した内容で *very good* というのがほとんどの中（私もそうも思ったが）、ここの分科会に参加した人からは、'88年の開催地、大阪能勢のようなワイルドな設備・食事ではないのではという意見も（これもうなづける）。

豊かさをどうとらえるか。人から強制されて貧しい食事や環境に置かれるのはいやだけど、自分の意志で、少しずつ、便利さや豊かさの質を問い直していきたい。

熱しやすく冷めやすい典型的な日本人気質の私だけれど、「持続する志」を、*We* の仲間とともに持ち続けたい。

いろんな意味で、'89の水俣から'90アジア・子ども・人権へ繋がった分科会・フォーラムでした。これをこれからくらしの中でどう繋げていくか、私の課題です。

（西本和代）

\* 小学校では、いま、アジアを教える機会は、五・六年のごく一部の教材でしかない。それには、生きるために海を越えて、日本で悲惨な労働に就いていることに触れることも少ない。日本人自身の中にある差別意識にまず気づくことから出直さなければという思いを新たにした。

（岩瀬志津子）

9

メディアの中の性差別

吉田 清彦

今回の分科会は、昨年の89熊本フォーラムでお約束した、

関西ブロックからの「持ち込み」分科会の一つ。テーマがテーマだけに、日頃「教研集会みたいな学習会風なマジメな分科会はおモシロくない。分科会では肩書きやヨロイを脱いで、参加者一人一人の本音がポロポロとこぼれでる楽しい出会の場」に主張してきた者としては、多少尻の座りが悪いところもあったが……。

私事に亘るが、一九八四年に関西で「コーマーシャルの中の男女役割を問い直す会」というグループを作って、主にテレビCMを中心にメディアの中の性差別の問題に取り組んできた。六年間の活動の中で、全国各地でこの問題に取り組んでいるさまざまなグループの存在を知ることができ、また貴重

な資料も自ずと集まってくる。

今回「メディアの中の性差別」という分科会を「持ち込む」だ目的の一つとして、Weフォーラムの分科会という場を借りて、これらのグループとの交流をはかり、さらには、各グループから送られてくる貴重な資料を「コーマーシャルの会」の私的な財産とするのではなく、さまざまなグループの共有財産にしたい、ということがあった。したがってこの分科会は、もともと活動交流集会、あるいはワークショップ的な性格が与えられていたのである。

メディアの中の性差別、より具体的には、「伝統的」な性別役割意識にのっとったマス・メディアの定型的な男女の描き方がもたらすさまざまな問題点に対して、まず最初に声を

あげたのは一九六〇年代アメリカの女性解放運動であるが、国際的なレベルで見直しの気運が高まっていたのは、75年にスタートした国連・国際婦人年をきっかけとしてである。

日本でもその年、「国際婦人年をきっかけとして行動を起こす女たちの会」(現「行動する女たちの会」)が、「私つくる人、僕たべる人」のテレビCMを批判し、CMの中の男女役割について初めて問題を提起した。

それから十五年。アメリカ、カナダ、あるいはフランス、スウェーデンなどに比べて、日本におけるマス・メディアと性別役割に対する取り組みはかなり立ち遅れているとはいえ、さまざまなグループの粘り強い運動の積み重ねもあり、ここ一二年少しずつ様相を異にしはじめている。簡単に言うと、従来の「抗議・批判型」から「提案型」への運動のふくらみである。そして、女性を中心とする報道記者やCMの作り手などメディアの内側からも、これらの運動に呼応する動きが見えはじめてもいる。メディアの受け手と作り手、送り手との共同作業の可能性さえも見えはじめた、とも言つてよい。

今回の分科会では、このような流れを背景に、メディアの作り手、送り手とのパイプ作り、あるいは性別役割表現に関するガイドライン作りなどといった、メディアに対する具体的な働きかけのプログラム作りにも踏み込んで行きたかった

のだが……。それから、もう一つ、教育現場にいる人たちは、「メディア教育」についても具体的なプログラム作りにまで話を進めて行きたかったのだが……。

前置きが長くなったが、このあたりで、実際に分科会で話し合わせた内容の方に移ろう。分科会の参加者は、司会の吉田を含めて七名。そのうち学校教師は、長崎の中学校の家庭科教師の里一美さんと東京の小学校教師の鈴木まき子さんのお二人。他は、パート勤務のかたわら、藤沢市の市政モニター(教育グループ)として男女平等教育に取り組んでいる神奈川の葛山啓子さん、三児の母親であり、アメリカに長く暮らしたこともある千葉の大西麻里子さん、慶応大学四年生で、放送関係に就職希望の嘉本伊都子さん、それに神奈川女性会議の会員の佐藤斌さん。残念ながら、交流をはかりたいと思っていた全国各地のグループからは、行動する女たちの会の三井マリ子さんや坂本ななえさん、あるいは富山のメディアの中の性差別を考える会の斉藤正美さんなどからメッセージは寄せられたが、実際の参加者は得られなかった。

それにしても、せっかく同じフォーラムの会場にいながら、FCTI子どもテレビの会・市民のテレビの会の会員でNHKに勤務の津田正夫さんや女性雑誌研究会の諸橋泰樹さん、あるいは行動する女たちの会の中嶋里美さんといっ

た、本来ならこちらの分科会に駆けつけてくれそうな人たちが、それぞれ別の分科会の提案者であったりチューターであったりして同席できなかったことは、とても残念なことであった。

ということもあり、分科会の成り行きは、当初目論んだような活動交流集会といった方向には向かわずに、「メディアの中の性差別」について参加者一人一人が日頃の思いを語り合うという、We.フォーラム本来(?)の姿に立ちもどって、なごやかに進められた。

まず最初に司会の方から、当日用意した資料の紹介と簡単な説明を行う。当日用意した資料は、①コマージュの中の男女役割を問う直す会の最新のコマージュコンテストの結果報告と、「好感CM」ならびに「やめてCM」、パターン分類、②茨城大・教育学部のIさんの卒論ブリーフ「テレビCMにおける女性像―特に子どもに与える影響の視点から」、③富山の「メディアの中の性差別を考える会」の活動を伝える新聞記事、④総合ジャーナリズム研究会。「女性とメディア」研究会発行の研究レポート「女性とメディア」第一集、⑤NHK放送文化調査研究所の村松泰子さんの報告レポート「カナダ放送界の男女平等へ向けての取り組み」、⑥ハワイ「ホノルル市女性の地位に関する委員会」の中の「メディアにお

ける男女平等な取り扱いをめざす実行委員会」が製作した英文パンフ二種、⑦マス・メディアと人権ネットワークが放送界に提出した「放送に男女平等を実現するための要望書」など。以上合わせて六〇頁におよぶ「膨大」なものであるが、「メディアの中の性差別」の問題に対する今後の取り組みにとって貴重なものばかりである。

その後の話し合いは、学校教育（さらには学校そのもの）に対する批判や性教育のあり方、あるいは性差別そのものの背景や男女の働き方（働かされ方）などと多方面に話が分散し、肝腎の「メディアの中の性差別」に対して今後具体的にどう取り組むか、ということには深く踏み込めなかったが、ともかく「今は追い風が吹いている」という点で一応の結論を得た。

参加者の発言を一部採録してみると、「性の商品化はあらゆるところに見られるが、意識して見ないと、なかなかそれに気づくことができない」（里）、「ともかく、メディア（の影響力）ってすごい。海外と比較して分析すると面白いのでは」（嘉本）、「少年雑誌の広告にひどいものが多く、少年・少女雑誌のポルノ化も進んでいる」（大西）、「絵本の内容にも問題が多い」（鈴木）、「女性差別の根っこは教育にある。学校教育で本腰を入れて取り組むべき」（葛山、大西）。

来年のフォーラムでは「メディア教育にどう取り組むか」

といったようなテーマの分科会を持つのも一考。

最後に。分科会の参加者全員に「宿題」としてレポートの提出を求めた。こういった方法が好ましいものかどうかはともかく、六名のうち三名から感想文が送られてきた。それをそのまま掲載します。来年もまたお会いしましょう。

\*日本は古来より儒教の思想が深く根付いている社会である。そしてそれは男性が外で働き、女性は家の中で子育て、家事等に従事することを基本としており、この思想は敗戦による民主主義への切り換えによっても、その歴史が浅いこともあって容易には崩れはしない。

メディアにおける性差別を問題にしても、それはしないよりはましというだけで、対症療法の域を出ないと思われる。この点根本的に社会の思想を改めるのなら、大変気の長い話ではあるが、小中学教育の段階で、それを意識したカリキュラムを充分に組入れて徹底して行くことが、将来期待する思想に改まった社会を形成して行く近道と考えます。

(神奈川・佐藤 斌)

\*教育現場にいるせいか、性差別についてはあまり緊迫感を持っていませんでした。コマーシャルがたびたび登場するようなテレビもあまり見ませんので、「これが性差別」と提示されると「そういうもんか」といった受け止め方をしています。

た。しかし、子供の側に立って考えなおしてみると、ぎょつとする情報が多いことを知り、「これはのんびり構えておれん、私自身でできる事から始めよう」と思った次第です。

マスコミに働きかけ、コマーシャルの内容を変えさせていく運動は、即効性はなくともとても大事なことと思います。「子どもの権利条約」を批准することをしる日本の、経済大国、権利小国を再認識させられた分科会でした。

(東京・鈴木まき子)

\*テレビはほとんど見ない、ラジオは朝の語学番組しか聴いていない、新聞は毎日新聞のみ、雑誌は電車の車内広告を読み、よほどヒマとお金と興味があった時のみ買う(週刊朝日・文春・AERA・サンデー毎日、婦人公論など……)と、まあこんなところが私とメディアの現実のかかわり方です。それでも、メディアの悪さ加減は目につきます。テレビの普及率、本屋さんの数を考えると、日本は最悪の状態ではないでしょうか。イヤでも耳に、目に入ってくる音や絵に、子供も大人も、もっと注意を払わなければいけない、と思っています。

\*この分科会は、大変収穫がありました。資料がすばらしく、何か自分でできることは(?)と考えつつ、今も読んでます。同席された方と、またお会いしたいと思っています。

(千葉・大西麻里子)

# ★ がらくた座・チーおぼさんの 安原 千夏 人形劇を観て



がらくた座の人形や小道具・大道具はみんながらくたでできています。穴のあいたバンスト、破れた傘の柄、普通なら捨ててしまいたいようなものを使った芝居はやさしさを伝えてくれるような気がします。

ある物を生かしながら創造するのはけっこう難しいものがあります。例えば子どもを育てることはまさにそうだと思います。自分の子どもにはこうなって欲しいと親はいろいろ考えるのですが、それがなかなかうまくはいきません。だって子どもは親とちがった人間として、現にそこにあるのです。このことを忘れてしまいがちなのですね。

私は芝居の内容よりも観客をまき込み、受け入れる演者のやり方、チーおぼさん（木島知草さん）自身に魅力を感じました。それは劇の進行を邪魔する子どもとのやりとりがおもしろかったからです。進行役のがらくたのおじさんの足を引っばったり、観客への呼びかけにやじで答える子どもたちにどう接するか、興味がありました。こんなことをされるのは、観客のひとりとしても迷惑なのですが、「あ、やってる、やってる」という感じで、けっこうあくたれぼうずたちがかわいいなと思いました。

でも、自分の子どもがそんな態度を取ったら、私はどうしていたかしら……。「なんて子かしら、まったく親のしつけがなっていないんだから」と非難されるのがいやさに、その

場で叱ってみたりしてしまうかも知れません。だけどそうすることだけが本当に子どもを育てることになるかどうかには、少々疑問があります。やじを飛ばしたい気持ち、人形の足を引っばって劇の邪魔をしたい気持ち、そんな彼らの気持ちを受けとめて取り除かない限り、その場は静かになってもかえって気持ちに曲がってしまうのではないでしょう。

私がすごいなあと思ったのは、そんな子どもたちを拒否しないで、とり込みながら自分の仕事を進める、チーおぼさんのやり方です。やっぱり商売だなあ。たとえ子どもでもお客なのですから、なんとか楽しませる。かといって彼らに振り回されるわけではない。なんだか学校の授業と同じような気がします。みんなが静かに聞いてくれればそれにこしたことはない。でもそれができないお客がいたときにどうするか。

こと、子ども相手の場合は、子どもが大人を困らせるのは愛情表現のひとつのような気がします。気を許せない相手の前では、表面的に良い子を演じていても、何か満たされないものをあまえられる相手に求める。

足を引っばられて助けを求めるがらくたおじさんに、「いたずらも愛情のしるしだよ、もうちょっとがんばんなさい」とチーおぼさんが答えていました。まさにそのとおり、この言葉がそのまま私への励みしだったりもしました。

ひとは、ありのままの自分を受け入れてもらった時に幸せ

になれる。わたしの中の意地悪なところ、弱いところ、醜いところみんなわかって欲しいの。そしたら、わたしのステキなところぜんぶ見せてあげる。子どもたちは大人に向ってこう言いたいのです。大人になってもありのままの自分を受け入れてくれる人を求めて恋をするような気がします。

ただ、それを受けとめるだけの力が大人にあるかどうか大きな問題なのです。かか言う私も、毎日の生活の中で試され続けています。子どもはとても敏感で、こちらが拒絶しているうちは心を開かないで、遠まわしに大人を困らせて自分の気持ちを表現します。

劇の後の交流会のとき、参加者の中から子どものやりたい放題を許しているのはどういふことかという質問ができました。それに対して、たまたま今日はエネルギーがあつたのでそれなりにできたということ。その時によっては叱ることもあるという答えでした。でも、子どもの行動がいやだと思ったら、そう思った人が直接注意してもらいたかった、と。

ある地方の公演では、人形を壊されてしまったこともあるそうです。そこまで子どもの心が荒んでいるのが現実なんです。どこかで大人が受けとめなくては、子どもはどうしていいかわからなくなっていくばかりです。

春、西武線は小学生の遠足に占領されます。解放感から、子どもは、はしゃぎます。過ぎた騒ぎ方をしている子どもに





木島 知草さん

鼻先で出会うと、私が試されているような気がします。「まったく今時の子どもはなっていない」とか、「家庭や学校は何をしているんだ」なんて考えたくない人の気持ちが変わります。そんなことを考えながら、苦虫を噛み潰したような顔をして我慢していれば、その場は済んでしまいますよね。でも私も親なんです。自分の子どもが私の見ていない所で悪いことをするかも知れない。そう思うと、つい話しかけたくありません。「ねー、どこまで行くの？ 楽しそうだね。でも、電車の乗り方も勉強じゃないのかなあ」なんてね。だけど言い終わった後で、ちょっとびり気まずい思いをするのは何故な

んでしょう。

私も子どもと一緒に電車に乗ります。子連れの親子の中には親が子どものすることについてピリピリして注意ばかりしている人がいます。そんな光景を見ると、気の毒になってきます。あれじゃ、せっかくのお出かけが台無しです。もちろん親ですから、してはいけないこと、言ってはいけないことは教えずにはいけないですよ。でも、注意すればするほど言葉の重みが減るのを感じます。子どもは悪いと言われたことを試してみる。そして回りの大人がどう反応するかを見ています。

本当にいけないことかどうか。その場にいる他の大人の反応も含めて生き方を学んでいるのではないのでしょうか。ゆっくり試しながら育って行く。親だけが子どもを育てているわけじゃない。親から大人、社会という関係のなかで、いろいろな価値観の中で育ってこそ人間らしく育つと思います。それに、親だって自分ひとりの力だけで子どもを育てるなんて、とても責任が重すぎます。親が何回言っても聞かないことでも、本当に迷惑だと思った人の一言で、子どもは納得するのではないのでしょうか。

常々、学生服で堂々とタバコを吸っている高校生の姿が気になってきます。駅のホームなどで見かけたことのある方も多いと思います。たまたま通っている学校の教員にでも見つ

# 1990. We 夏季フォーラム

## スケジュール

8/3  
(金)

13:00 受付  
14:00~14:30 フォーラムへようこそ  
14:30~17:00 木島知草さんによる人形劇と語り  
18:00~20:00 夕食および交流会  
20:00~ 宿泊の部屋ごとの交流会  
20:30~ スラングルトーク「今も新しい家庭科を」

8/4  
(土)

7:00~8:00 朝食  
9:00~12:00 分科会  
12:15~13:15 昼食  
13:30~17:00 全体会シンポジウム  
テーマ「アジア・子ども・人権」  
シンポジスト 最首悟(東京大学・生物学)  
松井やより(朝日新聞・編集委員)  
コーディネーター 関 千枝子(全国婦人新聞  
編集長)

17:30~18:30 夕食  
18:30~19:00 石けんコンサート  
19:00~21:00 映画「バンボスタ子ども英和国」  
21:00~ この指とまれ式 交流会

8/5  
(日)

7:00~8:00 朝食  
9:00~10:00 さよならタイム  
10:00~ 分科会

- ① 天城コース
- ② 柿田川コースとそのネット
- ③ 新しい家庭科のウツ
- ④ 話し足りない人のコース

かれは処分を受けるのですが、他の大人は見えて見ぬふり。  
学校と社会の狭間で戸惑う彼らの姿が気になります。まず  
気づいた人から、エネルギーのある人から、子どもを見守り  
育ててゆかなくちゃ。そう思いました。  
まだ娘を背中にしょっている頃、駅のホームで学生服の高  
校生がタバコを吸い散らかしているのが眼にとまったことが

あります。そのときは後先考えず気がつくど注意していまし  
た。けっこう素直に聞いてくれたのですが、先日の新聞に大  
阪の公園でタバコを吸っている中学生にある男性が注意した  
ところ、もみあいになり倒されて、打ちどころが悪く死亡し  
た、などという記事を読むと、いよいよ考えさせられてしま

# 子どもと共に

蔡和美

★四年ぶりの首都圏でのフォーラム開催。実行委員に加わって準備を初めた当初から、今回は「子ども担当」になりそうという予感があった。Weの合宿がフォーラムになる以前、小学生と保育園児だったうちの娘たちは、大人たちが話をしている間をウロチョロ遊び回ったり、川原で芋煮会をしたりして楽しんだ。その後何回も親子でフォーラムに参加してきて、私だけでなく子どもも、友だちができたのしい体験をたくさんしてきた。もう彼女たちは私については来なくなったから、今度はフォーラムに集まってくる子どもたちと目一杯付き合ってみようと、今年は子ども活動に専念することに決めた。

知り合いの若い李鳳梅さんが一緒にやってくれることになり、梶原公子さんの学校の女子高校生四人が手伝ってくれることも決まり、河村ふみさんとごじらりよう



こちゃんらと相談会をもったのが六月の初め。そこで、参加する子どもたちにはがきアンケートを出すことや、我家の物置きに山と積まれた空牛乳パックを使ってあそぶことなど、いろいろなアイデアがだされた。子どもたちから帰ってきた返事には、「なわとびがしたい」「キャンプファイヤーがしたい」「虫とりがしたい」……と元気な声がいっぱい。名前を覚えながら、当日に備える。

## ●牛乳パックであそぼう その1

8/3夜 はがき作り

全工程を一応体験しようと、パックのビニールコーティングをはがすところからやってみる。紙をこまかくちぎったり、それをミキサーにかけて、木枠を使ってすいたり、アイロンをかけてかわかしたり。小さい子もお姉さんに手伝ってもらって一生けんめい。適当な厚さにすくことや、木枠から上手にはずす所が難しい。人数が多すぎて、やらなかった子もいたようだったが、模様を工夫したり何枚も挑戦していた子もいた。暑い中、アイロンかけの手伝いをずっとしてくれたり、ビチョビチョの床をかたづけしてくれたお姉さんたち、本当にご苦労さまでした。



## ● 8 / 4 昼 えんそく

ホテルの周辺は遊ぶ所がないので、三島の楽寿園に遠足に出かけた。小さい子はホテルのマイクروبスで送ってもらい、大きい子たちは電車で行く。乗り物に乗ったり、動物を

パンを切ったり、野菜をちぎったりしてみんなで準備をし、パンの入った牛乳パックを一つずつもって外に出る。花火であそんだ後、みんなで丸く輪になって牛乳パックに火をつけた。闇の中、チロチロと燃える火がきれいだった。

できたパンを皆ではおぼり、今回はそれで終わりではなく、「大人たちに売ろう！」と計画。自分の分も食べないで売らんだという子もいたり、子どもたちはハリキっていた。ところが映画会が時間通りに終わらず、9時の子ども活動終了前にパンを売りに行けないと言われてしまった。「そんなのないよ」と子どもたち。「子どもと映画とどっちが大事か言つてこよう」と、パンをもって会場に向う。兵庫の吉田清彦さんが交渉してくれて、映画を中断して売らせてもらえることになった。「売れた!」「売れた!」と皆満足そうだった。

つけるページ、それに「ホテルのかいだんは全部でなんだん?」とか、「ホテルのへやはぜんぶでいくつかな?」といった探検ページ、などなど。夜遅く、真剣になって階段を数えていた子もいたんだって。もう少し時間があつたら、これを使つてもっといろいろ遊びたかつたね。

## ● 牛乳パックであそぼう その2

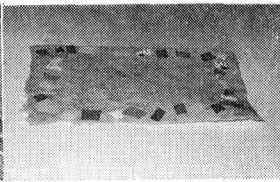
### 8 / 4 夜 カンガルーサンド作り

ドッグパンに(レタス・ベーコン・チーズ)(チョコレート・マッシュマロ)をはさんでアルミホイルでつつみ、牛乳パックに入れてパックを燃やすと、燃え尽きた頃に中のパンがほどんどよく焼けて、ホットサンドができて上がる。

## ★おとなにはあげないフォーラムノート

アイデアウーマンのりょうこちゃんが作ってくれたノートには、自分のことを書き込むページ、子ども係のお姉さんの紹介、はがき作りのやり方を書いたり、見つけたものを貼る

3日目、もうこれでお別れという朝、ノートや布に寄せ書きをしたり、お姉さんたちと別れを惜んでいる子どもたちの姿に、不安いっぱいで始まった子ども活動だったが、「おわたんだなあー。よかったなあー」と胸が熱くなった。みんな、



本当にありがとう。

### ★これからに向けて

毎年のことなのだが、参加人数がギリギリまで足りきらないことが一番大きな問題。定員を決めるのか、希望するだけ受け入れられる態勢を整えるのか。また、参加者全員が子どもと共に過ごすフォーラムということ、参加者・子ども係・子どもがどんな関係を持ち、どんな場を作っていくのかということについて、もっともっと論議を巻きおこし、考えてゆきたいと思う。

そして今年も果たせなかったのだが、大きい子どもたちの独自のプログラムが持てたら、もっといい。

家庭の中での男女の役割分担も問い直しつつ、生き方をさぐるというWeの姿勢から、女が子どもを連れて参加する（というケースが多い）ということについても、自分の生活と、Weでやろうとしていることをどう一致させていくのか、各自が問い直し、参加者に問いかけていかなくてはならないのではないかという意見が、反省会で出されていた。



藤沢 純子

◆梶原先生から、Weの夏季フォーラムのことを聞いて、「面白そうだな」。学生生活最後の夏休みだしやってみようという軽い気持ちで引き受けてしまいました。

3日は、みんなとあまり話せずに終わってしまいました。4日は、楽寿園に行き、ほとんどの子と話をし、仲良くなれてずっとずっとみんなで一緒にいました。5日には、もうお別れの時がきてしまいました。よせがきをしているときに「もうあと一時間もしないうちにもうバイバイかあ」と悲しくなっ

てしまいました。泣きそうになりました。でも、そんなことしたら、つらくなると思ってがまんしました。

今になって本当にとってもよい経験をしたと思います。みんな、たくさんさんの思い出がありがとう。元気で何ごとにも頑張ってください。

米山 正子

◆私はこの3日間、とても貴重な体験をしました。子どもの好きな私にとって、たくさん子どもたちとふれ合うことができるチャンスだったからです。

一番心に残っていることは、楽寿園に行ったことです。私は小さい子どもたちとバスに乗って行きましたが、みんなとてもしっかりしてびびくりしました。まだ小さいのに、自分の意見をしっかりと持っていて、それを私に話してくれた時はとてもうれしかったです。フォーラムに行く前は、みんなと仲良くできるか不安でしたがその不安もすぐになくなりました。

私は子どもたちに出会って、改めて優しくを教えられたような気がします。純粋な心を持つ子どもたちに優しい気持ちをももらったことが、このフォーラムで得たことです。



野田 桜

◆梶原先生から、この夏、少しベビィンッターをやってみないかという話があり、私たちは四人は参加することになりました。初めは喜んで引き受けたものの、後から話を聞いてみるととても大変そうで、なんとなく不安になりました。当日になって子どもたちと顔を合わせたら、たった三日で仲良くなれるか心配でした。しかし子どもたちは私たちが思っていたよりも早く慣れてくれて、みんな遊ぶことができました。楽しかったのは二日目の楽寿園でした。

乗り物に乗ったり、池に入ったり、動物を見たりとても楽しかったです。気がついてみると私たちが世話をするというよりも、いっしょになって遊んでいた。私はもう帰りに近くなったら疲れてしまっていました。子

どもたちは走り回っても走り回っても疲れが見られず不思議に思ったくらいでした。

あっという間に三日が過ぎ、せっかく仲良しになれた子どもたちもお別れです。子どもたちには自分の幼なかった頃のことを思い出させられ、とてもすばらしいひとときを過ごすことができました。私にとってのこの三日間は、とても有意義な三日間になったと思います。

伊藤知里

♥八月二日、——フォーラムの前の晩は子ども嫌いな私は不安でいっぱいでした。

八月三日——いよいよちびっ子たちと御対面となった。みんな本当に素直そうでワンバクそうなちびっ子ばかり。「これなら仲良くなれるかも……」と、ちょっぴり勇気が出てきて自分から子どもたちに話しかけて、ちょっぴずつ名前を覚えられた一日目でした。

そして二日目は楽寿園に遠足だ。たくさん子どもたちから目を離さぬようにしているだけでもうヘトヘトになった。でもちびっ子は相変わらず元気に遊びまわっているのを見て、自分の昔の姿を見ているようでした。

時が過ぎてゆくにつれ、どんどんみんな



の顔と名前が一致してきました。元気な兄弟の「コウちゃん」に、とってもカワイイ「愛ちゃん」、覚えていた子はまだまだいるけれど全員書くときききれないと思うので、これくらいにしておこう。

私もこのフォーラムで色々学ぶことができました。もし自分に子どもができればフォーラムで出会った子たちのような、明るくて元気で素直な子に育てたいです。……まだずっと先のことですが……。最後に皆さん本当にありがとうございました。

## ★スクランブル・トーク

### ラクに構えて輪になってみれば

#### 若竹 キミイ

「自己紹介だけで半分終わっちゃったみたいで……」という分科会報告を、過去何回か耳にしていた。「自己紹介が長いのか？ 人数が多いのか？」「どっちも自己周辺状況報告こまかくって」「あれがどうで、これがどうで、それでもって、悪戦苦闘のきょうこのごろって順々にやるのか？」「それって、いつのまにかグチャッポくなりませんか？」「もともと先生って、話しはじめると相手を支配しちゃうから……」。どうもマイナス・イメージ。ではあるけれど、この部分それなりに、とっくり聞いてみたい気はしていた。「かまわないから何でも言っちゃえ」る席もいいものだ。グチャッポいのか、グチャッて当然なのか、どっちで

も、本気で受けとめようっていう相手次第で、終わりはエラく前向きになってしまったら、それはどういふことか。逆からも考える。何であれ、一心に話す人を受けとめようとする時、それだけで受け手が育ってしまう体験がないか。

たとえば家庭科教師の日常を思いやる。職域で、幅のきく位置を占めているか。私生活で、「ぶっちゃけた話が……」的な仲間を得やすいか。だいたい、Yesではない。強い、正しく美しい生き方から、やがて「浮きあがり中老」に仕上がる危険がいっぱい、いやそんなことはない、！、？。

伸縮自在な場で良い。大いにグチャッ放そ

うと構えてみる。Wellnessへの突破口かもしれない。大マジなかくし味の、スクランブル・トーク・タイムが初日の夜にとられた次第です。

共修共学の新しい家庭科完全実施へ、移行措置期間が残すところ二年くらいですか。新指導要領とか、各地の基盤整備とか、どうなんでしょうか。

椅子もテーブルも片付けてしまった大ホールの舞台寄りに座り込んで、十五―十六人からはじまりは、カラリと明かるい。割と新しい目の顔からボチボチまわるマイク。先生以外の顔は少なそう。

ほとんど解っていない者がマイクのまわし手だから、話が狭く深まることはおこらない。でも、どう見ても、目のさめるような「新しい家庭科の境地」が見出せる条件整備には未だし、といって「その裏読みも技のうち」であるならば、「アレンジの可能性がいっぱい」なのだという意見。

『アレンジのオニになろうー』。といっても生活の変化に追いつかないようなところ、たとえば衣生活の中の制作といえは縫製の基礎技術など、どうなるのか。男の子の衣生活は

家庭洋裁の中にどれほどあったか。近ごろは女の子だって既製服オンリーと言いつける。

そろそろ「親」の意見、感想がきける雰囲気と人数になって「中学で作ったスモック、アレ捨てた」「勿体ないから、誰も見てない時に親が使った」「ゴミを作らせるのに神経すり減らして授業やってたの?」ミもフタもない。

アレンジのオニなら、どうするか。より基本に戻しての再構想、と意味づける力次第で、これを逃げとも妥協とも言わせない「インテリア」の方向、「カバン等、アクセサリー」の方向「歴史、伝統への理解も含める甚兵衛」、「構造の基本まで納得できる立体成型パンツ」等々。

そういえば、と思ひ出される制作例のさまざまから、オニが待つべきは、金棒でもカネボウでもなく、新しい家庭科の根ざす子育て観、人間観を共有する親仲間ではないか、そればかり思われた。

いま、過渡期に見えているヘンなことさまざま。絶対としか言いようがないのは、たとえば京都の「男子だけ家庭科」、これがふえているという。先生やその世界からの説明だ

け聞いてみると、理屈は全部そろっている。

こうだ。中学校でどこまで学んできたか等、基礎に男女差がありすぎるので、大学受験との関係で、ここを本気で考えようとする人がいないので、体育や技術の教員数調整にもひびくので、とりあえず「男子だけ家庭科」と「女子だけ家庭科」の授業編成が組みやすく教えやすく、秘かに支持的な流れという。共学高校で、他の教科は従来通りの必修、家庭科だけ別れて学んでいるのは、そういうわけだ。

これまでの、先導的実践の地が、どうしてもそんなことになってしまふのか。その場は一同大笑いしてのけぞってしまった。けれども親としての私は「ウチの子に何するダ!」と学校に迫りたい。先生だって親を兼ねているだろう。子どもの側からは、親が先生を兼ねているにすぎない。たまたま、そうであるにすぎない。

この話題で考えれば、同じ高校に高一の子と家庭科教師である親がいたとして、英、数、国等必修で家庭科だけ別というかたちの共学をどう打開できるか、するか、という仮定の話になる。そこは「……のような」含みとし





て、一般的な市民活動、職域以外の社会活動、住民運動、友人や知人とのつきあい、市民的役割の前後左右で投げかけ、やりとりを誘ってみる。

人数は三〇人位にふえてきたが、後から来た人は傍聴的な位置のまき、というなりゆきの中で、座の勢いは中ブラリン。天井が高く見える。話が滞っても、この天井の高さは座の者を息苦しくはさせないのはいけけれど、スクランブル・トークは看板ごと眠くもなってきた。

ひとりの市民として、この時代が必要としている新しい家庭科を、社会的にどう実現させたいのか、という問いにつづめればやはり、心ある人の先導的実践を万人に分ちあう時を迎えてやはり、頂点の方向へと用いてきたエネルギーをやはり、ただの親、ただの市民というならびに位置を変えて行動するのが有効で必要で正解ではないかと持ちかけてお開きとなった。アレンジの技研ぎ、下地にも。

## 家庭科ネットワークへのお誘い

山本 美香

新学習指導要領が告示され、一九九三年度から全面实施されようとしている。今年度は移行期として、各学校現場において様々な実践がなされている。

中学校教師である私が抱えている新学習指導要領での問題は二つ、課題は一つあった。

一つは、「家庭生活」である。

新学習指導要領には、「家庭生活に関する実践的・体験的な学習を通して、自己の生活と家族との関係について理解させ、家庭生活をよりよくしようとする実践的な態度を育てる」とあり、小学校・高校との関連として、扱っていかねばならない。男子も女子も必修の領域として共修でき、興味深い領域で

ある。しかし、一方、家庭教育力の低下に供い、単なる「しつけ」のうけおいでしかない領域になる危険性も大である。

従来通りの教科書の「住居」をそのままではめて授業を行うと、全然深まりのないものとなる（私自身かつて住居領域を扱った時、授業にならない授業をしたいやな思い出がある）。さらにもっとひどいことになる、ぞうきんを縫わせたり、ほうきやちりとりを使い方などのそうじの仕方を教え、室内美化のための小物製作でおわる。

家庭科の授業が、学問的裏づけのない薄っぺらなものとなり、魅力のない教科になってしまう。本当に賢い人間となり、社会の矛盾



を見抜く力を、授業で育てたいと願い、すばらしい実践はできなくても、この方向だけは見失いたくないと思う。いくら思いは強くて、「家庭生活」をどう扱うか、全然見えてないのである。

二つめは、「被服」領域である。

新学習指導要領では、三年間の積み上げはできず、一回の扱いで、何を題材として取り上げればいいのか。男子にもさせるには、どうすればいいのか。

年々不器用さを増す生徒たちの現状、製作中心となり、実習では教師がバニックになる疲れる授業。このようなことを考えると、選択領域であり、20〜30単位時間を標準とする「被服」領域は、忘れ去られそうな領域である。人間が営んできた歴史の集積として、伝統的なものとして、被服領域を扱いたいという願いはあるが、現実には大変厳しい。

三つめは、本音を出して語り合える人間関係がないことである。

他校の先生方と交流をもたなければ、家庭科教師は孤立してしまい、一人よがりの実践となる。学び合える仲間づくりは難しいが、それができれば、ものすごい力になる。しかし、一歩踏みだせず悶々としている。私自身

がそうである。

こんな問題や課題を抱えながら、少しでもいいから糸口をつかもうと、Weの夏季フォーラムに参加した。

Weのフォーラムの参加は、私の人生にとってもすばらしい収穫であった。様々の人々と出会うことによって、自分の視野が広がった。新鮮で、強烈で、それでいて楽しかった三日間。

本や雑誌でお目にかかる人たちを、身近に感じることができ、とてもうれしかった。どこにあんな闘志があるのだろう（実際の活動を聞くと思ってしまう）と思うぐらい謙虚な方々ばかり。きっと出会いを大切にされているんだと思う。

私はあまりリラックスしてしまい（フォーラム参加はじめてなのに）、親しくいろいろな方々と話しができ、はしゃぎすぎてしまった。しかし、そんな私が、大きな失敗をしていたことに、フォーラムがおわたったあと気づいた。原稿などというものを引き受けていたことだ。

子どもの頃から、作文や感想文など「文」のつくものは大の苦手で、下手くそ。よく引

き受けたと、自分ながら思う。でも、自分の文章が活字になり、本になるのは、一生のうちでこれが最初で最後かもしれないと思い直し、チャンスと考え直した。

「家庭科ネットワークへのお誘い」は、二日めの一番最後にもたれた。「ネットワーク」という言葉にひかれたのか、ハードな日程にもかかわらず、四十名ぐらいの人が集まった。司会者から、「今、家庭科が大きく変わろうとしている時、どう変わればいいのかその方向を見い出そう。そのための共有の場に、明日の分散会の「ネットワーク」につなげよう」との趣旨が話された。

フォーラム二日めおわりということもあり、なごやかな雰囲気の中、交流会が進められていった。時間の関係で自己紹介は割愛されたが、午前中の分科会で、心に残ったこと感想などが、順番に報告された。

a 中学の家庭生活をどう扱うか  
「根本的にどう扱うかが問題だと思う。何が一番大事かしっくりおさえていかないと、広くなるので何をやっているのかわからなくなってしまう」

b 高齢化社会―「北欧の社会福祉に何を学ぶか」

福祉天国といわれている裏側をみてきて欲しい。例えば、スウェーデンは老人を寝たきりにさせないために、自宅のケアがきちんとなされている。うしろ盾になっているヘルパ―さんがいる。

税金が高いというけれど、それは政府への信頼感が違うから払える。人間への哲学が日本と違う、キリスト教や他の宗教が浸透している。介護者に対する福祉も福祉である。日本だと介護者は重労働で、研修なんかもいけないし、休みも取れない。こんなことでは、ちゃんとしたケアもできない。働く人達は身心ともに悪くなり、もちろん顔つきも、老人に対する接し方も悪くなる。

そして、教育の中で福祉の問題がきちんと扱われている。それは施設のつくり方一つでもよくわかる。青年と老人が必然的に自然に顔を合わせあうように、一緒に生活するように、施設がつくってある」

「人をどうするか、どうみるかの哲学が北欧にはある。日本では、福祉教育学科やハウツーだとかシステム、そういう話はできて、人が老いるとか、老いをどうみるか、もっと

もっときつちりと話しができてなかったらだめだ」

c 家庭科におけるコンピュータの位置

「現状では、職業科の家庭科の選択に家庭情報処理がある。教員はどう対応していったらいいか。学校は何億円という市場となる。しかし、適したソフトができてない。また、教育ソフトは、指導要領よりも、もっと管理統制される危険性がある」

「自分がどう利用したらいいのか、我々は情報処理について、考えなければならぬ。生徒は21世紀に生きるのだから、それを確立する必要がある。安全性の問題も考えていかなければならない。妊娠中の教師が死んだ事件があった。労働条件も考えなければならぬ」

f 職場・父母・地域の人々に理解と協力を求めるには

「高校で、職場で少しずつカリキュラムを変えていきたい。2単位一クラスでいいから、名前は何でもいから、男女共修でいい。職場の理解を得たいが得にくい状況である。旧態依然であり、小学校で家庭科を営んで以来、学んだことがない男の先生に、「食うことと、縫うこと以外何をやっているのか」と質問される。それを聞くのはまだ関心があ



るからいい方で、関心を示さない先生方や、女の先生は「やらなくていい。困るわよ」といわれる。そんな悩みに対し、話が聞けた。職場のただでなく父母の中から声を出してもらったら大きな力になる。授業を通して働きかけていく。話を聞きたいからとか、生協の話し合い、手づくり食品など、新しい力になると思い、参加していく。「やるしかない。ホームルームを手がかりにして、共修に



していく。男子も興味をもたせる」まだまだたくさんのが出て、話はつきることがなかった。時間がきて、会議室は使えなくなっても、場所を変えて、話し合いは深夜まで続いた。家庭科の先生方が連帯し、Weのテーマの「自立した女と男を、人間らしい生活を、差別のない社会を、育み、創り出す」をめざす



夕食後の交流会で

ため、できることをやっていかなければならない。自分の殻を破り、一歩踏みだそう。地域に帰り、仲間づくりをはじめよう、失敗を恐れず。「家庭生活」「被服領域」「仲間づくり」すべての悩みがいつのまにか解決し、元気になり、来年もWeに来ようと決心していた。

## ★映画

# 「ベンポスタ子ども共和国」を見て

星 名 綾

「ベンポスタ・子ども共和国」は、スペインの北西部、オレンセ郊外にある、子ども中心の共同体。住人は子どもだけでなく、二十代の青年や大人も一緒だ。自由・自治・自立を基調に共同生活をしている。ベンポスタの生活は、子どもたちの学校・労働・サーカスの練習を柱に、その他様々な社会的・政治的な活動がなされている。

ベンポスタでは、大人と子どもが対等な関係にある。大人あるいは子どもだから、という枠がなく、いろいろな権利をもつひとりの人間として、大人も子どもも、それぞれの持ち味を出しながら共存している。ベンポスタの子どもたちの様子を見ながら、何だか別の世界を見ているような気がした。それだけ、

今私が生きている社会は大人中心なのではないか……そんなことも感じた。

でも、確かに今の社会は、大人が子どもの上に、もっとというなら、強い者が弱い者の上に立っている。子どもの声を反映できる場が少ないと思う。

子どもの人権が認められ、子どもが大切にされるベンポスタ——とても理想的な世界だが、同時にこれは、子ども自身にとって、また大人にとっても、厳しいものだとも思う。まったくちがう個人が集まって共に生活をするのだから、衝突もある。それを乗り越え、お互いにとって最も良い方針を見出すことは決して容易なことではない。

また、大人にしても、子どもの意見に対して真向から取り組む。ごまかしはきかない。子どもにとっても、大人にとっても、ひとりの人のもつ責任はとても大きいのではないかなと思う。

ベンポスタには、「生きる喜びと博愛」という理念がある。強い者が上、弱い者が下になっっている今の世の中を改革し、そのために新しいものを生み出す新しい人間をつくる、ベンポスタはそのためにある、という理念がある。

学校で勉強したり、労働したりすることは、これらの理念の実現へとつながっている。でも、それ以前に、日々の生活の中で、どのように人と関わるか、どんな生き方をするのか、というようなことも深く関係していると思う。

印象的な場面に住民総会のひとこまがある。ベンポスタにいたくさんの犬の世話をめぐって意見が交わされる。世話をしていない人がいる、という問題提起に、それぞれの立場でやっている、という反論。やりとりに対して、ベンポスタの中心人物シルバ神父は次のようなことを言う。

物的な面で改善した方が良いことはするべ

きだろう。先の問題提起をした子どもに對して、君が大に向けた愛情を他の人にも向けてほしい。」と。

問題そのものは小さなことかもしれない。

でも、日常の、何気ない人との関わり合いの難しさを感じた。きっと、このような難しさ、あるいは厳しさを乗り越えて、ペンボスタの理念の実現へと、自分を育てて行くのであらう。自由や博愛、生きる喜び——美しく、柔らかな印象をうける言葉だけれど、全て、厳しさを、その内に抱えている。

あとから知ったのだが、この映画は多勢の人々の心を捕えていた。それは、今の日本の社会が失ってしまったもの、大人たちが忘れてしまったものをペンボスタに見たからではないだらうか。

ペンボスタが「完璧」な世界と言いつけることはできないと思う。トラブルもある。でも、それを全員で解決し、変えて行こうとする。シルバ神父が三十四年前、「少年の町」を作ってから今日に至るまで、そうやってきたのだと思う。これからも、また変わっていくのかも知れない。私は、そこに、何かすごいエネルギーのようなものを感じる。

このエネルギーは、今の日本の社会では残

念ながら感じられない。子どもたちには、社会や世界のあり方を変えることよりも、今の社会にいかにかうまく適応できるかどうか、ということを望んでいるようにみえる。

ペンボスタの理念は、サーカスの公演を通して世界の人々に伝えられる。「強い者が下に、弱い者が上に、そして子どもはてっぺんに——」。この理念を演技を通して伝える。

ペンボスタでは、ひとりの人の幸せやひとつの国の豊かさの裏にある犠牲を、子どもたちにしつかり伝えていく。事実を知り、自分たちがどんな社会に生きているか、をふまえている。大人や青年たちの支えのてっぺんに子どもが立つその姿は、とてもまぶしかった。演技や技の素晴らしき以上に、未来への希望のような、何か大きな力を与えられた、そんな気分だった。

大人（今二十三歳である私も含めて）から見た子ども、というのは未知の部分が多い。それは、子どもの可能性というもののかもしれない。小さい時から上から用意した道順を進ませ、その通りに進めば、とりあえず大人は安心なのだらう。でも、そこからは何も新しいものは生まれない。未知の部分が出

したとき、誰もが驚くと思う。でも、そこで、噴出したものを受けとめるだけの器は持ちたいと思う。

昨年十一月、「子どもの権利条約」が国連で採択された。子どもをめぐる状況に変化が現れたといえよう。しかし、日本では、批准・署名もまだだという。子どもの権利を認めたら、大人の立場はきつくなるだらう。

最近、校則のことがよく話題になるが、このように生徒を抑えつけるのではなく、生徒から投げかけられたものを受けとめなくてはならない。子どもと大人は年齢だけでなく、互いにいろいろな異なるものをもつ。異質どうしの共存成立には、様々なカベがあらうが、それらを乗り越え、初めて何かが変わるのだと思う。

映画の上映中、フォーラムでは子ども活動で作ったホットドッグを子どもが上映中に販売することの是非をめぐって、トラブルがあった。子どもを大切にすることは、日常の、ごく身近な所でも求められる。学校だけではなく、でも、そんな小さな積み重ねでも、私は尊いと思う。必ず実を結ぶと信じた。

## ★分散会 踊り子コース

### トンネルをめけると

風国だった……

#### 川名はつ子

せっかくだから伊豆半島の自然を味わってから帰りたいという要望に応え、埼玉の川崎絢子さんと大阪の岩瀬志津子さんが事前の下見もして企画してくれた天城峠のハイキング、名付けて「踊り子コース」です。

青春の日々を呼びもどしたい(？)中高年の人々の参加が多いと予想していたのに、親子連れの多かったのは意外、と企画者の弁。別々のスケジュールで過ごした三日間の最後に、親子で一緒に思い出をつくって帰りたいのでしょいか。

乗物の時間の都合で、ゆっくり別れを惜しむ間もなく、全体会さよならタイムの会場を抜け出し、朝からジリジリと照りつける道を伊豆長岡駅へと歩き出しました。石けんコン

サートのヤマケンとチャリー吉田の若者コンビが加わったので、子どもたちもはしゃいでいます。

「一緒に行こうね」と前夜ユビキリゲンマンしたアコちゃん姿が見えない！と、途中で気づき、炎天下をひた走って迎えに引き返したチャリー。彼ら若者が間に合わなければ、私もつまらないから行かない！と逆方向行きの電車に乗りかけた女子大生のお嬢さんを、「チャリーたちが来たよ！」とあわてて引きもどすシーンもあって、総勢二十九人、浮き浮きと、修善寺行きの電車に乗り込みました。

夕方早目に、東へ西へとそれぞれの家路につくためには、天城峠を越えるまでの時間は

なく、修善寺駅から大川端キャンプ場までバスに登り、そこから自然遊歩道を三キロほど旧天城トンネルまで散策するプランです。バスを降りて歩き始めた遊歩道は、自然保護監察官の人々の努力で、荒らされることなく守られてきたとのことで、清流に沿ってわさび田も見え隠れする静かな道でした。

私たちを導くように先を行く蝶は、大きなカラスアゲハ。溪流から吹き上げてくる涼風につけてヒラリヒラリと優雅に、舞を舞うようです。ガクアジサイに似た花は、ボタンのように丸く縮ったつぼみをつけ、ヤマボタンと呼ばれているそうです。

子どもたちはくさむらにのぞく虫を追いかけ、トンボの目を回らせて捕まえようと夢中になり、小学生のルミちゃんは笹の葉で笹舟をつくってくれました。

やがてたどりついた終点の旧天城トンネル。長いトンネル内はひんやりとして古風なランプが点々ともっていました。車はめったに通らないので、三々五々、歩み入ると、途中で突然灯りが消えて真っ暗闇。行く手に小さく、そして振り返っても遥かに小さく、青白い半月型に外界が見えるだけ。

湿った冷たい風に頬をなでられながら、暗



闇をヒタヒタ歩き、光まぶしい外界へ。トンネルの出口は風がそよぎ、いっそう涼しく、いい気持ち。遙か遠くの入口で「早くもどつておいでー」と呼ぶ声がしているけれど、このまましばらく、この風に身をさらしていた

い……。

大人たちはトンネルの上部の苦むした文字板を「やっぱり天城隧道と書いてあるんでしようねえ」などといいながら見上げ、子どもたちは道路脇の急な斜面を駆け登ったりしてハラハラさせながらのひととき。ようやく引き返すと「バスの時間が迫っているから大急ぎでお弁当食べて！」

そそくさと食べて、ツクツクハウシが鳴いている道を引き返したのですが、のろのろ組はアウト！ 親子揃って間に合った人たちだけが先に帰り、乗り遅れた人たちは次のバスが来るまで一時間ほど待つ羽目に。

手持ち無沙汰のまま溪流のほとりに降りてみると、冷たい水が勢よくたつぷり、淵をなし、瀬をなしていました。「うわあ」、大人も子どもも歓声あげて靴をぬぎ、カミヤマくんは「これも脱いでいいかな」とパンツまで下ろしかけて、お母さんにたしなめられる一幕もありました。

足が冷たい、冷たくて痛い！ 笹舟を浮かべても、速い流れにもまれてあつという間にひっくりかえり、淵に吸い込まれてしまします。そのうち、「やあ、大きなカエルだ！」置物のようにじっとしていたガマガエルを生

け捕りました。記念写真を撮ったあと放してやると、あつという間に流されていきました。が、やがてもどつてきてじつと岸にしがみついています。カミヤマくんがそれを再び捕まえようとして、足を滑らせ、深い淵にあおむけざまにドボン！

さらに脇の道へ一步踏み込んでへビに出会い、青ざめてもどつてきた人もいました。

やがてやってきたオレンジ色のバスに今度は全員無事乗り込んで、修善寺駅四時過ぎ解散。

「子どもは草や虫にいちいちひっかかるから、歩く時間は倍とっておくべきだったわね」と企画者は反省していましたが、「遅れてよし、こけて（転んで）よし」が、のろのろ組参加者一同の深い満足の声でした。

自然と触れ合う分散会は、もうWeフォーラムの定番プログラムではないでしょうか。

ついでに帰りに寄り道して温泉に一泊、翌日登山（昨年は九住山、今年は思親山）を実行している自称Weの会山岳部では、この楽しさをもっと多くの人たちと分かち合いたいと、来年からは広く参加者全員にお知らせして同行希望者を募る予定です。乞う御期待！



## ★分散会 柿田川コース

### 「水がわき出る柿田川」

緒方由紀子

三島駅からタクシーで10分。タクシーが止まったところは、車がビュンビュン通る国道1号線の脇。降りてみると、まわりにはスパーやファミリーレストラン、そして新しい公園。

「水がわき出る柿田川」という言葉から想像していたのは、人もあまり訪れない神社の森の中のようなところだったから、ここが柿田川？ どこに水があるの？ そんなこと思いながら公園の林の中の階段を降りていった。そこにはレンガでつくった踊り場のようなところがあり、人々が手すりから身を乗り出し、わあ、きれいとか言いながら下をのぞいている。私も身をのり出して見てみた。まあ、大きい大きな桶の底のようなところから水が砂

をもこもこと巻き上げ、わき出している。水が青く透き通っている。まさに水が生まれ出てくるところという感じ。桶から水があふれ出て、桶は水につかっている。木漏れ日が反射して、木々の姿が水にうつっている。こんなきれいな水、見たことないと思いながら、写真を撮す。絶対見たままには写らないだろうな。

今度は公園の奥のほうへ行ってみる。小道を通り抜けると子どもたちが水遊びをしている。大人も足を水につけたり、水を手でさわったりしている。そこは石を積み重ねた人工の小川のようなところ。水に触れてみると冷たい。その小川にかかる橋を渡り、土の小道をどんどん行くと、木と草に囲まれた浅い池

のようなところがある。木で作られた遊歩道があり、下を水が流れている。池の中にまた、まあある桶があり、水がわきだしている。桶の縁にひしゃくが置いてある。飲めるのかしら。桶のところまで降りていって、水をすくって飲んでいる人もいる。欲しい人にも水をすくってあげている。「水が甘い」と、一口飲んだ人の声。でも、私はこんな水飲んでも大丈夫かなと思ってしまふ。飲まずに通り過ぎる。

岸辺の道をとおって、公園のもう少し奥まで行く。歩きながら、わきだした水より水道の水の方になんとなく安心してしまふ都会人間の私っておかしい、と思う。やっぱり、さっきの水が気になる。引き返した時、さっきのところでわきだしている水を手ですくって飲んでみた。甘いというよりなんか最初に金属的な味を感じる。おいしいかどうかよくわからない。

お昼ごはんを食べようということになり、公園のとなりにある「泉の館」というレストハウスに入る。そこで食べたそうめんとお茶は水が良いせいかおいしかった。柿田川のトラスト運動の絵葉書とN.T.T.の柿田川のテレホンカードを買う。後から読んだ絵葉書の解

説には、柿田川の湧水量は一日百万トン以上、東洋一で静岡県東部約35万人の飲料水となっていると書かれており、柿田川のすばらしさに驚いた。

フォーラムの最後に柿田川を見学した後、私と友人は富士山の山中湖に近い忍野へ向かった。途中、バスの中から幾つもゴルフ場の案内板が見える。山中湖のあたりは、レストラン、ホテルなどが立ち並び湖上にもボートやスワンなどがいっぱい。富士の麓をとおり道路にも車がバンバン走る。富士山にも開発はどんどんすすんでいる。

忍野の民宿から忍野八海へ散歩がてら行ってみた。富士山の伏流水が湧出する池が八つあるので八海と呼ぶ。小さな池をのぞいてみた。ほんとに水が透きとおっている。ニジマスがいっぱい泳いでいる。水を飲んでみるとほんとにおいしい。いやな味がまったくせず、すつと飲めてしまう。民宿で飲んだお茶もプラスチックのきゆうすで入れたものにもかかわらず、とてもおいしかった。

偉大な富士山。山々の木々が天から降ってきた水を受け止めて、地下に溜め込んでくれる。その水が、忍野でわきだし、はるか離れた静岡の清水町にも忽然とわきだし柿田川を

つくる。しかし、資本はそんなことおかないしに木を切り、道路をとおし、ゴルフ場をつくり、ホテルをたてる。富士山の水を利用してハイテク工場もつくられている。そこで使われる有機溶剤は柿田川からも検出されたという。

山に木がなくなれば、誰が水を生んでくれるのだろう。人間の力では大量に水をためることはできない。大量に浄化することもできない。水が汚染されたら、浄水器を使えばいいとか、ミネラルウォーターを買えばいいじゃないかと思っている人が多いような気がする。その水はどこからくるのか？

富士山に大量に降った雨や雪が伏流水となり、やがて麓の溶岩の裂け目からわきだす。その最大のものが柿田川。しかし、柿田川の

湧水量も年々減り、冬には最大の湧水口でも水が時々出なくなることがあるという。富士山麓の開発や周辺の工場による地下水の大量くみ上げなどが原因だといわれる。

柿田川公園からタクシーで駅にもどる途中清水町という標識を見た。ああ、これがほんとの清水町なんだ。清水がわきだす町。全国に清水という地名は数あるだろう。昔は、どこにも柿田川のような清水があったんだ。

でも、柿田川のすぐそばの薬屋さんの店先にはさまざまな合成洗剤が積みあげられ、売られていた。悲しくなる。日本の名水百選に選ばれてしまった柿田川には観光客がくる。清水町役場は自然保護派の人たちの反対にもかかわらず、人工の滝・噴水などを含む公園をつくってしまった。本当に、ばかっている。



## \*アンケート

1 参加なさって、いかがでしたか？

(会場・内容など)

◆会場は広々としていて、日本列島煮えたぎっている中で、涼しく快適でした。温泉も十分満喫できました。全体会・分科会とも会場は十分整っていて、申し分なしでした。ただアジアを論ずるには少しゼイタクな気もしました。それに会費が高くて参加できない人があったとも聞きます。むづかしい所ですが、来年は一考したいですね。

(兵庫・入江一恵)

◆初参加でとても不安でした。はじめは…会場の雰囲気がなごやかで、すぐに慣れてしまいました。木島さんの人形劇は子どもをどうとらえる、という面からも勉強になったし、おもしろかったです。分科会もシンポジウムも、かなりショックでした(自分がいかに無知であったか、よくわかりま

した)。でも「やるしかない」という気持ちでエネルギーがあふれ出てきました。おもしろかった。よかった。(東京・山本美香)

◆昨年より更に満足。あり余るごちそうを食べながら第三世界のことを語るなんて、という意見もあったようですが、やはりおいしいものは食べたい。輸入食料や原地人労働者のことを考えながら、自己処理してありがたくいただく、出されたごちそうは絶対に残さない。(福井・上山悦子)

◆実行委員をやりましたので、二倍も三倍も楽しめました。「一言プロフィールがよかったね」と言ってもらったのがうれしい。

(埼玉・磯部幸江)

◆広くて快適、胡瓜に野菜がたっぷりなのとお風呂場が広く、湯がたっぷりあって、うれしかった。施設設備面はとてもよかった。内容的にも、家庭科の分科会を細分化し、多方面からアプローチできて、やっとなWらしいフォーラムになったと思います。

(熊本・桑畑美沙子)

◆すばらしい方が世の中にこんなに大勢いらっしゃるということ、改めて感じています。身体はきつかったけど、とても楽しかった。シンポジウムがとにかくうまくいっ

たのは、一に参加者のレベルの高さです。

(神奈川・関 千恵子)

◆会場がゆったりしていて、眺めもよく、皆さんのムードも子どもを含めてとてもあたたかく、娘ともども満足でした。世の中には、すごい方がたくさんいらっしゃる。世界にはすごいことをしている、実行している人々がいる、ということがよくわかりました。

(東京・蔵本佳子)

◆富沢さん、中嶋さんが政治の場へ出られることを知り、内から外から女性解放が進み力強く感じたし、自分もやれることをやらないで、と考えました。

(熊本・片山富美子)

◆色々な意味で刺激的でした。Weは一部の人にお聞きしていたより、ずっと豊かなつながりでした。女性の感じ方について(毒のある言葉も改めて反芻しながら)、少し理解が深まったように思います(自分のあり方の侵害性についても)。

(神奈川・津田正夫)

◆会場も時間もゆったりしていてよかった。同部屋になった方とも、いろいろお話しする時間があって、とてもよかった。

(大阪・宮西和子)

◆とっても盛り沢山だったにもかかわらず、ゆったりとしていたのは、自由な雰囲気だったからでしょう。二百名を超える集団としては珍しいこと、すばらしかったと思います。

(東京・石川由紀)

◆大変充実した内容でよかったが、出たい分科会が沢山あって選択に困った。分科会を二回に分けてもらうとよかった。欲ばかりかもしれないが残念！ (宮城・三村敦子)

◆仕事や普段つき合っている人以外の人との出会いは新鮮だった。いくつもの発見の喜びと、重い宿題をもって帰るはめに。

(東京・林 健彦)

## 2 特に印象に残ったのは？

◆木島知草さんによる人形劇と語り、その人格に感動。

分科会、高齢化社会―北欧の社会福祉に何を学ぶか、立山・入江さんの報告が楽しみ。シンポ、最首悟さんの人間味ある話、松井やよりさんのアジアの子どもの不幸の実態と、その原因が日本の資本の進出にあること。

(兵庫・橋本幸子)

◆人形劇：木島さんと子どもたちとの受け答えをハラハラしながら見ていました。でも

木島さんの話を聞いて、今の学校教育で欠けていることを考えさせられました。

シンポジウム：松井さんの話を聞いて、アジアとのかかわりを考えさせられました。

(東京・浦野政子)

◆全体会で、松井さんと最首さんの微妙なアプローチの違いにより、かえって深まったと思いました。これはこれで一つのあり方ですが、関さんも含めて、お一人ずつにもっと存分に話し合ってもらいたいようにも思いました。これをきっかけに、本を通してもお会いしたい。

(奈良・重富素子)

◆最首氏の「今の日本が第三世界の人々を踏みつけた上にあることが、人の心に入りにくい」という発言。まさに現実だと思い、ウンウンと納得し、氏の優しさが伝わってきました。そして今回の大きなテーマはこれから出発しなくてはならないのだという勇氣も湧いてきました。(東京・本田和代)

◆テーマは難しかったかもしれませんが、最首さん、松井さんが最後まで自分の意見を主張し続けられたところで、私たちは「日本人の特殊な精神構造」とアジア・世界の現実をふまえて、今民衆ががんばらねば、そこから始めなければ、ということがよく

わかった。本音で語って下さったので、本当に満足しました。(鹿児島・特手ナツ)

◆シンポジウムのパネラーの組み合わせよかった。女性はサーッと前向きだけを考えるが、社会は男性の保守的根がしっかり張っているの、日常からの取り組みで何ができるかを考えさせる展開となった。

(熊本・立山ちづ子)

◆石けんコンサート！ チャーリー氏の「難しいことを難しく言うのは簡単、易しく言うことが難しい」に考えさせられました。来年も北海道から友達連れて来ます。いつかは北海道へも！ (熊本・江口凡太郎)

◆木島千草さんの子どものかわりの視点とはとてもよいのに、女性解放には関心ないと言われたのが残念。若い男性二人の石けんコンサート。歌詞の中に彼らのやわらかな感性が満ちていて、とてもいいなあ、彼らのように歌で表現できたらいいですね。チャーリーが「生に迫る家庭科をしたい」と言われましたが、私もそう思っています。ガンバレ、チャーリー！

中年の男性の女性解放に対する感性に触れられなかったのは残念です。私は育時連に係わっている男性の話をよく聞くのです

が、そのような男性に出会えなかったです。

(大阪・山崎叔子)

◆自分もアジアの一人であること。アジアというところ、どこか低く見るところが自分にもあることに気づいた。『サンダカン八番娼館』のあのからゆきさんを、またじゃばゆきさんとしてつくり出していること、今まであまり深く考えていなかったなあ。勉強しているだけでは何も変わらない。実践するか、お金を出すか、二つの方法があること、印象に残りました。(長野・宮崎春美)

◆「ペンポスタ子ども共和国」見たい見たいの念願成就です。子ども活動のお手伝いにも行きたいと引き裂かれるような悩みがありました。福島では当分見られないと思っていたのでうれしかったです。内容もすごく良かった。(福島・西内みなみ)

◆普段の生活の中で「生きる」という言葉を使って真顔で真剣に話すことの少なさを痛感しました。一番大切なことなのに、まともな受けとめることがなくて、情けないと改めて思いました。この思いを大切に持って帰ってエネルギーにつなげたい。

(大阪・佐藤友紀)

◆二日目夜の話し合い「女の解放・男の解放」

男性の発言に、これはまだまだほんとの男女平等は先のことだなという思いでした。

(神奈川・金田富佐江)

◆ウルマンの詩のように「18であろうと70であろうとその胸中に抱くものは何か」。前向きに生きている女性たちの何と若々しいこと。一生が青春ですね。それに比べて男性たちの何と色あせた姿、白黒の映画を見る思いでした。(福岡・下田妙子)

3 フォーラムの運営で、よかったこと、改善すべきことは？

◆①初日晚の「交流会」、楽しい試みでした。「他己紹介」は、グループワークなどなかなか有効な方法ですが、ちょっと人数が多すぎて残念でした。来年は別の方法が考えられるかもしれません。

②子どもプログラムも充実していた由。ナゼかうれしくなりました。しかし、最後に吉田清彦さんも言われたように、子どもを隔離し、専門家にあずけて「大人たちの世界」だけで成功、成功というわけにはゆきません。今回のテーマが「子ども・人権」とあればなおさら。(東京・諸橋泰樹)

◆磯部さん、平井さんが作って下さった参加

者のプロフィール集、あとで読んでみたいそう充実していて、何で会期中に読まなかったのかと後悔しています。これを手引きに、あの人の人となりを、もっとと語り合いたかった……。来年もぜひ、作りましょう。(東京・川名はつ子)

◆メリハリのきいた企画でした。形式よりも自主性・感性を大切にしようとするWeのよさが、見える形で現れているのが、さすが首都圏です。元氣さ・まじめさを十分發揮する場をつくりながら、それを全員に強制しないところが好きです。(兵庫・F・F)

◆よかったことは一貫して明るい雰囲気だったこと。改善すべきことはテーマがわかりにくかったこと。(東京・竹めぐみ)

◆全てよかったです。大満足。子どもたち大変お世話になりました。チビギャングたちのお世話本当に大変だったと思います。感謝しております。(東京・佐藤美佐子)

◆分科会が盛りだくさんでもったいない感じでした。家庭科の分科会とその他の両方を聞けるようにならないかなあと思いました。Weに来るのは実家に来たような安らぎがあって、一人暮らしの私には、うれしい大切な時です。来年どんな雑用でもいい、

何か手伝わせて下さい。(山形・大場広子)

◆子どもたちがいたのが、とてもよかった。

男性が予想以上に多かったのも、とても心強く(いづれ男女同数になることを期待)うれしかったです。(東京・土田尚美)

◆初日の他已紹介、壁新聞、自己アピールのリストなど、よく知り合えるよう工夫してください、とてもよかったと思います。

子ども活動についても、盛りだくさんに用意して下さり、安心して会議に臨めました。スケジュール表が少し簡単なような気がしました。(大阪・南野容子)

◆学校にフォーラムの案内をいただいたことが初参加につながったのです。真剣に家庭科のことを考えている若い教師は多いと思うのですが、よい仲間に恵まれなかったためにその個性を花開かせることができない人も多いと思います。そういう方たちに仲間作りの手助けというようなことを考える必要があったと思います。(愛知・池田美保)

◆とても盛りだくさんで充実した内容だったと思います。シンポジウムはテーマが広いなあと感じました。どれをとっても何時間話しても尽きないものだったので。最首さんの話は少し難しかったです。ずっと考え

続けていかなくはならないものだな、と思いました。(神奈川・星名綾)

#### 4 来年のフォーラムへのご意見・ご希望

◆八月六・九日は、広島・長崎の原爆の日です。その日が重なるのと来れないので、重ならないようにして下さい。(長崎・里一美)

◆子どもの世話係をもう少しふやしたほうがいいと思います。全館貸し切りにできるぐらいの会場が、うまく見つかるといいですね。(静岡・丸根枝)

◆ホテルを会場にしての運営なので難しいとは思いますが、豪華で添加物だらけの食事を取りながら、アジアを考えるめぐり合わせの皮肉を思わずにいられません。できたら、子どもの食事、おやつだけでも検討していただけたら、と。(鳥取・山本真澄)

◆家庭科にこだわらず、教育全体のことを語る場がもっとあるといい。私は障害児学級をもっているので、障害児教育について語れるような分科会ができればいいと思う。

◆全体会はいらないのではないか。もしするなら、話を一人二人でしっ放しでなく、対論の場は別に設けるべき。教師はすぐ、教

えこうとする心(教材主義)で、全体会を見ようとしていると思う。教材主義をやめるべき。(兵庫・中村英之)

◆柿田川コースで重川氏と話をし、互いに父子家庭で子どもを残しての参加であることがわかりました。女性の問題や母子家庭については目が向いていますが「父子家庭は経済的に保障されている」という伝説のもと、ほとんど目が向けられていません。「父子家庭の大変さなど他人に分かるか」という結論でした。そんな問題もと取り扱ってはどうか? (東京・長谷観尚)

◆模擬授業や研究発表等もあると思いますが、テーマがどの程度意味をなすのか、テーマ自体本当に必要なものか? お考えいただければ幸いです。(石川・分校淑子)

◆交流の場をできるだけ多く。食事なども立食パーティのような形式では。食べる条件ではなく、できるだけ話し合える場をつくって下さい。(京都・村岡洋子)

◆併行した催しがいろいろあるため、どっちにも行きたいと迷う場面があった。絞った方がいいのかもしれない。メインはたっぷり時間をかけたい。とくにシンポジウム。(埼玉・石川尚子)

## ●編集後記

◆「豪華な食事を食べながらアジアの問題を語るのは…」

と、今年のフォーラムで参加者の口について何度か出ていた。それほど快適で、ゆつたりと、ここちよい二泊三日。快適であることを逆に間い直すきっかけになった。フォーラムでは、「会場」も重要なポイントに。

◆来年は、是非実行委員になつて、いっしょにフォーラムを作りませんか。(青木)

◆Weの夏季フォーラムも、今年で七回め、回を重ねる毎の充実を嬉しく感じます。

◆全体会は、講師の方々のメッセージのコントラストが鮮烈で、会場とのやりとりも緊迫し白熱した四時間でした。最首さんが語られた「内発的義務」をめぐるの箇所は、

こちらの「思い」の届かぬ子どもたちを目の前にする私たち大人にとって、重要な鍵、と思いました。(相邑)

◆フォーラムでの子どもたちの様子をできるだけ伝えようと、写真をたくさん入れました。ここに載せたのは、しかし陽の部分で、影の部分は買数の都合で省かざるを得ませんでした。いつも子どもたちの人数を数えている蔡さん、たくさん余ってしまったお弁当を詰め替えている鈴木さん、川名さんの写真などなど。どうぞ影の部分も想像力で加味してお読み下さい。(河村)

♥ウィ書房に通い始めてすぐの夏季フォーラムでしたので、参加しませんでした。編集部の皆さんのお話を聞いたり、

参加された方の感想を読んでいる、「来年は参加してみようかな」と思いました。

来年の会場もほぼ決まったとのこと、編集部では、来年の夏季フォーラムに向けて進み出しました。またステキな出会いが、沢山ありますように。(渡辺)

★参加できなかった伊豆長岡フォーラムが、質の高いものであったことは、原稿用紙から立ち昇る勢いでわかりました。最首・松井両氏の説が際立ったシンポジウム、参加者が打ち解ける工夫、家庭科分科会の新しい試み。子ども活動の充実etc。さらに「女の解放・男の解放」分科会から独自の記録集も生まれました。★冬増刊号を読むだけの方、ぜひフォーラムにご参加を、病みつきになりますよ★私も今回はハッキリ。(半田)

### 1989. 夏増刊号 家庭科の可能性を探る

(在庫があります。ご注文は、最寄りの書店「地方小扱い」または、料金をおそえの上、振替で直接ウィ書房へ)

- 新しい家庭科へのLove Call
- 「新しい家庭科」づくり大運動のすすめ他

- 座談会  
新しい家庭科の未来を探るー市民も、共に創る家庭科に

### 1990年 夏増刊号 家庭科が変わるー情報化のうねりの中でー

- コンピュータは家庭科を変ええるか?
- コンピュータ導入への疑問
- コンピュータによる授業の可能性
- 家庭科とコンピュータ

#### 新しい家庭科ー

Vol.9 No.10 1990年12月20日発行  
定価721円(本体700円+税21円)送料共  
年間購読料・定価7107円(本体6900円+税207円)  
編集兼発行人/半田たつ子

#### 発行所/(有)ウィ書房

〒182 東京都調布市西つつじヶ丘2-25-14  
☎・FAX03(326)1380 郵便振替 東京6-59867  
第一勧業銀行 調布仙川支店 普預1075292  
印刷所/(有)岩佐印刷所〒112文京区春日1-6-7

# 家庭科 NETWORKING

ネットワーキング

## あなたも是非お仲間に

「家庭科新時代」がついそこまで来ているというのに、家庭科の先生の顔色は冴えません。黙って手を束ねていれば、私達が願う家庭科とは全く異なるものが上から降りてきます。現場では、日々新しい問題が生まれ、一校に一人か二人の家庭科の先生は、相談する仲間にも恵まれず、研修の時間もままなりません。いきおい、成果の上がった他の人の実践を真似ることにもなりかねません。

今必要なのは、家庭科を何故男女共に学ぶのか、その理念を再確認し、目の生徒に噛み合う授業を創る力を育てることです。自分の問題から出発して、解決の道を探る中で仲間を得、連帯感を強めながら力をつけることを願うのが「家庭科Net working」です。会員の投稿中心の会報を年10回発行し、下記のチューターが相談に乗ります。年会費…3500円、入会費…500円、詳しいことは、ウイ書房内事務局にお問い合わせ下さい。(☎03・326・1380 郵便振替 東京3 413347)

### 〔チューター〕

飯野 こう (小学校家庭科)  
石川 尚子 (高校家庭科)  
井田 恵子 (人権、法律問題)  
一番ヶ瀬康子 (社会福祉、生活問題)  
入江 一恵 (高校家庭科)  
小沢 牧子 (教育の中の心理学)  
小沢 有作 (民衆の教育史、差別問題)  
奥地 圭子 (不登校のこどもの問題)  
香川 敦子 (中学校技術・家庭、生物学)  
加藤 真代 (コンシューマリスト)  
金森トシエ (女性問題、社会一般)  
櫛田 真澄 (中学校技術・家庭)  
桑畑美沙子 (地域と結ぶ家庭科)  
児玉すみ子 (生徒とのコミュニケーション)  
駒野 陽子 (中学校教育、女性問題)  
酒井はるみ (家庭科魅力、家族、フェミニズム)  
佐々木 賢 (学校に魅力を失った生徒の問題)  
庄司 和晃 (民俗学、全面教育学)

田中 恒子 (家庭科教育、住教育)  
土川 礼子 (中学校技術・家庭)  
寺内 定夫 (感性を育てる教育)  
寺島 紘子 (高校家庭科)  
西内みなみ (教科教育としての家庭科)  
福島 澄香 (高校家庭科)  
福田三津夫 (小学校家庭科)  
朴木佳緒留 (家庭科教育とその歴史)  
牧野カツコ (家庭科教育、家族)  
宮崎 礼子 (家庭科教育、経済)  
村瀬 幸浩 (人間と性の教育)  
村田 泰彦 (教育学、家庭科教育)  
森 幸枝 (高校家庭科)  
湯川憲比古 (教育行政、情報化社会論)  
湯沢 静江 (高校家庭科)  
善積 京子 (結婚、女性学、家族問題)  
吉田 紘子 (家庭科教育、衣生活)  
他 (敬称略)